
家路 ルーフェイア・シリーズ16

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家路 ルーフェイア・シリーズ16

【NZコード】

N5976S

【作者名】

「つ」

【あらすじ】

反王道、安易なご都合展開ゼロ。「無情といひ名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ。其処は誰の物なのか。誰の手に渡るのか。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第16弾。前作とは一転、オールスターでの大立ち回り。爽快に行けたらいいな。“夜8時過ぎ”毎日更新です。携帯版は1行毎の改行。r空行です。

Rufener

テストも終わって、あとは春休みを残すだけの昼下がり。あたしはみんなと、食堂でおやつを食べてた。
中は珍しく、人の姿が少なめだ。きっと上級生が、大規模な演習をしてるからだろう。

「やつぱおじいちゃんのケーキ、美味しいよね」

「……ルーフエ、味分かつてないかもー？」

なんかひどい事を言われる。

「でも、美味しいし……」

「え、さあ何人で来るか」「三三三知りてゐる」

答へに詰まつた。

「ほら、やつぱ分かつてない」

ミハ それ咲か分かってないのと 少し違います

な言い方だ。

「せひあなたたち、騒ぐのいゝけどお茶冷めるよ」

「あー！」

慌ててミルがカップに口をつけて、今度はヘンな顔をした。

「あつつい！」

「そりゃい？」

「だよねえ」

シーモアとナティエスは平氣な顔してるけど、ミルは猫舌だったみたいだ。

「あつい！ ゼーつたい熱いつてば！」

「熱くなくちゃ 美味しくないだろ」

「それ違う、シーモアがヘン！」

「なに言つてんだい」

いつもの軽快なやり取りに、つい可笑しくなる。

「あー！ ルーフェ笑つたな！」

「え？ あ、えっと、そういうわけじや……」

慌てて言い訳しようとしたその時、通話石が鳴った。

「あれ、呼び出し？」

「そうみたい……」

でもいい加減授業は片付いてるし、だいいち先輩たちと一緒に教

官も演習島だから、呼び出す人が居ないはずだ。

「何だろね？」

みんなで首を傾げる。

と、ミルが手を叩いて立ち上がった。

Episode : 02

「わかつた、ルーフュが可愛いからだー。」

「違うと思つ……」

そんな理由で呼び出されてたら、学院の女子はみんな常に呼び出される。

けど、みんなの考えは違うみたいだった。

「マジそれかも。だつたらヤバいよ」

「無視したほうがいいんじゃない?」「なんだかす」」台詞が飛び出す。

「でも無視したら、減点……」

「あー、それはあるか」

学校の決まりを破れば減点は当然だけど、教官から呼び出されたのに感じないともつと減点が大きかった。

「あたしなら行かなけどなー」

シーモアがそう言つミルの頭を小突いた。

「いつたあい！」

「普段から迷惑かけまくりのあんたと、一緒にするんじゃなによ」

「えー、どこがー?!」

聞いてるだけで疲れてくる。

「ルーフュ、行つちやいなよ。ミルの話聞いてると、キリ無いから

「うん」

ナティースの言葉に甘えて、急いでケーキを食べて立ち上がる。

食堂の外も、いつもより人影は少なかつた。低学年は少し時間が違つし、高学年は大規模演習で居ない。だから見かけるのは中学年ばかりだ。

こういう感じもいいかな、と思いながら歩いていく。

管理棟も、今日はすごく静かだつた。ただ大規模演習にしては、残つてる教官の数が多い感じだ。

そのことをちょっとだけ不思議に思いながら、教官室のドアをノックする。

「ルーフェイア＝グレイスです」
すぐにドアが開いた。

「遅かつたな」
「すみません……」
やつぱりケーキを全部食べてから来たの、まずかったかもしれない。

「まあいい。こっちへ」
「はい」

どうなるかと思つたけど、それ以上は咎められずに済む。教官は振り返りもせずに、先へ歩いてく。そしてちょっと見ただけじゃ分からないような場所の、鍵のかかつたドアを開けた。
「あの、ここ……？」
「いいから来なさい」
ドアの先は、下へと続く階段だつた。

「……ですか？」

「そうだ」

教官が先に下りていって、首をかしげながらあたしも続いた。

階段は石造りで、かなり古い感じだ。シエラ創設の頃からあったよくな気がする。

階段の終わりは、どう見ても牢屋だった。

こんなものがあつたんだと、感心しながら覗き込む。けど、なんでこんなところ、あたしを案内……？

「……は昔、まだこの島が学院じゃなくて傭兵の養成所だった頃、手に負えない連中を放り込んだそうだ」

「歴史があるんですね」

そういうことだとすると、ぜひとも〇〇年は前だらうか？

教官は何故か呆れたような顔をしながら、説明を続けた。

「穴を掘つて脱走しよつとしたヤツもいたらしいが、何しろ島だからな。逃げようがない」

「ですね」

そういう意味じゃ、囚人を収監するのに向いてるだらう。

「あとここは、結界が張つてあるそうだ。だから魔法は使えない」

「そりなんですか？」

ちよつといつは信じられなかつた。

魔法を完全に無効化する結界なんて、そう簡単に作れるものじやない。それにメンテナンスしなきゃ、だんだん効力が無くなつてしま

まつ。

「この辺の事情を教えて貰わせると、仮にあつたとしても、あんまり効果は高くないだろ?」

と、教官が背筋を伸ばして、急に威圧的な視線になつた。

「ルーフュニア＝グレイス

「は?」

呼ばれて思わず返事をする。

それにしてもこんなところで、あたしに向のよつなんだろ?」

「お前を収監する

「しゅうかん、ですか……?」

言われた言葉は短かつたけど、意味を飲み込むのに時間がかかつた。

「しゅうかんって、ここに入れ……です、よね?」

「そうだ

「えつと、えつと、理由を……」

「ついこのとき対処法はどうだつただろうつかと、一生懸命頭の中のページをめくる。ともかく、理由は訊く権利があつたはずだ。

「理由か? 麻薬の所持疑惑だ」

「え……」

確かにあたしはその手の薬を持っている。でもけやんと学院長には理由を説明して、許可ももらつた。

だいいち今までだつて普通に持つてイザつて時は使つてたのに、いまさら急に「ダメ」とて呟つのもおかしい。
けれどそのことを教官に言おうとして、ふと思つた。

言いがかり、かもしだい。

何でそんなことを思ったのかも、教官がそつする理由も分からない。

けどそういう風で、ともかく書つのをやめる。

もし……もし本当に言いがかりなら、あたしから持つてこないと書つたら、それじゃ利用される。自分で証拠を出すようなものだ。

それによく考えてみれば、教官はあたしの扱いが色々ふつうと異なることは、ある程度まで知つてゐる。なのにいまさら言い出すのはおかしい。

やつぱり、持つてこないと今は今のところ、黙つていろがよそうだった。

少し考えて書つ。

「えつと、学院長に……」

仮にこの教官が知らなくとも、学院長はきちんと分かつてゐる。だから学院長に連絡さえ取つてもらえれば、すぐ片付くはずだ。でも返ってきたのは、予想もしない言葉だった。

「学院長には、連絡できん

思わず首をかしげる。

確かに学院長は、いろいろ用事でシエラを空けてたりする。けど緊急時 シエラは何が起こるかわからない に備えて、いつも連絡が付くようになつてるはずだ。

なのに連絡できないなんて、ふつつの状態じゃない。

「えっと、病気……ですか？　じゃなきゃ、会議とか……」

「お前が知る必要はない」

あたしの中で警告ランプが灯る。

具体的に「何が」とは言えないけど、絶対に何かがおかしい。

「ともかく、いいから入れ。上手く行けば、学院長に面つとめてやる」

「そんな……」

血圧待機ならまだともかく、こんな理由で収監はさすがに横暴すぎる。

けど迷いつて立ち去りしたら怒鳴られた。

「早く入らんか！　入らないなら、減点だぞ」

言つてることがメチャクチャだ。

教官に従わないから減点、それそのものは分かる。けどあたしが麻薬を持つてるかどうかは、今の時点ではちゃんと分かつてはしないんだろ。そうじやなかつたら、「容疑」なんて言わない。

どっちにしても、上手く立ち回らないと大変なことになりそうだ。

「早くしろ！」

「はー」

気は進まないけど、牢の中へ自分から入る。

「武器は持つてないな」

「持つてません」

食堂で食事してすぐ戻るつもりだったから、珍しく武器は持っていない。でも今度からは絶対持つていようと内心思った。

まあ今回の場合は、持つても取り上げられるだろうけど……。

音を立てて、鉄格子の扉が閉まる。

「そういえば牢屋って、何で鉄格子なんだらつへ。何故かそんな、つまらない疑問が頭に浮かんだ。

教官のほうはほつとした顔で、通話口ごどごどに連絡してゐる。
「はい、ええ、確保しました。今は牢の中です」
学院内でふつうにおやつ食べて、「確保」なんて、やっぱり納得
が行かなかつた。これじゃ何だつて理由になる。

教官の話は続いて、耳をそばだてる。

「武器は持つていなにようです。とりあえず大人しくしていませ」
いつそ暴れてみようか……とも思った。教官を巻き込むのさえ気
にしなければ、このくらこどりにかかるはずだ。

話はまだ続いてた。

「え？　あ、それはまだ……はい、言つておきます」
教官がこつちを向いた。通話が終わつたらしく。

「言つておぐが」
「はい」

きっと、言い忘れたのを指摘されてた件だろつ。

「……はい」

釘を刺して何の意味があるんだらつと思いながら、返事する。

「もし出たら、イマド＝ザーニスが収監されると思え」

「え？」

頭が回らない。

あたしがあたし自身の「」とで収監されるなら、まだ分かる。けど
イマドは関係ないはずだ。

「あの、どうして」

「お前が知る必要はない」

それだけ言って、教官は行ってしまった。
地下に独り、取り残される。

ビハシヨウ。

あたしは中を見回した。

よくある鉄格子に、錠前。残る三方はがっちらりした石壁だ。
どういうわけか、天井はかなり高い。あたしの背丈の三倍以上あ
るだろう。そして天井近くに、明り取りらしい小窓があった。

「セレスティアル・レイメント」

呪文を唱えて、石組みの壁に手を掛ける。

「……あれ？」

昇ろうとして、あたしは違和感に気づいた。魔法の威力がいつも
より弱い。

これだと上まで昇るにしても、そう何度もは出来なそうだ。

辺りを見回したけど、ロープ代わりに出来そうなものもなかった。これだと、あの窓から出るのは難しいだろ。

「えつと……」

いつも持ってるポーチを開ける。けど学内でこんなことになるとは思ってなかつたから、大した物は入つてなかつた。
魔法で強化したごく細い紐と糸が入つてゐるけど、これで上り下りはちょっと辛いだろ。

そして氣づく。

なんであたし、素直にこいつ入つちゃつたんだろ。

よく考えてみれば理由は言ひがかりだし、やたらと学院に寄付してゐる母さんに知れたら大騒ぎになる。だからその辺を言えば、別に入らなくてよかつたはずだ。

よつぽどあたし、気が動転してたらしく。

ただ、今それを言つてもムダだろ。自分で墓穴を掘つたようなものだけど、この状況を何とかするのが一番先だ。

それにも、なんでわざわざ閉じ込めたのか、その理由が分からぬ。

麻薬所持つて言つてたけど、あたしが持つてゐるのは要は痛み止めだ。

シユマーの体質のせいで、あたしはふつうの薬はまず効かない。だから必要な薬は自分で持つてないと、イザと言つときには困る。そ

うこう理由だ。しかもこのことは学院に最初から伝えてあるし、学院長の許可も出ている。

だいいち今までずっと持つてたんだから、今頃問題になるほうがおかしい。だから、この罪状は後付けだわ。だとしたら、何のために……？

教官たちが、あたしを自由にしておきたくないのは間違いない。何が理由かは分からないけど、いつもうるさいと困るんだろう。けどそれだけなら、自室待機で済むはずだ。あまり楽しくはないけど、でもそう言われたら、あたしはいつも従つてる。

なのに閉じ込めてるんだから、自室待機じゃ足りないってことだ。「脱走したら代わりにイマドを収監する」って脅してまでいるんだから、よっぽど閉じ込めておきたいんだわ。ともかく状況を整理してみる。

食堂でおやつを食べてたところでは、取り立てて何かあったようにも思えない。

強いて言えば、今日は先輩たちが本島に居ないってくらいだ。この時期はいつも夜間まで含めた大規模な演習をしてて、上級生と傭兵隊の候補生、つまりあたしたちより上が全部居なくなる。

この時期狙われたら、ヤだな。

ふとそんなことを思った。

誰が狙うんだと訊かれたら困ってしまうけど、上級生と教官が居ないこの時期は、このシエラは要するに戦力不足だ。だからもし狙われたらロクに戦えない下級生ばかりで、ひとたまりもないだろう。

どうにか戦力になりそつなのは、一番上の学年のあたしたちくらい。でもAクラス以外は、やっぱり力不足だ。

しかもそのAクラスも、実質的に戦力って言えそつなのは、実戦経験のあるあたし、イマド、シーモア、ミル、ナティエス、この辺だろうか？でもこれだけかなり甘い見積もりで、実際に使えるのは、あたしとイマドだけじゃないかつて気もする。

そこまで考えて気づいた。

「もしかして、戦力低下狙い……？」

これだと何となく、筋が通る気がする。

あたしがよく分からぬ理由でここへ呼び出されたり、常に連絡がつくはずの学院長と連絡がつかなかつたり、何か起こつてるのは間違いない。しかもそれが、コントロールしづらい上級生が不在の間に起こつてる。

偶然と言つには出来すぎだ。このタイミングを狙つて、と考えたほうがいい。

そういえば今日は、教官たちもほとんどが訓練島へ行つてて不在のはずだ。いつもの年は行かないムアカ先生も、何故か今年は行くことになつたと、診療所を休みにしてた。

残つてるのはあんまり評判のよくない、嫌なタイプの教官だけだ。いつもの年は下級生に好かれてる先生たちが残るのに、今年はメンバーがぜんぜん違う。

ナティエスに話を聞きたいた、と思った。彼女はそういう、先生同士の力関係とか生徒同士の勢力図とか、そういう噂に詳しい。だ

から顔ぶれを見れば、何か情報が出てきそうだ。

いずれにせよ「何か」起こってるのは確実だから、ここから出られるようにしておいたほうがいいだろ？

まず錠前を調べてみる。

「あれ、これ……」

つい声が出て、誰も聞いてないかとあたしは辺りを見回した。けど幸いさつきの教官が出てつたきり、人の気配はない。聞いてた人は居なそ？

錠前は、昔からある古いタイプのものだった。これなら開けられる。

シーラで開錠を教えるのは10年生以上で、あたしたちは新学期からだ。だから本来なら、あたしたちの学年は知らない。

けどこの学院にはいろんな子が集まってるわけで……中でもスマッシュ育ちのシーモアは、ふつうに育つたら覚えなにようなことをたくさん知つてた。開錠の技術もそのひとつだ。

それをイマドが教わって、さらにこの間あたしが教えてもらつて。だからこの程度なら、何とか開けられる。

もしかしたら魔法でも施錠されてるかもしれないけど、そっちはあたしは前から開けられる。ここじゃ魔力が弱まるみたいだけど、全く使えないわけじゃないから、何とかなるだろ？

教官も甘いな、と思った。

もちろん鍵があたしでも開けられる物だったのは、幸運だったってだけだ。でもイザとなつたら被害無視で牢ごと壊す方法もあるから、これじゃ完全に閉じ込めたことにはならない。

あたしを収監したかったのは分かるけど、だつたらもうと厳重に
したほうがいいと思う。

ただ出られるって分かつても、イマジの血の安全が確認できな
い
うむ、動けないのだけど……。

Natties

午後のお茶終わって、それからレポートの資料漁りを図書館でし
て。だからあたしが部屋に戻ったときは、もうだいぶ日が傾いてた。

「ただいま……あれ？」

開けた寮の部屋の中は、がらんぱいで。居ると想つたルーフェの姿、
なかつたの。

「ルーフェー？」

彼女のベッドルームも覗いてみたけど、やつぱり姿はない。

「……訓練でも行つたかな？」

夕方はルーフェ、よく訓練島へ行つちやう。

歴史のレポートの」と、今のうちに記したかったんだけどな。

ルーフェはともかく成績よくて、中でも歴史は得意だから、教わ
るにはうつつけ。訊けば概要、すらすら答えてくれる。だからそ
れ書き留めて参考にして、そこから資料当たれば間に合つちゃう。
けど、居ないんじゃしちゃうがな。

あたしは机の前で、持つてきた本を開いた。でもなんだか用語や
ら年代やらが、読んでるだけこんがらかっちゃつたり。

それでも頑張つて、ひとつひとつ整理しながら読んでたけど、だ
んだん疲れてくる。

「やっぱ、解説ないとダメー」

誰も聞いてないけどそんなふうに言つて、本を机の上に置いた。

思つたより本を読むのに時間がかかつたみたいで、窓の外はすっかり夕暮れだた。

なんか甘いものでも食べよつ。そう思つて立ち上がる。

小さなキッチン つて言つよりちょっと広い洗面所 の戸棚
開けると、ビンの中にはまだ、キャンディーがいっぱい入つてた。
役得だなー、とちよつと思つ。

ルーフュのお母さんつて、すゞくいい人。あしたたちがきっと困つてるだらうつて、こうやってルーフュを通じて、お菓子とか送つてくれる。だから相部屋のあたし、甘いものに困らなかつた。

他の生徒にはもちろん内緒。部屋でいつでも食べられるなんて分かつたら、何されるか分かんないから。

もちろんちゃんとお手そ分けしてるけど、この部屋ほどには食べられないから、余計なことは黙つてるに限る。

でも「飯前だから、そう思つてキャンディーは一つで終わりにしたの。

あれ？

「飯前つてことは、もう日が暮れるつてこと。

で、訓練島が使えるのは日暮れまでで、その後は最後の便が本島へ向けて出発して、無になつちゃう。そうなつたら一晩帰れない。

だから誰が訓練島へ来たかは全部チェックしてるし、最後の便で全員返すのが決まり。

なのに、まだルーフュは帰つてこなくて……。

なんだか急に心配になつて、もう一回彼女のベッドルームを覗いてみる。

「え？」

目に入ったもの見て、あたし思わず声上げちゃったの。
だって部屋にあるの、ルーフェの太刀。
もし訓練島へ行つたなら、これを置いてくワケない。ルーフェじ
やそんなことありえない。

「どー、行つちやつたの……？」「
よく分かんない。けど絶対おかしい。

ルーフェ、何しろ真面目。だからふらふらどうか遊びに行つちや
つたりしない。たまーに任務とかで急に居なくなるけど、そういう
時は太刀は必ず持つてくし。
ともかく、ルーフェの身に何かあつたのは確か。

「イマド、探さなくちゃ。」

ルーフェを探し出すなら、ぜつたい彼。何しろルーフェがどこの
居ても分かるんだから、ちょっと凄すぎ。

「えつと……」

でも部屋出て男子寮に向かう前に、思いついてシーモアのところへ。
ドアをノックする。

「なんだい　ってナティか。早いけど夕飯でも行くのかい？」

「ううん、そりゃなくて。えーと、入つていー？」

口ではそう言いながら、返事を待たずに部屋に入った。

「何があつたのかい？」

「それがね……」

部屋で気づいたことを、順番にシーモアに話す。

「太刀が置きつ放しひてのは、さすがにあり得ないな
でしょ？だから、何かあつたんじやないかなって
あたしの推理に、シーモアも頷いた。

「あり得るね。探しに行くかい？」

「うん」

じゃあ、と言ひて、シーモアが部屋を出て。
ただどこをどう探しにいかは、ぜんぜんわからなかつた。

「んー、まずはやっぱイマドかね」

「かも。彼いれば、ルーフェすぐ見つかるし」

けど、男子寮にイマドは居なかつた。

取り次いでくれた人が言つては、部屋どころか寮のどこにもいな
いみたい。

「調理室かなあ……？」

イマドが居る確率が高いの、部屋の次がこれ。料理が得意だから、
よく調理室で何か作つてる。

ただ、今は居ないんじゃないかな、と思つた。

ずっと前は知らないけど、今のイマド、調理室に行くのはルーフ
エに何か作つてあげるとき。でも肝心のルーフェが居ないのに、わ
ざわざ作るなんて思えない。

「……こじもハズレか」

案の定、調理室の中には誰も居なかつた。

「こりや、本格的に探したほうがよさそうだね」

「うん。……あ、あたしちょつと、部屋戻つてルーフェの太刀持つてくる」

シーモアに言い置いて、一旦部屋に戻つて。
あつちこつち探してゐる間に、すっかり日は落ちてた。もうすぐ真
っ暗になつちやうはず。

急いであたし部屋に戻つて、ルーフェの太刀持つて取つて返した。

「ごめん、お待たせ」

「だいじょぶだよ。で、どこ行こつか」

シーモアと相談。そのときふつとあたし、思いついた。

「ねえ、ルーフェとイマド、ホントに本島に居るよね？」

「居るんじゃないかな？　あーでも分かんないか。んじや船着場で訊
いてみるかい？」

シーモアの提案で、桟橋まで行つてみて。

「ルーフェイアとイマド？　いや、あの子たちは今日は見てないね
それが答えだつた。連絡船の人も桟橋の管理してゐる人も、誰も2
人を見てないって言つ。

「やつぱ本島の中か」

「でもどこだろ？」

部屋には居ないし、調理室も居ない。

意外と、知らないんだ。

ルーフェのこともイマドのことも、ずっとクラスが一緒にだから、結構知つてると思つてた。けどこうなつてみると、どこにいるかさえ思いつかない。

なのに「知つてる」って思つてたことが、ちょっとショック。

「図書館、覗いてみる？」

「だね。イマドはともかく、ルーフェが居るかもしれないし、また取つて返して、今度は図書館へ。
ここも人がまばらだった。よく利用してる上級生たちが居ないから、どこもかしこも空いてる感じ。
ただ、思いがけない姿があつた。

「アーマルにヴィオレイ？ 珍しい、何してんのさ」

「あー、こいつの追試」

「言つなよ！」

話聞いて、なるほどと思つたり。アーマルって学科によつて成績が極端で、だからAクラスの中じや成績下のほう。けどBクラスよりは出来るから、すつごい微妙な位置。そんなわけで、毎回追試で何とかクリアしてる。

「明日、最後の追試なんだってさ」

「なる。ところであんたら、イマド見なかつたかい？」
シーモアが質問して。

「寮は？」

「居なかつた」

「じゃあ調理室」

「そこもハズレ」

2人が考え込んだ。

「どつちも居ないとなると、どーだろな」

「んー、あとは海岸とか……」

せんぜん考えてなかつた場所が飛び出してきた。

「海岸つて、訓練施設の奥の秘密の？」

「あ、そこじやねーよ。船着場の奥の、岩迫つて行けるぼり」
そこはあたしも知つてた。滑つて危ないから禁止つてなつてるけど、けつこうみんな遊びに行く。もちろんあたしも行つたことがあるの。

「あんなとこ、あいつ行くのか。知らなかつたよ」

「イマド、かつこう行つてるぜ。よくあそこでデルピスと遊んでる

「へえ……」

すつぐ意外。あいつがそんなど遊ぶ趣味あるとか、せんぜん思わなかつた。

デルピスつていうのは、けつこう大きい海の生き物。ぱつと見た感じ魚みたいなんだけど、あたしたちと同じ動物だつて話。ちよつとそつは思えないけど。

ただ魚と違つて、すつぐ頭がいい。漁に使うといひもあるつて言つ。

「これから行くのか？ けど、お前らがアイツ探すなんてどーした
んだよ」

「それがね……」

起こったことを話す。

「んじゃ、ルーチャンが行方不明？」

「そうって決まったわけじゃないけど、なんかちよつと、気になつ
ちゃつて」

「そう。ルーフェに何かあつた、って決まったわけじゃない。でも
どうしても気になつちゃう。そのこと話したら、アーマルとヴィオ
レイがうんうん言いながら頷いてくれた。」

「分かる分かる、一度そつそつと、居場所確認するまで落ちつかな
いよ」

「いやオマエの場合、そつそつのルーフェイア限定だし……」

「当たり前じゃないか！」

2人のいつものやり取り。それ見てちょっと笑つたら、なんだか
気持ちが落ち着いたかも。

「そしたらあんたら、イマどんとこ行つてもらつていいくかな？ あ
たしらまた、ルーフェ探してみるよ」

「ん、分かつた」

シーモアにそう答えて図書館出てこつとした2人を、あたし呼び
止めた。

「ちょっと待つて、あのね、これ持つてつて
ルーフェの部屋から持ち出した太刀を差し出す。

「なんで？ お前らがルーチャン探すんだから、そっちで持つてたほうがいいんじゃないかな？」

「そうなんだけど……。でもなんか、持つてもらったほうがいい気がして」

自分で何でかよく分かんない。ナビ、そんな気がしてしょうがないの。

「よく分かんねーけど、んじゃ持つてくよ。サイアクでもイマドに渡せば、ルーフェイアの手に行きそうだし」

アーマルが不思議そうな顔しながらも、受け取ってくれて。

「うん、お願い。ルーフュより、イマドのまつが見つかりやすい気がするから」

「あー、それはあるね。んじゃ、ちょっと行つてくれる

アーマルとヴィオレイが走り出す。

夕闇に2人の姿が消えた。

「さて、あたしらも行くか

「うん。でも、どこ行く？

これが問題。

ルーフュの行きそなといつて、実はかなり限られてる。教室、図書館、夕方の訓練島、イマドと一緒に調理室、あとは自分の部屋くらい。

「あの子、行動範囲狭いんだけどねえ」「だから心配なんじゃない」

ミルみたいに、いつつもふらふらびりか行つちゃう子なら、心配なんてぜつたいしない。というか、ミルなんて心配するだけムダ。けどルーフェはぜつたい、そういう子じゃないわけで……そりや、バトルは強いけど。

そこまで思つてほつとする。

「よく考えたら……心配するだけ、ムダだつたかも？」

「なんだい急に」

シーモアの呆れ顔。でも当たり前かも。

「せつきまであんたが、やたら心配してたんじやないのかい？」
「そつなんだけど、よく考えたらルーフェ、危ないことつて無いかも……」

大人しくて小柄で華奢で泣き虫だからつい忘れるけど、あの子に危害加えられる人なんて、ほんдинいはず。その証拠にアヴァンに任務で行つたときも、2回ともあの子だけで、あらかた片付けちやつてるし。

「まあ確かに、あの子じやね。寝てたつてヘタに近寄れない」「でしょ」

なんだかちよつと脱力。馬鹿みたい。

「よく考えたらルーフェなんだよね……ああもう、本氣で心配したんだけどな」

自分に腹が立つてきちゃう。あの子が学年主席どころか上級隊並なの、何で忘れてたんだろ？

「けどひ、居ない理由は氣になるね」

「…………うん」

そこはあたしも同意。黙つていなくなるよつな子じゃないし。

「教官に呼ばれて、それつきりだもんね」「そこなんだよね……へンな目に遭わされてなきゃいいんだけど」

ルーフェッたらほんと、自分が美少女だって自覚ないの。危なっかしいつたらありやしない。

まあさすがに身体に触られる事態になれば、返り討ちに出来るだらうつねだ。

「教官に呼ばれてそれつきりだから、もしかしてずっと説教されてるとか」

「えー、ルーフェッじゃそれはないです」

夏休みが始まる前に宿題終わらせちゃうよつな子、ビームを怒ればいいんだか分かんない。

「どうしよう、とつあえず一回寮戻る?」

「だね。ここでこーしてたつてしゃあないし、もしかしたらルーフェも戻ってるかも」

そうして寮のまつへ歩き出せりつとして……シーモアがあたしのことを止めたの。

「どうしたの?」

「まつちだ」

彼女の後ろにまつついで、物陰へと身を隠して。

「ほんとにまつしたの?」

「まつ、あれ」

シーモアの指差したのは寮の入り口で、でもなんか、いつもと雰囲気が違った。何でか分かんないけど、何人の教官が物々しい感

じで立つてゐる。

あといつもと違つのが、下級生が並ばれてゐた。」

「暗くなつてから集合?」

「そりやおかしいぢやないか。だいいちよほどの事がなきや、下級生なんて着替えさせたりしないだら」「

そう言われちゃうと、ちよつと反論出来なかつたり。

寮の入り口はその間もてんやわんやで、最後は教官、並べるのは諦めたみたい。何人かの下級生をひとまとめにして、講堂のほうへ連れてつてゐる。

何がしたいんだろ?

ホントにそこが分かんない。

これから夕食時だつて言つのに、下級生を集めて講堂に。そんなことしたら、大騒ぎになつちゃうのが目に見えてるのに。

ともかくそのまま隠れて、教官と下級生どが行き過ぎののを待つて。

「もういいかね」

「うん」

人影がなくなつたのを見計らつて、物陰から出る。

「あれ、なんだつたんだろ?」

「さあ? 教官達に直接聞いとくれ」

意味不明の出来事に2人で首捻りながら歩き始めたとき。

「お前達、なんでここに居る?」

あたしたち、後ろから声をかけられた。

Arma1

「なあ、ルーちゃんどこに行つたのかな？」

「俺に訊かれても分かんねーよ。つか、早くイマド探そうぜ」
シーモアにナティエスと分かれて俺ら、暗くなつた道を歩いていた。

走るのは早々にヤメ。疲れるし。
手には、預かつた太刀。

けつこう、重いんだな。

見た目が華奢に見える武器だけビ、手にしてみるとずっしり来る。
これを樂々振り回すんだから、ルーフェイアはやっぱ桁外れだ。

「やっぱ気になるな。ルーちゃん探しに行こうかな
「だからそれ後で」

ヴィオレイのヤツ、さつきから思考が脱線しまくりだ。ルーフェ
イアのことばつか気にして、すぐどつかへふらふら行きそうになる。

「でもさ、イマドはほら男子だから放つておいていいだろ？　だか

らルーちゃん……」

「イマド探さねーと、ルーフェイアも見つからないつて

「あ……」

ヴィオレイのヤツ、頭の中ルーフェイアのことばつかで、肝心の
こと抜けてるし。

しつかしホント、イマドは変わつてゐる。他人の居場所が分かると
か、人間業じやない。

何でかはよく知らなかつた。でもアイツ、いんこりへンなとこが
あるヤツだから、こういう芸当も出来んだろ？。

船着場が見えてくる。

でも、ギリギリのところで俺ら、左へ折れた。崖下の着場沿つて歩いてく。

こいつの間にか日は完全に沈んで、月明かりの世界になつてた。でも今日は用が大きいから、明るくて楽だ。

「あー、やっぱ居た」

暗い海に突き出た黒い着場の上に、人影があつた。

「おーい、イマドー」

「なんだお前ら、2人揃つて」

いつもの軽口が返つてくる。

「イマドーじゃ、こんなところで何してんだよ

「んー、あいつらと話してた」

同時に水音立てて、黒い姿が海から宙へ飛び上がる。

「デルピスかー」

「頭いいんだぜ」

確かに俺も、そんな話は聞いたことあった。けど、会話をすると
なんか余計にワケわかんなくなつてくる。
か絶対イマドだけだ。

「あいつら、人間の言葉分かるのか？」

「んー、それとは違うかな。通じるけどな
なんか余計にワケわかんなくなつてくる。

「で、お前ら揃って何しに来たんだよ」

「いや、それがさ」

なんせ伝言の伝言。俺もよく分かってなかつたりする。

「なんかシーモアヒナティエスが言つては、午後ルーフェイアが教官に呼び出して食らつたらしくて」

「あいつが？ 何で」

「そこはオレもワカソネ」

分かつてりや苦労しないし。

「ともかくさ、ルーチャンが呼び出された後、行方不明なんだよ

「まだどつか、任務で行つたんじゃねーのか？」

イマドのヤツ、案外冷静だ。ルーフェイアに向かあつたつて聞いた瞬間、血相変えると悟つたのに。

「それがさ、シーモアが言つては、ルーチャン本当からばないつて

「マジか、それ」

「こひ来てやつと、イマドの顔色変わつた。俺らじやなくして、どうかあらぬ方向見て、何か考えてる。

「イマド、だいじょぶか？」

「……あいつが見つかんねー

低いつぶやき。

「見つからないつて、お前いつもルーフェイアの居場所、見つけたよな？」

「ああ」

「イメージの雰囲気が変わる。マジ怒つてる。しつなつたら離れたほうがいい。でか離れないと巻き添え食らってヤバい。」

「い、イメージ、落ち着け、な？」

「るひせーな。お前らここに『歸ろよ』

完全にブチ切れてるし。

けどこれで、ルーフェイアになんかあったのは確定だ。んじゃな
れや、イメージこんなに怒つたりしない。

ただいこのか悪いのか、ヴィオレイが相変わらずだった。

「イメージ、とりあえず説明しひよ。ルーチさんに何があつたんだ？」
「分かんね。けど、アイツの気配がやたら薄いから、ビックヘンな
場所に居るんだろう」

「へんな場所……？」

ヴィオレイと2人、首をかしげる。

そりや確かにこの学院古いから、妙なウワサになつてる場所とか
あるけど。でもイメージが言つてんのは、たぶんそーゆーのじゃない
だろう。

「それってど二だ？」

「分かりや行くつての。ただなんか、おかしいんだよな。建物ン中
じゃなくて、その下つづーか……」

「下つづー？」

意味不明だ。ふつう建物の下なんて、床下だけだ。
けどこくらなんだつて、そんなところへは潜り込まないだろ？」

「地面でも掘つて、隠れてんのか?」「

「知るか。てか、ルーフュニアの反応すっげー弱え。こんなん初め
てだ」

「……どーゆー頭してんだお前」

こんな謎台詞言つヤツ、イマド以外絶対居ない。

けど当の本人は聞いてなかつたみたいで、俺らに構わらず歩き出した。

「どー行くんだよ

「探すに決まつてんだろ」

ぶつきあはうな言い方は、ここつ怒つてるときの特徴だ。

「待てって、落ち着けよ

いつもイマドのヤツ冷静なのに、今日は俺らが止める側になる。

「何でだよ
「いやだつて学院、様子おかしいぜ? なんかこう、上手く言へな
いけどいつもと違つつーか
「……」

イマドが黙つて、何かを聴くみたいな顔になつた。

「ううとき大抵こいつは、音じやないものを聴いてる。俺らこ
は聞こえないものを、イマドはいつも情報源にしてた。

「……確かになんかヘンだな。静か過ぎる」

「上級生がいないからじゃ?」

ヴィオレイが横から口挟んだ。

「今日は泊りがけで演習だる。だから本島、人口少ないよ。食堂とか図書館とか、ガラガラだつたし」

「いや、そゆのと違う」

イマドが言い切る。

「何が違うんだ？」

「チビどもが大人しいんだよ。ありえねー」

オレはヴィオレイと顔を見合させた。たしかにおかしい。

低学年のチビどもと来たら、普段だつて大騒ぎだ。ましてや上級生がないとなれば騒ぎ放題、毎年大変なことになつてゐる。なのにそいつらが大人しいとか、天地がひっくり返るような話だ。

「あれだな、用心して帰らないとアブないってヤツか」

「ああ」

3人で今度は用心して、辺り伺いながら校舎のほうへ戻る。人が多そうなところへは近づかないよう気をつけて、俺らは様子を伺つた。

「やっぱ静かだよな

「だね……」

いつも何となくワーウーしてゐる校舎なのに、今日はやたらと静まり返つてゐる。

「こつちだな」

イマドがつぶやいて、講堂のほうへ回つてつた。

「ルーチャーさん、ここにいる？」

「いや、そつぞじやねー。チビども」

言にながらイマドが裏手へ行つて、俺らも隠して後に続く。
じみじりく講堂の周りを歩く。けびやつぱり、不思議なぐらい静か
だ。

「どうなつてんだ？」

「オレに訊くな

その時、教官の話し声が聞こえた。

「イマド＝ザーホスは、まだ捕まらないのか？」

「申し訳ありません、この島のどこかに居るのは確かなのですが……」

中での様子に、またみんなで顔を見合わせる。

「捕まるとか、オマエなんかしたのか？」

「してねーよ

イマドがぶつかりぽつに答えた。

「だよなあ……」

確かにコイツ妙なところ多いけど、いきなり捜索されて捕まるよう
なマネはしない。てかメチャクチャ要領よくて、普通なら怒られる
ような状況でも、何か上手く切り抜けちまつ。
その時神妙な顔して、ヴィオレイが言つた。

「もしかして、ルーチャん捕まつたんじや？」

一瞬の空白。

「ま、待てよ。ルーフェイア、それこそ捕まるようなことじゃないじ
ゃんか。超優等生だぞ」

「けどさ、なんか学院おかしいし。イマドを捕まえるとか行つてる
し。それにルーシャン、教官に呼ばれてって……」「
背中を冷たいものが伝つた気がした。

イマドが腕組みして考え込む。

「ルーフェイアのヤツ、まさか地下……か？」

「地下室？ そーいや、あるって話は聞いたことがあるけど
なにせこの学院古いから、俺らも全部は知らない。そしてホント
かどうかはともかく、ヤバい地下室があるとか、他所へ通じる門
特定場所へワープ出来る がある、なんて噂まであった。

その中でも地下室は、かなり信憑性の高い噂つて言われてる。だ
からルーフェイアがそこに閉じ込められてるってのも、十分あり得
る。

ただ、ひとつだけ解せない部分があった。

「もし閉じ込められてるとして、何でだ？」

オレが疑問を口に出すと、イマドとヴィオレイのヤツが考え込む。

「何でって言われてもなあ……」「……

ここがどうしても分からない。

イマドが鼻で笑うみたいにして言った。

「理由なんてビーでもいいっての。教官連中が俺を追っかけまわしてて、ルーフェイアのヤツはいねえ。上級生も不在で、チビジモは静か。こんだけ分かりや十分だ」

「十分つて……」

首捻る俺に、イマドが講堂を指差した。

「覗いてみる」

促されるままに開いてる換気窓探して覗く。そして絶句した。

「なんだよこられ……」

中で低学年が並んで座らされた。列の数からみて、たぶん全員だ。

けど、あり得なかつた。

もう授業はとっくに終わってて、そろそろ夕食の時間だ。なのに食堂じゃなくて講堂へ集めてるなんて、非常事態の時しかない。

てか教官たち、あのチビジモにメシ食わせない氣なんだろか……？
疲れてんだろ？、いちばん小さいチビジモの中には、居眠りして
る姿もある。なのにまだこんなところに座らせてくなんて、まともな
頭の持ち主のやる「ことじやない。

「何とかしないと……」

言いかけたとき、気配を感じた。

同時に鋭い声。

「誰か居るのか！」

思わず3人で身動き止めたけど、もうバレちまつたらしい。

「そここの物陰か？ 動くなよ、お前！」
場所を察した教官がこっち来る。

(……お前ら、その太刀頼むわ)
そう囁いて、不意にイマドが動いた。

大きく両立つように動いて、教官の前へ飛び出す。

「イマドー！」

追いかけようとしたヴィオレイを、掻んで引き止める。

(ダメだ、隠れろ)
(けど……)

不満そうなダチに首を振る。

教官は、さすがに気づいたらしかった。

「イマド＝ザ＝ヒスかー！」

声と一緒に、捕まえようと教官が飛びかかる。
ナビイマドは待つやつ居なかつた。ぱっと身をかわして数歩離れる。

「俺を捕まえようつてんなら、もひとつ早く動かねーと
嘲り全開つて声で、教官を煽つてゐし。

「い、いの……」

ナビのとおりにイマド、更に数歩先だ。

「だから、それじゃ遅いつつてんの」「た
嘲笑いながら駆けてくイマドを、教官たちが追つてつた。

「ぼ、僕たちも行かないと
「やめとけ」
焦るヴィオレイを止める。

「け、けどせ
「オレらが行つたら、足手まといなだけだつて
俺の一言で、ヴィオレイも思い出したらしい。はっとした顔にな
る。

「そ、そうか、そうだっけな
「そゆこと

イマドは人の行動を先読みするから、アイツが本気になつたら誰
も捕まえらんない。なのに俺らがついてつたら、足引っ張るだけだ。

辺りはしんとしてた。

物陰からそーっと様子伺つたけど、誰もいないみたいだ。きっと
イマド追っかけて、教官たちみんな行つちまつたんだう。ううだらう。
そろつと出てみる。でも夜風がそよぐだけで、やつぱり誰も居な
い。

「どうする?……?」

おとなじよひて压ててきた、ヴィオレイが、不安そうな表情で囁く。

「どうする?……?」

俺もヴィオレイも考え込んだ。

ルーフェイアが居なくて、イマドが追っかけられてて、低学年が集められてる。これだけは分かつてると、どうすりゃいいのかが分からない。

「低学年、何とかしなきゃだよな」

「ああ。あと、この太刀渡さないと。頼まれたし
「んじゃ、ルーちゃんの居場所見つけないと……」
少しあることが見えてくる。

「そしたら、ともかくルーフェイア探してみようぜ。あと、低学年
だな」

「うん。あーでも……」

ヴィオレイが考え込みながら言った。

「先輩達、呼んだほうが」

「何で?」

意味が分からなくて訊き返すと、また考え込みながら二つが言

う。

「よく分かんないんだけど……今、先輩たち居ないだろ?」

「まあ、演習だしな。　　あ」

ヴィオレイの言いたいことを理解した。

「絶対おかしいことが、先輩たちの居ない間に、だもんな」

「うん。狙ってるだろ? だつたら先輩たちに知れたら、困るんじ
やないかな」

一理ある。てか、きつとそつだ。

「んじゃ、この太刀渡して、それから演習島か?」「かな……でもルーカちゃん見つかるかな」

「うーん……」

「こじが問題だ。イマドが言つとおりなら、どつかの地下にいるんだわうけど、それがどこか分からぬいし。

「教室あるとこになかつたっけ?」

「あるけど、あそこじや閉じ込められないと思つぞ……」

俺らのクラスがある校舎の地下室は、だだつ広いだけの場所だ。あんな場所にルーフェイアを置いといたら、全力で魔法使ってどつかの扉ぶち破つて出てくると思つ。

「じゃあ、どこだろ?」

「他にあるんだろうな。図書館か寮か管理棟か自分で言つて、あつと思つ。」

ヴィオレイ

『管理棟!』と俺の声がハモつた。

教室の地下にあるんだから、管理棟の地下にあつたつておかしくない。

「行つて、探してみようぜ」

「待つて、氣をつけないと、教官に見つかるぞ」

イマドを追いかけたから俺ら捕まつてないけど、教官たちがああやつて見回りしてるくらいだ。ルーフェイアを閉じめたとこなんて、もつと厳重なはずだ。

「けどや、行かない」とルーチャさんが

「そだけど……」

俺とヴィオレイ、どうかの話のこともここでから困る。早く行って太刀渡さないとルーフニアは困るだらうし、けど行つたら捕まるつてのも事実だし……。

その時ふと、俺は思い出した。

「そーいや、さつきイマドのヤツがデルピスと遊んでた当場。あそこにへんな話なかつたか?」

「話?」

ヴィオレイが考え込む。

「話つて……ああ、あれか。崖の上のぼりに穴があるやつ」

「ああ」

なにせこの学院ときたら古いから、不思議みたいな話もいくつか伝わってる。んでそん中でいちばん有名なやつが、「学校には地下室があって、殺された女兵士が化けててる」ってヤツだ。

何で有名かつて言つと、船着場周辺から島を見上げると、何かの穴が見えるからだ。だからそこが、噂の地下室じゃないかって言われてる。

けど今まで誰も地下室見てない 教室棟の地下はそれなりに知られてるから除外 から、ただの噂だつても言われてる。

けどこうなつてみると、その噂もけつこうあり難かった。噂がホントかどうかは別として、まずやらなきゃいけないことが見えてくる。

「あの穴、地下室じゃねーかって、イマド言つてたよな
「言つてた。見に行こうぜ」

周囲に気をつけながら物陰から這い出して、講堂を離れる。
遠くじや、なんか人が叫んでるのが聞こえてた。発砲音までする
から、教官たちが相変わらずイマドを追つかけまわしてるらしい。

「　　イマド、完全に遊んでんな

「だなあ」

しかも暗くなってるから、完全にイマドに有利だ。

何でか知らないけど真っ暗闇でも行動できるあいつと、明かりが
なきゃ動けない教官たちとじや差がありすぎる。いくら今夜が月が
大きくて影が落ちるほどでも、勝負になんかならない。

ちょっとだけ教官を氣の毒に思いながら、また船着場へ坂を下り
て、更に脇の岩場へ出る。

「見えるか？」

「何となく……あそこだよな

記憶を頼りに崖を探して、穴らしことこを指差す。

「けつこう、高いんだな

「けど、登れそうじゃないか？」

崖ついていつても、けつこう岩棚とかでつぱりがある。気をつけて
いけば大丈夫そうだ。

「えーっと、太刀なんとかしねーと」

「あ、俺ヒモある

アーマルがポケットから、細いヒモを出した。

「何でこんなもん持つてんだよ」

「授業でほら、エプロン作るってただろ？ それのヒモ、だからってポケット入れなくていい気がするけど、今はそれで助かつてんだから文句は言えない。」

「これだけじゃダメだな……あ、これ使えるか。悪いけどヒモ切るぞ」

「いいやー

制服の上着を脱いで、太刀を包んでヒモで縛る。それから袖口ビウしも残つたヒモで縛り合わせて、斜めに背負えるようにした。

「へえ、上手いもんだな」

「ユーのは得意だし。行くか
手近な岩に手をかける。

「だいじょぶか？」

「平気っぽい。でも場所によつては滑るぞ、『氣をつけ』
2人で声を掛け合いながら、ちょっとづつ登つてくる。

崖は下から見てた以上に割れ目とかでつぱりがあつて、予想よりは登りやすかった。月が明るいのもあって、思ったよりは危なくなっ！

たぶん30分くらいかけて、俺らは崖指す穴へたどり着いた。

「なんで鉄格子？」

田に入つたものが理解できなくて、口から言葉になつてこぼれる。

「これじゃまるで、牢屋じやん

「てか、最初から牢屋かも……」

2人で首ひねりながら中を覗いたけど、真つ暗で何も分からなかつた。

「ちょっと呼んでみよつよ」

「ダメだつて！ もしここが牢屋で見張りが居たら、バレちゃうだろ」

「あ、そつか……。けびじやあ、びいするんだ？」

俺はそれには答えないで、辺りを探つて石ころを拾い上げた。鉄格子から手を差し入れて、中へ落とす。

「なるほどなあ。アーマル案外、頭いいじやん

「案外は余計だつての」

実言つと、この間ケンディクで会えた親戚のじいちゃんから教わつたやり方だ。昔、掴まつた仲間たちに合図するのに、こういう方法を使つたんだつて言つ。もう1個落としてしばらぐ待つ。

「うわっ」

「すげ……」

突然俺らからさう遠くないところで、小さな稻妻が閃いた。それが

2回。

「これ、魔法だよな」

「うん、間違いない」

つまり中に誰か魔法が得意なのがいるわけで、たぶんルーフェイアだ。

また石ころを拾つて、何個か落とす。けど今度はただ落としただけじゃない。

「それ、信号か？」

「習つただろ」

船乗りなんかが使う、光とか音の長短の組み合わせで伝える信号は、けつこう便利だ。んで、これは必ず学院生も習つ。といつか習つてちゃんと覚えないと、前線出たときがヤバい。そして今送つたのは、「無事か」って問い合わせだ。少し待つてると、また稻妻で応答があつた。

「えーっと、ルーフェイア、無事、やつぱル……」

「しつ！」

叫びそうになつたヴィオレイを慌てて黙らせる。

当人も俺の声で気づいたみたいで、はつとした顔で口を噤んだ。

「太刀、渡さないと」

「ああ」

でも覗き込んだ中は、やつぱりよく見えない。ただじつも、窓の位置がかなり高いところにある感じだった。

「これじゃ、差し入れても落ちるな……壊れるかも」

「それはダメだろ」

ヴィオレイの言つとおりだ。大事な太刀が折れたらヤバい。

「ともかく、聞いてみよう」

また石を拾つて、次々落とす。意味は「太刀、ある」だ。
また稻妻の応答。「落として」だった。

「お、落としちゃつていいのかな？」

「ルーフェイアがそういうんだから、だいじょぶだろ……」
心配だけど、大事な武器が傷つくようなマネ、あの子がするとは思えないし。

たすきがけにしてた上着を、片手で何とかはずす。足場が悪くて捕まつてないと危ないから、どうにも不便だ。

「ちょっと、中から太刀出してくれよ」

「分かった」

俺が押さえてる上着リュックの中から、ヴィオレイが太刀を引っ張り出す。

「じゃあ、まず石落として、それからそのまま中」

「了解」

俺の言つたとおりに最初に石が落とされて、次に太刀が押し込まれた。

「平気かな……」

「たぶん……」

なんでか俺まで息を止めて、中の様子に耳をそばだてる。けど、太刀が床にたたきつけられる音はしなかつた。

そしてまた稻妻で、「ありがと」。「う」と。

「よかつた、ルーチャんちゃんに受け取れたんだ。さすがはルーチ
やんだ」

ヴィオレイがひとりで納得する。

俺も胸を撫で下ろしながら言つた。

「降りようぜ、今度は先輩たちに知らせないと」

「あ、そうだつた」

登るときよりずっと時間をかけて、慎重に崖を降つる。だから最初の言わばに戻つたときは、だいぶ時間が過ぎてた。

「こんな時間に、船出してくれるかな」
言いながら歩いてく。けど船着場へ出ようとして、俺は気づいた。

「ヴィオレイ、隠れる」

「え？ う、うん」

変なこと続きのせいだろう、ヴィオレイが俺の言つことすぐ従つて、手近な大岩に隠れる。

船着場のところには教官が居て、連絡艇を任されてる人と何かを話してゐる。

「何話してんだ？」

「知るかよ」

自分だって聞こえてないのに、分かるわけがない。
でもじーっと聞いてるつむ、ほんの少しだけ分かつてきただ。

でもじーつと聞いてる「うち、ほんの少しだけ分かつてきた。」
ここから見てるかぎり、船着場の人はちょつと嫌そうだ。何度も
首を振つて、そのたびに教官が大声を上げる。

(もうちょっと前行かないか?)

(そうだな)

内容が聞きたくて、そろそろつと前へ出る。その時、足が滑つた。

「つ
！」

声は必死に抑えたけど、潮溜まりに突っ込んで盛大に水音が立つ
た。

「誰だ！」
教官が振り向いて、じつちへ歩き出す。

俺は岩にはいつくばつたまま動きを止めた。暗いのと少しくぼんだところに入り込んだのとでまだ見つかってないけど、時間の問題だろう。

その時、海の中から波を割つて、大きな姿が躍り上がつた。

デルピス。

たぶん、イマドが可愛がつてるやつだ。そいつが空中で一回転して、水しづきを上げてまた海の中に沈む。

「なんだ……」

教官はすっかり勘違いしたみたいで小屋のほうへ引き返して、二
言三言船着場の人に行つと、坂道を校舎のほうへ引き上げてつた。

(だいじょぶか?)

小声でヴィオレイが訊いてくる。

(ああ。でも驚いた)

絶妙のタイミングで「テルピスがジャンプしてくれなかつたら、絶対見つかってたはずだ。

なんだか身体から力が抜けて、そーっと元の岩陰へ戻る。と、船着場のほうから人が近づいてきて、当の手前で止まつた。

(み、見つかったんじゃ?)

(見つかってると思う……)

「」で教官に知らされたら、一巻の終わりだ。

「誰かいるのかね?」

声をかけてきたけど、答えるなんて出来るわけない。

俺らがそのまま黙つてると、おじさんは明後日のぼりを見ながら喋りだした。

「ふむ、勘違いか。それにしてもあの連中ときたら、本当に船場の先に隠した船が、見つかなくてよかつた」「

ヴィオレイと顔を見合わせる。

独り言にしちゃ内容がへンだ。だからこれは、きっと俺らに聞かせる氣で、独り言風に言つてるんだろう。

「あいつら、訓練島に知らされたくないから船のカギを全て寄越せなぞと言つて。これじゃ迎えにも行けん。通話石も切りおつたし」

なんだか分からぬけど、状況はよくないらしい。少なくとも本当と訓練島は、分断された状態みたいだ。

「何とか上級生たちに知らせてやりたいが、私ひとりではな……小屋を空けたら怪しまれてしまうし」

要するにこれ、俺らに「知らせに行け」って言つてるわけで。だったらあとは、船の場所だ。そしてきっと、このおじさんは教えてくれるはずだ。

「隠した船が見つかっちゃ困るが……」の岩場の先といつても、ここから直接は行けないし、やつらもさすがに気づかんだろう。頭の中で思い浮かべる。

イマドがよくデルピスと遊んでる岩場の先は、行き止まりだ。渡れる岩がなくなつて、崖だけが続いてる。

「あの先にある洞窟は、岩場からも上からも見えないしな。斜面が他より緩くて降り易いが、まさかやつらが降りたりしないだろうしねえ、と思う。あの先岩場の先、いつも見てただけの場所。そこが実は上から降りられるなんて、ぜんぜん知らなかつた。

「しかも降りるのが、食堂の裏手だからだからな。分かるわけがない」確かにかなり見当違いの場所だ。いくら岩場の先だつて言つても、まだ管理棟の手前になる。なのに管理棟の更に先から斜めに降りるなんて、このおじさん以外知らないんじゃないだろうか。

「まあ、降りるやつなどいないだろうがな」
言つておじさんが肩をくめた。

「まったく、何が副学院長だ。前からいけ好かない男とは思つていったが、この期に及んでもんなことをしでかしあつて……」

おじやんはそのあとも向話をながら、小屋のほづく引を返してつた。

ほつとして、大きな岩に背を預ける。

一緒に居たヴィオレイも、俺と同じように並んで座った。

「どうする?」

「行くしかないだろ」

他に方法があるなんら、俺のほづが訊きたい。

「けどや、もし罷だつたら」

「その時考える」

俺の答えに、コイツが深いため息をついた。

「アーマル、もう少し考えたほうがいいんじゃないかな?」

「考えたつてしょうがないって。それより、ともかくやつてみたほうがいいだろ」

「そりゃそうだけど……」

呆れ変えるヴィオレイを横田に、立ち上がり歩き出す。

「お、おこ、ちょっと待てよ」

「待たないつて。それより、一緒に船、捜しにいかないのか?」

「あ、行く」

ヴィオレイも立ち上がった。

辺りを見回しながら、暗がりを抜けて進む。まだイマドは逃げ回つてゐるらしくて、時々小さい爆発なんかの音が聞こえてた。どうも寮のさうに先、島の奥のほうで追いかけっこしてゐらじこ。

「すゞいな、イマド」

「だよなあ。教官たちがみんなで追つかけてるのに、それから平氣で逃げてんだもんなあ」

実戦経験が豊富なルーフェイアに首席こそ譲つたけど、それまでトップ独走だつただけのことはある。というか、逃げ回るだけなりマドのほうが上かもしれない。

それでも何度も何度か見回りらしい教官の姿は見たけど、物陰に隠れてやり過ぐした。

「食堂の裏つて言つてたよな」

「言つてた。ちょっと茂み入つてみるか」

崖のそばの茂みの中へ、気を付けながら入つてみる。

「うわ、こうなつてたのか」

ヴィオレイが茂みの向こうを覗き込んで声を上げた。

「おい、聞こえるだろ」

「あ、ゴメン」

あんまり悪いと思つてなれどつた声でヴィオレイが言つた。

「まったく、氣をつけろよ……教官に見つかつたらヤバすぎなんつて言つながら、俺も隣へ並んで覗き込んでみた。

「なんだこれ、坂道？」

ヴィオレイじやないけど、俺も思わずそんな言葉が出る。崖は「テルピスが居た辺りと違つて、かなり切り立つてた。けどよく見ると岩肌のでっぱりが、上手い具合に坂か階段みたいになつてる。幅はさすがに広くないけど、気をつければ大丈夫だろう。

「ここ、道なりに降りりじゃいいのか」

「やうだと思う」「う

落ちないように後ろ向きになつて、崖にぶらさがるみたいにして大き田の出っ張りに降りる。

あとはそう難しくなかつた。ジグザグにこなつてるけど一本道を、気をつけながら降りるだけだ。

「あれじゃないか？」

何度もかの折り返しを過ぎたところで、ヴィオレイが俺に言った。

「他に、それっぽいのないしさ」

「そだな」

もう少し先、崖にぽっかり空いた洞窟が見える。

近づいてみると一部は中まで水が入り込んでたけど、ちゃんと歩ける岩場もあつて、奥に確かに船があつた。

けど。

「これ……僕たち使えない気がする」

「俺もそう思う」

見つけた船は手漕ぎだった。

そりゃ授業で一応、船に乗ったことくらいはある。でも波のない湾の中で一回りする程度で、外洋へ出たことなんてなかつた。

「ど、どいつよつ？」

「やるつきやないだろ。通話石使えねえもん」

まず船に乗り込んで、前に教わったことを思い出ししながら備品を確認してみる。けどやっぱり動力はなくて、あるのは櫂が1組と木で出来た幾つかの救命具だけだつた。

「あのオジさん、本当にこれで行く気だつたのかな？」

「いやまあ……慣れてる人なら行けるんじゃねえかな……たぶん」自信ないけど、大昔の人は動力のない船で海を渡つたって言つから、島と島の間くらい行けるだろ？

「どうやって漕ぐんだっけ？」

「その前に、綱解かなきやダメじやね？」

右往左往しながら一つ一つ進めてく。それでもしばりへ経つたころには、2人で漕ぎ出せる状態になつた。

「綱、外すぞ」

「う、うん」

これ解いたら最後、もう戻れなくなるんじやないか。そんな不安を押し殺して、杭に舫つてあつた綱を解く。ゆう、と船が揺れた。

「い、漕がなきや」

「ああ

櫂を両手に持つ。

「ヴィオレイ、オマエ舳先に座つて見ててくれ」

「わ、分かった」

櫂を漕ぐと進行方向に背を向けることになるから、誰かに見ててもらわないところだと進めない。

前に実習したとおりに漕ぐと、イヤになるへりへりゅうへりだけど、船が動いた。

「す」「ー、アーマルやるじゃん、進んでるよ」

「そ、そうか？」

これなら行けるかもしれない。

けどそう思ったのもつかの間、船が斜めに進みだした。

「右、もつと右、ぶつかるー！」

「ー、こっちか？」

「反対だよ、それは左ー！」

ヴィオレイと俺が反対方向を向いてるから、左右が違つて混乱する。

「うわぶつかるー！」

次の瞬間、鈍い音がして俺たちは壁に突っ込んだ。
反動で船が揺れて、危うく落ちそうになる。

「だ、だいじょぶか?」「

「アーマル、気をつけろよ」

「そう言われても……」

何しろやつたことないから、上手くいくわけがない。

「これじゃ僕達、ホントに島まで行けるかな?」

「分かんね……」「

ヘタしたら外洋に出た時点で流されて、漂流するハメになりそうだ。

「い、一回戻るか?」「

「うん、僕もそれがいい気がする」

知らせに行かなきやいけないのは確かだけど、自分たちが遭難したら目も当てられない。

その時、水しぶきが上がった。

同時に何かが笑うような、不思議な音。

「な、なんだ?」

「アーマル、あそこ! デルピスだ!」

言われて振り向くと、差し込んだ月明かりに照らされて、水面にデルピスが頭を出してた。

「さつき、ジャンプしたやつかな……?」

「た、たぶん。イマドと遊んでたし」

こうしてみると、かなりデカい。俺たちの倍くらい身の丈がありそうだ。

そいつがまた、笑うみたいな声たてながら近づいてきて、舟の周

りをぐるぐる泳ぎだした。

「何してるんだろう」

「俺に訊くなよ……」

「イマドならともかく、言葉が通じないヤツの考えてる」となんて分かるワケない。

でも、ヴィオレイはそう思わなかつたらじこ。

「おーい、お前さ、もしかしてイマドの友達なのか?」

海の中に向かつて話しかけてる。

と、デルピスが回るのをやめた。そして舟の近くに寄つてくる。

「あのさ、僕たちこの先のえつと……ほら、あの島まで行きたいんだ」

ヴィオレイが洞窟から見える演習島を指差すと、また笑うみたいな声がした。

「通じてんのか?」

「通じてると思つよ。だつてイマド、いつも普通に話しかけてるし」「それとこれとは絶対違つ……俺はそう思つけど、ヴィオレイはそう思つてないみたいだ。

「あのや、お願ひがあるんだ。この縄引つ張つて、僕たちを連れてつてくれないかな」
言つて舟を岸に航つてた縄をヴィオレイが差し出すと、デルピスが呴えた。

「まじ、やつぱり通じてるんだよー!」

「信じらんねえ……」

それとも人間が気づかなかつただけで、頭がいいデルピスたち、

ずっと昔から俺らの言葉が分かってたんだろう？

がくん、と後に引つ張られた感じがして、舟が動き出した。

「すいーー！ やっぱ早いや」

「たすが、海の生き物だな……」

舟はすぐ洞窟の外へ出て、波を分けてまっすぐ進んでく。櫂で才口オロしてた俺たちとは、エラこ遠いだ。

「あとでお礼、何したらいいかな?」

「……俺じゃなくて、イマドかデルピスに訊いてくれ
なんかもうクラクラしながら俺は返した。イマドとい、ヴィオレ
イといのデルピスとい、常識を足蹴にしそぎだ。

どのくらいこのスピードが出てるのか、舟は暗い海を渡つてく。月明かりに照りされた海面がきらきらして、おどき話の中へ迷い込んだみたいだ。

気がするだけだけど。

教官に追いつけ回されたり、そのついでに爆発があつたりするおどき話なんてさすがにイヤだ。ましてやそれを子供が読むとか、激しくイヤ過ぎる。

「ホント早いね。あと少しで着くよ」

ヴィオレイが感心したような声で言った。

「アーマル、やつぱりこの子にお礼しようつよ

「だからそれは今までで足りつて」

なんでもう、同じ口を何度も訊くんだか。

そうやつてゐるうちに、もう演習島は田の前に迫つてた。デルピスが泳ぐスピードを落としたんだろう、舟の進み方がゆっくりになる。

「せういえば、俺たがどに上陸すりやいいんだ？」

「えつと……どこだ？」

慌てて、肝心なことを忘れてた。

「地図なんて、持つて来てないしな……ヴィオレイ、何やつてんだ？」

何を考えたんだか、デルピスが堅えてる縄をヴィオレイが引つ張つてた。

「うふ、ひつすればデルピスが氣づくと思つて」

「そりゃ氣づくだろうけど、驚くだけじゃないのか？」

けど今回も、デルピスのほうが賢かつたらしく。縄堅えたまま、

舟の横に顔を出す。

「ま、ちゃんと分かってるんだよ。 ねえ、僕達でも楽に浜に上がれるとこ、知ってる？」

またあの笑つてるような声。そして舟の進む向きが変わった。

「一なつてんだよ。

ヴィオレイとこのデルピス、どう見ても会話が成立してる。あり得ない。

舟のほうはその間にも進んで、小さな砂浜へと進路を変えてた。そして最後に、デルピスが綱を放す。

「もうこれ以上は、行けないみたいだね」

「かなり浅くなってるからな。この先まで行くと、戻れなくなるんじゃないかな？」

何しろ俺よりもつぱど大きい身体だ。いくら海はお手の物つて言つても、砂にはまつたら大騒ぎだろう。

「しょうがない、漕ぐか」

最初と同じようになに、俺は舳先に背を向けて座つて櫂を持った。

「じゃあ僕見てる

ヴィオレイが船尾に向かつ。

「あれ、お前押してくれるの?..」

「なんだよ急に」

ワケがわからないことを言われて、俺は聞き返した。

ヴィオレイが振り向いて答える。

「違うよ、デルピスが後ろから押してくれるって」

「……まあ俺も漕ぐわ」

任せておくのは人間としてどうかって気がするから、俺も漕ぎ始める。それにデルピスはあまり浅いここまで行けないだろうから、どうしても最後は漕がなきゃダメだ。

少しづつボートが岸に近づいて、デルピスがついて押すのをやめて、最後は何とか自力で漕ぎ始めた。

波打ち際にボートが乗り上げて、つにに動かなくなる。

「やった、上陸!」

「腕イタイ……てかヴィオレイ、オマエ少しは漕げよ

「えーでも、櫂は一組しかなかったよ

囁かれる。なんだかすっくへ損した気分だ。

「帰りは絶対オマエな

「ほーい

やけに軽い返事しながら、ヴィオレイが砂浜に飛び降りた。
俺も続く。湿った砂に少し足が沈んで、くつきりと靴の跡が残つ
た。

「ほー、どういう地形だっけな」

「僕も良く知らないけど、東西に小高い丘があつて、そこをよく陣
地に使つて聞いた」

「東西か……」

ぐるりと見回すと、海の向こうにケンディクの灯りが見えた。ど
うやら俺、演習島の北側に上陸したらしき。

「あっちが北だから、大雑把にこいつと向ひで東西じゃね?」

南側に向き直つて、左右を指し示す。

「そつか。じゃあどっちかに行けば、間違いなく先輩達とは会える
つてことか」

「だな、行こ。てかこんなことなら、方位磁石でも持つてくる
んだつた」

そんなものが学院内で要りよつくなるなんて思わなかつたけど、
今度からは持つてたほうがよさそうだ。
と、隣のヴィオレイが意外なことを口にした。

「僕持つてるよ? ルーちゃんが前にくれた宝物!」

なにやら誇らしげに胸を張る。

「ほり、これこれ。見てよ凄いだろー。」

「……ああ凄いな。てか早く言え」

何の変哲もない方位磁石に、どつと力が抜けた。この調子でコイ
ツ成績だけは悪くないんだから、すっげー腹が立つ。

「さ、早く行こ。知らせなきゃー。」

「……ああ」

何もしないうちから疲れながら、俺はヴィオレイと一緒に歩き出した。

Lytina

もうひと頑張りすればこはん、そんな時間で、リティーナはうきうきしていた。

「今日はなにかな～？」
つい独り言が口を突く。

この部屋は2人部屋だが、今日は誰もいなかつた。
アウトドア派の同室の同級生は、どこかへ出かけたままだ。きっと直接食堂へ向かうのだろう。

まだ低学年で同級生と同室というのは、実は珍しい話だった。
低学年はたいてい上級生と部屋が一緒だ。そうでないと細かい日常生活で、いろいろと済むことが多い。

だが寮は無限に部屋があるわけではないし、上級生も無限に居るわけではない。だからたまに、こういう組み合わせも起る。
もつとも部屋の少女2人にしてみれば、何故そうなったかはどうでもよかつた。同級生同士で気楽でいい、ただそれだけだ。

時間がたつのが待ち遠しい。その時間になれば、相部屋の友達も帰つて来る。
だがそこで、通話石を通して連絡が入つた。

『下級生は全員、講堂へ集合せよ』

思わず通話石に言い返す。それから「向こうに聞こえない設定で
「そんなあ」

よかつた」とリティーナは思った。

少女の見たところ、シェラの教室には2種類居る。

ひとつは学院長やムアカ先生のように、生徒が大好きな人だ。こういった人々は一緒に居て安心できるし、生徒にも納得できないようなことは言つてこない。

そしてもうひとつは、すぐ偉そうにしている人だ。こいつらはちょっとでも言い返すと大変になるし、いつも納得できない事を命令する。

いま通話石を通して命令してきたのは、きっと偉そうにしているほうだらけ。だからもし聞かれてたら、どれだけ怒られたか分からぬ。

『繰り返す。下級生は全員、講堂へ集合せよ』
命令を聞きながら、何かおかしいと思つた。

リティーナが学院へ来てそろそろ4年になるが、こんなことは初めてだ。しかもこれから夕食というときになんて、どうにも納得が行かない。

しかも「下級生」と言つてゐる。これは上級生以外全員で、つまり今この島に残つてゐる生徒全員、ということになる。

「理由くらい、教えてくれたつていいのに……」

それでも行かなければ減点だ。だから少女はしぶしぶながら部屋を出る。

廊下は生徒でごった返してゐた。しかも口々に不安や不満を言つているから、すごい騒音になつてゐる。

「もう、教官でば何考えてんの？！」

「お腹すいた！ もういい、あたし部屋の食料持つてく！」

「あ、うちも持つてこ」

そんな会話を耳にした生徒たちが、あつという顔をした。

「そうだよね、持つてつちやお」

「私、他の階にも知らせていようかな」

「いっそ、今のうち食べちゃえ」

口から口へと話が伝わり、かなりの数の生徒が一旦部屋へと戻る。

リティーナも一度部屋へ戻った。保冷庫に入っていたソーセージとチーズとミルク、それにテーブルの上にあったパンを急いで食べる。それから怪しまれない程度の小さいポーチに、飴玉やビスケットやチョコレートに入るだけ詰め込んだ。

『もう一度言ひ。下級生は全員、速やかに講堂へ集合せよ』
また通話石から声が聞こえた。さつきよりイライラした感じだ。
もう行かないと危険、そう感じてリティーナは部屋を出た。だが階段の途中で人にぶつかり、足を踏み外す。

「痛たた……」

「だ、大丈夫！？」

周囲が驚いて声を上げる。

「何年生かな？ 立てる？」

見知らぬ上級生が手を貸してくれた。

「足首は？」

「だいじょうぶです」

痛かつただけで、大したことはなさそうだ。

けれど先輩のほうが驚いた顔をした。

「血が出てる…」

「え……？」

指差されたところを見ると、確かに長めの引つかき傷が出来ていた。

「あー、ここは釘じゃない？ 前から危ないと思つてたんだ」「いちおつ診療所行つて、消毒してもらつたほうがいいかも。釘つて良くないつて聞いたもん」

周囲が口々に言つ。

リティーナも最初は平氣だと思つてたが、「良くない」などと聞くとわざわざ心配になつてきた。

「あ、あの、そしたらあたし、診療所に」

「うん、行つてらっしゃい。教官には言つといてあげるから」

親切な先輩に学年と組と名前を伝え、リティーナは途中で列を離れて診療所へと向かつた。なんとなく不安で周囲をうかがいながら暗い道の端を行き……立ち止まる。

診療所の前で、教官富むムアカ先生とが押し問答をしていた。

「ともかくダメ！ 真合の悪い子を、講堂になんて行かせられないわ

」「どうやらこんなところまで、教官たちの生徒集めは及んでいるようだ。」

診療所へ入るに入れず、リティーナは物陰に身を潜めた。

「だいいちね、無理やり連れて行つてこの子が眞面目くなつたら、
どうするつもりなの！」

「……分かつた。ならば」Jで見張らせて貰おつ」

かなり危険な雰囲氣だ。

(どうしよう……)

このまま行つても、きっとあの教官に捕まつてしまふ。
リティーナには、それが良いこととは思えなかつた。理由は上手
く言えないが、今は教官たちは避けたほうがいい氣がする。

しばらく考え込んで、少女は兄に知らせようと思い立つた。

兄のセヴェリーグは上級隊、その中でもトップクラスだ。そのお
かげで妹のリティーナは、他の生徒から一目置かれていた。

その兄は、いま演習島で訓練の最中だ。

いま本島で起こつてることは、たぶん兄は知らないだろう。

理由は簡単で、もし危険があると分かつていたら、兄は自分を放
つてなどおかなかつたらだ。それが違反だらうがなんだらうが構わず、
確実に安全な場所に移動させてくれる。

妹のリティーナから見ても、兄は少々過保護だ。ちょっと姿が見
えなければ大騒ぎをし、熱でも出そつものならケンディクの大病院
に連れて行こうとまでする。

ただ、理由は分かつていた。

自分はよく覚えていないのだが、まだ小さかつたころ家族と一緒に
暮らしていた町は、突然戦火に巻き込まれたという。そして家族

の中で生き残ったのは、兄と自分だけだつたそつだ。
そんなわけで兄は周囲からもからかわれるくらい、自分には過保護だ。

その兄が自分を混乱の中に置いているのだから、知らないに違いない。もし知つていたら訓練など放り出して助けに来ているか、そもそも訓練をすっぽかして自分をどこかへ連れ出している。

だからリティーナは、船着場へと歩き出した。

診療所へ行くときと同じように、周囲に気をつけながら歩く。だが幸い、教官たちとは出会わなかつた。

暗い坂道を降り、船着場の番小屋の明かりに思わず駆け出す。

「あの……」

戸を開くと、中から声がした。

「誰だね？」

「あ、えつと、リティーナ＝マルダーです。その、3年生のAクラスです」

かちやかちやと音がして鍵が開き、扉が開いた。

「お入り、早く」

「はい」

おじさんに促され、慌てて小屋の中へ入る。

「あの、えつと……」

連絡船を出して欲しい、それだけのはずなのに声が出てこない。

おじさんが優しく話しかけてきた。

「よくここまで来られたね。そつとう混乱してるのかな？」

「あ、はい。えっと、生徒全員集められて、でも全員だからまだドタバタして……」

一生懸命伝える。

それからリティーナは、何を聞けばいいか気が付いた。

「学院、どうなつちやつてるんですか？」

「うん、反乱かな。どうも副学院長が、この学院を乗っ取ろうとしてるらしい」

「そんな！」

リティーナは副学院長は嫌いだ。いつでも優しい学院長と違つて、副学院長はお金儲けは上手そうだけど、生徒のことが好きには見えない。

そんな副学院長がいちばん偉い人になつたら、シホラはきっとひどこになるだろ？

「そんなの、絶対ヤです」

「うん、私もだ。学院長は私の大事な友達だし、戦争で片腕、足も悪くした私にこうやって仕事をくれたんだ。恩がありすぎるよ」

この人は信じて大丈夫、そうリティーナは思った。なんだと訊かれたら困るけれど、ウソは言つてないと思うのだ。

このおじさんに頼めば、演習島まで連絡船を出してもらひたるだらう。

「あの、お願ひが……」

「なんだい？」

おじさんが優しい茶色の瞳で、リティーナを覗き込む。どう言おうか迷つてから、少女は口を開いた。

「その、お兄ちゃんにこのこと、知らせたいんです」

「お兄ちゃん……ああ、セヴェリーグか。今日は演習だったね」「はい！」

兄の名前が出され、リティーナは嬉しくなった。兄は上級隊だから、こんなところにまでちゃんと知られている。けれどおじさんの顔が曇つた。

「実はね、船がないんだ」

「え……？」

おじさんが頷いて話し始める。

「少し前に、副学院長が来てね。全ての船の鍵を持つていつてしまつたんだ。だから演習島へ行けないんだよ」

「そんな！」

いまの乗り物はどれも魔力石で動くが、最初は「鍵」と呼ばれる対の小さい魔力石を使って、外から起動させる必要がある。逆に言うとその鍵を無くしてしまふと、動かすことが出来ない。

もつとも魔力が桁外れに強い人だと、そんなものに頼らず強引に起動させることも出来るらしいが……自分にはもちろん、兄でもそれはムリだった。

だから、船での連絡はもうムリだ。他の方法を使うしかない。

少女は必死に考え、もうひとつのやつの方を思い出した。

「そしたら、通話石……」

すぐ思いつかなかつたのは、下級生は私用で使つことが禁止されてゐるからだ。だが返つてきたのは、信じたくない言葉だった。

「私もやつ思つたんだが、繫がらないんだ。さすがに相手も、そのくらいはお見通しらしく」

「そんなん！」

これでは連絡のしよつがない。

「どうすれば……」

「ともかく、学院長が無事がどうか確かめないと。　ああいや、無事だと思つよ」

リティーナが泣き出しちゃひになつたからだろ？、おじさんガ慌てて付け加えた。

「ほんとですか？　学院長、無事なんですね？」

「いや、私も確かめてはいないんだが　でももし学院長に何かあつたなら、それ以上は探さないと思わないかい？」

「あ、そっか」

「やつたら、学院長探さないと　やつさんのおり学院長を捕まえたなら、副学院長たちはわざわざ探したり、生徒達を集めたりしないだろ？、

「やつなんだが、どこにいるか分からぬからね。かといって、ヘタに探し回つて教官たちに見つかってもまずいし

“どうやら、そう簡単な話ではなによつた。

「！」のまま、何にもできないの？」「

「いや、ムアカ先生には知らせられる。これから何とかして行くところだよ。カーロフ先生にも知らせたいが、しつちは演習島だから厳しいな。下級生もなんとかしないといけない。教官たちの配置も調べないと。それからもちろん、学院長の居場所に」

「そんなにいっぴい？」

やることの多さにくらべりしてくる。どれかひとつだけ大変だ。おじさんが優しく笑つてリティーナの頭を撫でた。

「やうだね、いっぴいだ。けどひとつずつ片付けていけば、そのうち終わるさ」

「あ、ですね」

確かにおじさんの言ひとおりだ。順番にやつていけば、どんな問題集だつて終わる。

「えつと、じゃあ最初は、学院長？」

「いや、知らせるほうかな」

おじさんの意見は、リティーナには納得がいかなかつた。

「でも、早く学院長、探さないといけないんでしょ？」

「うん、そうだね。けどいまこの島の中には、教官がたくさん居る。だから1人じゃ危ない」

「あ、そつか……」

何しろシホラの教官たちだ。上級隊でも一対一で勝てる人は殆ど居ない。悔しいけれど兄も勝てない。
ましてや自分では、ひとたまりもないだろう。

「ともかく、診療所へ行つてくるよ。君はここに隠れていなさい」「え、でもあそこ、教官が見張つてます」慌てておじさんに教える。

「本当かい？ だつたらまずいな……。あ、教えてくれてありがとう、知らずに行つて捕まるところだつた」お礼を言われて、リティーナはちよつと嬉しくなつた。言つてしまつてから「怒られたらどうしよう」と思つたのだが、心配のしきだつたようだ。

「それにしてもこいつなると、ゼリーから手をつけるかな」「おじさんが考え込んでしまひ。リティーナも真似して、ゼリーしたらいいか考えてみた。

いくつかやらなくてはいけないことの中で、いちばん簡単そうなのはムアカ先生に知らせることだらう。何しろ先生が診療所にいるのは分かつてゐるのだ。

ただ診療所に入るのが難しい。ヘタに近づくと見張りの教官に見つかつて、きっと講堂へ連れて行かれてしまう。それではダメだ。そのときおじさんが、独り言のよつと言つた。

「そういえば診療所、換気窓があつたな。そこを使えば知らせられるか……？」
「換気窓って、あの教室にある小窓の？」「思い出しつゝ尋ねる。
おじさんが頷いて答えた。

「うん、それと似たようなやつだ。だからセレから手紙でも差し入れれば、きっと伝えられると思う」

だったら、リティーナは思った。

教室にある換気窓は、自分たちにとって遊び場だ。かなり小さいのだが、下級生の小柄な子ならけつこうくぐれる。だからよくみんなで、どれだけ早く潜り抜けられるか、休み時間に競っている。中でも小柄なリティーナは、そこを潜るのが得意だった。

「せしたら、あたし行きます」

「お嬢ちゃんが？ ダメだ、危なすぎる」

反対するおじさんと、リティーナは食い下がった。

「だつて、おじさんじゃ潜れないでしょ？ それにおじさんが見つかつたら大変」

「それはそうだが……」

なおも渋るおじさんに言ふ。

「あたしも、見つかつたらヤだけど。でもあたし見つかっても、講堂へ行くだけだと思う。けどおじさんだと、講堂じゃないと思うし、上手く言えないが、きっとそうだと思います。自分だったらただの迷子で済みそつだが、このおじさんだとヒドい目に遭わされそうだ。

そしてリティーナは、最後の一言を言った。

「それにおじさんだと、足が痛いから遠くは辛そう」

「こりゃ一本取られたな」

怒られるかと思ったが、またおじさんは笑った。

「確かにお嬢ちゃんの言つとおりだ。私じゃ坂道を登りきる前に見つかって、倉庫に入れられてしまうか」

ひとしきり笑つたあと、おじさんが真剣な顔になる。

「私が言つた話は覚えてるかな？ 副学院長のことだ」

「はい、覚えます。学院を乗つ取ろうとしてる、って話ですよね」
「このくらいも覚えられないよつでは、シエラのAクラスには居られない。

おじさんが頷いた。

「うん、その通り。そうしたら、それをムアカ先生に伝えて欲しい。落としたときのことを考えると、メモなんかは渡せないから、しつかり頼むよ」

「はー」

「話が重大だ。自分が間違えたら大変なことになる。

まあ話が単純だから、そう簡単には間違えそうにないが……。

「そしたら、行つてきます」

「あ、待ちなさい」

引き止められて立ち上ると、おじさんが黒っぽい布を持ってきた。

「この布を羽織つていきなさい。もつ印が暮れてるから、かなり見つかりづらくなると思つよ」

「ありがとうございますー！」

たしかに制服の上にこの布を被つて暗がりに隠れたら、そう簡単には見つからないだろつ。

黒と思つた布は受け取つて羽織つてみると、暗い緑色だつた。確かにこれなら、夜は見つかりづらそうだ。

「えつと、行つてきます」

「うん、頼むよ」

おじさんに送られて、暗くなつた外へと出る。

見上げると、星が綺麗だつた。それに今日は満月で明るいから、足元もそんなに苦労しなくて済む。

だが坂を中ほどで来たといひで、向こから来る人影を認めた。慌てて脇の茂みに身を寄せせる。

「全く、生徒は足りないわ、イマドは逃げ回つて捕まらないわ、あいつらと来たら……」

ぶつぶつ言いながら教官が坂を降つてきた。

船着場のおじさんに知らせに行つと思わず体が動いたが、踏みとどまる。ここでやたらと動いても、状況が悪くなるだけだ。それにおじさんなら、きっと上手く切り抜ける。

息を潜めて、教官の姿が遠ざかるのを待つ。動くなら十分に離れてからだ。

「ともかく、あのイマドがいちばん問題だな。あれを何とかしないことには、捜索に手が取られてたまらん

しめた、トリティーナは思った。

兄と仲良しのイマドは、リティーナもよく知っている。そして兄が「あいつが本気になつたら誰も捕まえられない」と言っていたほど、逃げ回るのは得意だ。

そういう人が講堂に拘まつていなければ、すぐリラックキーだろう。きっと何かやれる。

ぶつぶつ言いながら教官が行ってしまったのを確かめて、またリティーナは動き始めた。物陰を伝つて進み、いつもの何倍もの時間をかけて診療所へたどり着く。

出入り口には相変わらず見張りの教官が居た。だからそれに見つからないよう、そつと横手へ回る。

身を低くしながら窓に触つてみると、非常時に脱出口として使うためなのか、換気窓には鍵がかかっていなかつた。

辺りを見回し、音を立てないように慎重に開ける。そして小柄な身体を生かし、リティーナ診療所の中へ滑り込んだ。

たまたま具合が悪くて来ていたのだろう、ベッドで休んでいた生徒がこちらを見て、あつという顔をする。

「リティーナ……？」

寝ていたのは、同室の同級生だ。どこかへ遊びに行つたと思つていたが、来た先はここだつたらしい。

「じーっ」

リティーナは友人に「黙つて」という仕草をしてみせた。ベッドの中の少女もうなづく。

「ニーネット、どうか痛いの？」

「うん、ちょっとお腹。でも薬飲んだら治つたみたい」
そこへムアカ先生が来て、田と口をまん丸にした。

「どうして増えてるのかしら……？」

「せんせ、しーつ」

リティーナの仕草に、先生も慌てて口を押さげる。
それから小声で、少女たちに話しかけてきた。

（こいつたい、どうから？…）

（せんせ、あそこあそこ）

換気窓を指差す。

（なるほどね。私たち大人じゃ通れないから、思いつかなかつたわ）
(ほんとは、船着場のおじさんと考えてくれたの)

それからリティーナは、おじさんに言われたことを伝えた。
ムアカ先生が腕組みをして考え込む。

「副学院長が……でもやつと、何がどうなつてるか分かつたわ。あ
りがとう」

「けど、もしさうなら、ついひびつひびつやけいひのいへ…」
先生に続いて言ったのは、回室のニーネットだ。

「副学院長って、子供キライだもん。ついひびつひびつ、いじめられる
よ」

「あたしもやつ思ひ……」

そのときどきから声が聞こえた。

「へーきへーき」
リティーナはニネットと顔を見合わせ、互いに「自分じゃない」と首を振る。
と、隣のベッドの上、毛布がもそもそと動いた。

「じゃじゃーん、ミルちゃん参上ー」

「……ミル、後輩の前であなた、何をやつてるの」

呆れた先生がたしなめる。

毛布から出てきたのは薄い水色の瞳にふわふわした髪の人だった。
どうやら先輩らしいけど、小柄なせいがあまり年の差がないように見える。

ニネットがびっくりした顔でつぶやいた。

「隣のベッドって、寝てる人いたんだ……」

「んふふ、死んだフリ成功ー」

この先輩、絶対何かが間違ってる。けど当の本人は何も気にしていないらしい。

その先輩が声を落として言つた。

「なんか外がわーわーしてると思つたら、ふうん、副学院長なんだ」「そういうのだけは、聞き耳立ててるんだから……」

先生がまた呆れ顔で言つた。

「だつて面白そしだし」

「面白くないわよ、大変なんだから」

先生と先輩とで、よく分からぬ言い合いが始まった。

「ふうん、大変なんだー。でも、何が大変なの？」
やつぱりこの先輩おかしい。

「そりや、副学院長のことに決まってるでしょう。あとは、学院長
が居ないことね」

水色の瞳をぐるぐるとわせて、先輩がいたずらっぽい顔をした。

「でもセンセ、今は居ないほうがいいんじゃない？」

「え……あ！」

先生がはっとした顔になる。

「確かにそうよね……学院長が見つからないほうが、今はいいんだ
わ」

「んふふ、ミルちゃん頭いいー」

先輩の言葉を聞きながら、内心「どうなんだろ」「リティーナ
は思った。確かに頭はよそそうだけど、激しくどこか間違っている
と思つ。

と、急にまじめな顔になつて、この先輩がひそひそ声にな。

「学院長はね、まだこの島にいると思ってんだ」

「あ、それ間違いないです」

リティーナは答えた。

「ほんとに？」

「ほんとです」

もう一度短く答えてから、先輩に説明を始める。

「あの、あたしあつままで、船着場の小屋について。そこのおじさん、学院長は島の外へ行つてないって」

うんうんと先輩が頷いた。

「だとすると学院長は、この島のどつかと。どこかなー」

分かれば苦労してない。そう思ったがリティーナは言わなかつた。先輩にそんなことを言つなんてよくないし、何よりこの先輩、言つても聞いてくれなそうだ。

そしてその感想を裏切らず、先輩はひとりで勝手に喋つている

「んー、やっぱありそなの、『秘密の場所』？」

「え、あそこですか……」

秘密の場所は、学生に代々伝えられている場所だ。

と言つても、何か特別なものがあるわけではない。訓練施設の奥にある何の変哲もない砂浜だ。ただそこへ行く道がなく、訓練施設の隅に出来た塙の破れ目から半分ジャングル化した林の中を通つて、崖を降りないとたどり着かない。

そのおかげで見回りが来ることもなく、いろいろと教官に知られたくないことをする場合に、こつそり生徒達が使つていた。

とは言え魔獣が放たれている 訓練用といつてもホンモノの中を抜けていくので、時々事故はある。だから低学年のリティーナにしてみると、行くのは命がけの場所でもあつた。

先輩が大きく頷いた。そして大きな声で言つ。

「やっぱどう考へても『秘密の場所』！ あそこならバツチリだ

もん

「ちよっとミル、あなた静かに」

慌ててムアカ先生が止めたが遅かった。外まで響くほどの声が、教官に聞こえたようだ。

診療所の入り口で、遠ざかっていく足音が聞こえた。

「まったくもう、ミル、あなたどうするつもり?」

「えー? あたし何にもしてないしー」

しらばつくれる少女をムアカ先生が叱る。

「そんなワケないでしょー! いま大きな声で言つたじゃないの。これじや学院長が……」

「あれ? あたしどこかなんて、ハツキリ言つてないよー。だいいちセンセ、『秘密の場所』つてどーじ?」

「どーじつて……」

そこで先生が言葉に詰まつた。

「そりいえば『秘密の場所』つて名前は聞くけど、どーだか知らないわ」

「でしょでしょ」

先輩が得意げに胸を張つた。

「みんなで隠してたから、教官じや知らないはずー」

「確かにそうかもね……」

先生がうとうとんと頷きながら考へ込んだ。

「ともかくそりいふことない、早く学院長と会流しないこと

「しなくていいと思ひー」

また予想もしなかつた言葉が飛んできて、みんなで首を捻る。

「ミル、あなたの言ひ方」が分からぬのだけ。さつきあなた、秘密の場所だつて言つてなかつた？」

「うん」

そう答えてから、ミルといふ先輩が何とも言ことづのない腹黒い笑顔になつた。

「でもあたし、秘密の場所に『いる』なんて言つてないよ。わつとそつだと思つ、つては言つたけど」

「あ……」

なんて先輩だらう、トリティーナは思つた。たしかにそつ言つてはいなけれど、こんな言いわけナシだ。

さらに先輩が言つた。

「あの教官は、信じちやつたみたいだけ。けぢれ、自分で『情報』は必ず精査して、『テーマに惑わされない』ように『つて教えてるのにね』言いながらクスクスと笑う様子は、まるで小悪魔だ。ムアカ先生がため息をついた。

「まつたく、あなたつて人は……でもだとしたら、学院長はどう？」

「さあ？」

先輩が首をかしげながら答えた。

ムアカ先生が、また大きくため息をつく。

「本当に知らないのね？」

「知らないでーす」

答える先輩は何故か嬉しそうだ。けど先生はそつは行かない。

「ああもひ、これじゃまた振りだしね」

「それでもないかもー」

先輩が言つのを聞いていふうちに、だんだん混乱してくる。

「あの、先輩……」

さすがにリティーナは声をかけた。

「何かなー？」

訊かれて正直に答える。

「何がなんだか、全く分からないです……」

先輩がけろりと答えた。

「うん、分からないとと思つ」

なんだか力が抜けてくる。分からるのが当たり前だとしたら、今までの話はいつたいどうなるのだろう?

一方で先輩のほうは「機嫌だった。まあ周囲の全員がやつたことに騙されているから、これ以上おもしろいことはないのだろう。だがそれにしたつて、こんなことを言うのはどうかと思つ。呆れ顔のリティーナに気づいたのか、先輩が説明を始めた。

「えーっとね、まず学院長はこの島にいる、だよね?」

「はい」

これだけは確かだ。

「でしょ。まあ他にルートがあつたら別だけど。あとほ、上手く船に隠れて演習島に行つちやつたとかもあり得るけど。でもこの本島にいる可能性大、と」

「ですね……」

なんだか信用できない先輩だが、話の筋は通つていて説明はまだ続いていた。

「じゃあさ、次。なんで学院長、この島にいるのかな?」「え? それはえつと、逃げられなかつたから、とか……」「自分が危ないと分かつてたら、学院長だつてどつへんじやんかへ逃げてるはずだ。けれど先輩は首を振つた。

「ぞんねーん、ちょっと違つと感づな

「違うんですか?」

「うん」

何故か先輩は自信たつぱりだ。
そして偉そうに胸を張つて言ひ。

「学院長、ああこいつ性格だから。生徒だけ置いて逃げるとかしないから」

「あ、そっか」

その点はリティーナにも納得が行く。どうしてと言われても困るが、学院長は自分だけ逃げたりしないはずだ。
ムアカ先生も同意した。

「確かにそうね。学院長はそんなことをするタイプじゃないわ。でも、そうだとしたらどうに……」

「どこにも逃げてないかもねー」

しゃらりと先輩が言つたことがみんな飲み込めず、数秒の間が空く。それからみんなが、あつという顔をした。

「ちょっと待つてミル、つまり学院長は動いてないってこと?」「んー、わかんないー。けどあたしなら、最初だけ隠れて元の部屋かなー。だから学院長もそうするかなーって」

怖い先輩だな、トリティーナは思つた。こんなことをあつさり考え付くなんて、この先輩はよほど悪巧みが得意なのだろう。ただ先生のほうは、そこまでは思わなかつたようだ。

「十分アリとは思つけど、確かめたわけじゃないのね?」

「だってミルちゃん、ここで寝てたしー」

やつぱりこの先輩、時々鋭いことを言つても全体的にはオカシイ。先生がため息をついた。

「どちらにしても、打つ手ナシかしら……困つたわね

「えー、ありますよー」

またクスクス笑いながら先輩が言つた。

先生が驚いた顔で尋ねる。

「あるつて、どんな手が？」

「んー、だからえーっと、学院長がいちばん困ること」

「……ミル、人間の言葉じゃないと分からんだけだ」

口には出さなかつたが、ホントにそつだとリティーナも思つた。先生が言うようにどこかの知らない言葉を使つてるわけではないが、意味が通じないといつては同じかそれ以上だ。

だが先輩は気に入らなかつたらしく、ふうと頬をふくらます。

「ちゃんと説明してるのに

「あれのどこがよ」

言い合いが始まる。傍から見ていると、先生と生徒と言ひより姉と妹だ。

「だいいちね、学院長を助ける相談をしてるのよ？ なのにどうして、困ることをするわけ？」

「えー先生、『する』なんつミルわやん言つてないー」

思わぬ方向へ話が転がる。

「言つてないつて、言つたじやない」

「違うつてば、学院長が困ることを考えれば、どうすれば分かるつて話なの」

「なら最初からわづ言いなさい」

どうやらやつと、話がスタート地点に着いたようだ。ムアカ先生に促されて、先輩が話し始めた。

「それで、何をどうするつもりなわけ？」

「だからだから、今いちばんのは、学院長が困ることでしょ？」

「それはさつき聞いたわね」

また堂々通りだ。よくムアカ先生は耐えていのと思つ。

「で、結局どうするの？」

「だから、学院長が困らなくすれば何とかなるー」

ここまで聞いても、リティーナには言いたい事がさっぱりだつた。何となくぼんやりとは分かるのだが、実際にどうすればいいのか見当がつかない。

ムアカ先生も同じだったようで、何度もかのため息をつきながら先輩に訊いた。

「大筋は通ってるんだけどね。あなた自分で言つて、何が『学院長が困ること』か分かつてないんじやない？」

「分かつてるつてばー」

また自信満々で先輩が言つ。

「じゃあ言つてみなさいな

「はーい、じゃあミルちゃん言いまーす。学院長が困ることって、『学院生』でーす」

また意味が分からない。

「ミル、さつきも言つたけど、通じるよつて言つてくれないかしら

？」

「ぶう

先輩が動物みたいな声を出した。

「さつきからちゃんと言つてゐるのに……だからね、生徒が人質なのが、学院長がいちばん困るの！」

「なんで初めからそう言わないの」

またまたため息をつきながら、先生がこめかみを押さえる。たつたこれだけのことになるとでもない回り道で、隣で聞いているリティーナでさえ頭が痛くなつたのだから、相手をしていた先生はなおさらだらう。

けれどようやく、先輩が何を言いたか分かつた。
先生が考え込むように腕組みしながらつぶやく。

「つまり、生徒が人質だと学院長は身動き取れない……ましてや殺すと脅されでもしたら、従うしかない。これを回避するには、人質を取り返さないとダメ……」

「そうそう、簡単でしょ」

その簡単なことを混乱させたのは先輩だ、そうリティーナは思つたけれど言えなかつた。やっぱり先輩にそんなことを言つるのは怖い。けれど当の先輩のほうは大はしゃぎだつた。

「あとは、どつかーん！ で人質取り返せばいいだけー」

「それが簡単だつたら、誰も悩まないわよ。相手は教官たちで、講堂に集められてるのは下級生、上級生は居ない。どうやって対抗するの？」

「んー、数の暴力？」

首をかしげながらいたずらっぽい笑顔で言つ先輩を、ムアカ先生

がたしなめた。

「あなたねえ。いくら生徒が多いって言つても相手は本職よ？返り討ちがいいとこだわ」

「えー、出来ないと思つけどなー」

のんびりと先輩が言つ。

「どうして」

「だつてもしそんな」として外に知れたら、学院の経営、傾いちやうもん

「あ……！」

リティーナはもちろん、先生もはつとした表情になつた。

何故か勝ち誇つたふうに先輩が言つ。

「シエラの経営、先輩たちの稼ぎと身代金と、あと本土のお金持
校の親の寄付で、なんとかやってるでしょ。なのに本校で大スキヤ
ンダルあつたら、お金持ち校の生徒はみんな辞めちゃうと思つなー」

言われてみればそうだ。

シエラは本校のほかに、いくつも分校がある。その中にはシエラ
と言つても名前だけの、「お金持ち専用」の分校が幾つかあつた。

上級隊の先輩たちは「金持ちのお遊び」とバカにしている。ただ
兄が言つには、そういう人たちの親が寄付してくれるお金がものす
ごく多くて、それで自分達の服や何かが買えるのだそうだ。

お金のことはあまり詳しくないリティーナだが、そんな人たち
がシエラを嫌がつて辞めてしまったら、たちまち大変なことになる
くらいは理解できる。きっと学校は、とても貧乏になつてしまつだ

۲۰۱۵

「なるほど、言われてみればそうね。まあ彼らじや隠蔽に走り層だけど……」

「いんペー、ってなんですか？」

難しい単語が出てきて、リティーナは先生に訊いてみた。

「ああ、『めんなさいね。隠蔽つて言つのはそいつね……悪いことを隠して、なかつたことにする、つて言つたら分かる？』

「あ、何となく」

要するに、クラスの男子が悪さをしたのを隠したりすると、似たようなことだろう。ただ教官がやるとなると、ちょっと規模が大きそうだ。

(どうせバレちゃうのにな……)

リティーナが今まで見た感じ、隠し通せたものはない。だいたい誰かが見ていて、口止めしてもどこから漏れて、最後はみんなに知れ渡つてしまつ。

「あ、そつか……」

つい口からこぼれた言葉に、先生が不思議そうな顔になつた。

「なにが『そつか』なの？」

「え？ あ、えつとですね」

考え方説明する。

「えつと、だから、ウソつて、バレたら困りますよね」

「そうね。だから隠すんだろうし」

先生の言葉が、リティーナの考え方を裏付けた。

確信を持つて言つ。

「だつたら、みんなでばらしちやつたらダメですか？」

ミルといつ先輩が突然手を叩いた。

「わあ、チビちゃんあたしと同じこと考へてるー。やるじやん！」

「そ、そうですか……」

褒めてくれたのだろうが、何か複雑だ。だいにちこれでは、腹黒さを褒められたようなものだ。それにチビちゃんといつが、自分とこの先輩とではそんなに年も身長も違わない。

先輩のほうはリティーナの気持ちになど気がかず、嬉しそうにベッドの上で跳ねながら喋り始めた。

「でね、でね。チビちゃんが言つたとおり、バラしちやえればおつけでしょ。だからねー、中へ動映機と通話石持つて、入っちゃつたら面白いよね？ ついでにみんなにホントのこと教えたたら、もっともっと面白いよね？」

「そ、それはただけど」

計画を聞かされた先生が焦る。

「けど、そんなことして大丈夫なの？」

「へーきへーき。何かしたら、それも流しちやつもん。『講堂に

仕掛けた』って言えば、分かりっこないし」

心底面白そうに、元のミルといつ先輩が笑う。

そして先輩は真っ黒な笑みを浮かべて言った。

「センセ、動映機と通話石、あるよね？」

「通話石は学院長から渡されてるのがあるけど、動映機はどうだつたかしら……？ 部屋になら、ぜつたいあるんだけど

「んじゃ、センセの部屋にいこー」

にこにこと言った先輩を先生が止めた。

「ダメよ、この状況で出たら、あなたたちも掴まるでしょ。私が独りで行つて取つてくるから、あなたたちは待つてなさい」

「ふー」

また先輩がおかしな声を出す。

でも、今はぜつたに先生の言つこじが正しい。先生だけなら「忘れ物」で済むだろうけど、生徒が見つかったら連れて行かれてしまう。

「みんなここで大人しく待つてるのよ。いいわね」

「はーい」

「よろしい」

最後にちょっとだけおどけて、先生は診療所から出て行った。

先生が向かった「部屋」は、同じ島内にある教官たち専用の寮だ。ただ島内と言つても学生寮の先で、ここからは島の反対側に近いから、歩いて往復するときこうかかる。

早く戻つてくれればいいなと思いながら、リティーナは同室の一ネットのベッドに腰掛けた。

「足、下敷きにしないでね」

「うん」

先生が行つてしまつと、診療所の中はなんだかがらんとした感じだ。どこに何があるか分からぬのも手伝つて、少し不気味にさえ見える。

ずっと黙つてたら何だかおかしくなりそうで、リティーナは口を開いた。

「あのね」

「ねえねえねえねえ、そこの2人聞いてくれる？」

言いかけたところで、先輩が横から割り込んできた。

「えつと、何ですか？」

「うん、センセの前じゃ言えなかつた、とつておきの話」
リティーナは思わず二ネットと顔を見合せた。この先輩の「とつておき」は、良くないことの気がする。

かといって先輩の話は無視できないのが、後輩の辛いところだった。

「とつておきつて、何ですか……？」

本当は聞きたくないなと思いながら、先輩に訊く。

先輩は以外にも級にまじめな顔になつて、リティーナたちに話し始めた。

「さつきも言つたとおり、今このシヨラ、副学園長のせいで大変な状態になつてるよね」

「はい」

それは言われなくても分かる。リティーナの知つている限り、こんなことが起こつたのは初めてだ。

「けど先輩、問題じゃないんなら何がダメなんですか?」「じゃなくてね、問題を作るの」
にっこり笑つて先輩が言った。

「問題作るつて……?」

「うん、問題作るの。で、教官たち混乱させるの」

「え……」

思いもかけなかつた話に、頭の中が真っ白になる。

「問題、問題、作る……」

「あー『めんね、驚かしちやつたか』

先輩に頭を撫でられた。

リティーナは言つ。

「いえ、大丈夫です。それで、問題作るつてなんですか?」

「うん、このままだと一番の問題は、生徒が人質になつてるせいでの
学院長が折れちゃう」とだよね」

先輩の言葉に頷く。実際には何もされないとわかつても、あの
学院長だ。もし子供を殺すと強く脅されたら、仕方なく学院長の座
を渡すだろつ。

けれど、これは困る。

「絶対、イヤですよね……」

「でしょ。だからね、生徒解放しなきゃ」

「でも、どうやって」

生徒が何かされないよう、動映機と通話石を中心に持つていぐ話は

さつき決まった。だからそれ以外のことなのだらうが、見当がつかない。

「さつき、動映機と通話石の話はしたよね？」

「はい。講堂に持つていくって」

だがそれがどうしたのだろう？

先輩の説明は続いていた。

「だけど動映機と通話石だけだと、教官たちを牽制は出来るけど、追い出せないんだよね」

「そうなんですか？」

てっきり上手く行くと思っていたから、これは予想外だ。

「じゃあ、どうすれば」

「うん、だから中に入つてみんなを煽るの」
さりげりと先輩が、怖いことを言つてのける。

「そ、それ、大丈夫なんですか？」

兄が上級隊なのもあって、リティーナは自分は余りいろんなことに驚かないと思っていたが、思い違いだつたようだ。

まあいいやこの先輩でも、みすみす捕まつて身動きできない可能性のほうが高かつたら、選ばないとと思うが……。

当の先輩のほうは平然とした調子で答えた。

「だからベーキだつてば。どうせ手は出せないから。まあそれでも、なるべくこいつそりやるけど」

「そうなんですか……」

言っている主旨は何となく分かるが、やっぱり心配だ。

そんなリティーナの気持ちを見透かしたのか、先輩がクスクス笑う。

「大丈夫大丈夫、まず先に『教官は実は手を出せない』って広めとけばいいんだし」

ミル先輩を敵に回すことだけは、絶対にやめようとリティーナは誓つた。

確かにこの先輩、普段の言動はおかしい。だがさまざま道具を転用していくあたりは、どれも全く予想がつかなかつた。だからこんな先輩を敵に回したら、絶対にタダでは済まないだろう。

「センセが帰つてきたら、あたし通話石と動映機持つて行くね」

「え？ 先輩だけですか？」

自分も一緒に行くのだと思つていただけに、リティーナは慌てた。

「こういつの、人数多いほうがいいんじゃないですか？」

「あたしもそう思います。だって講堂、集められてる人数凄く多いし

リティーナの友達、一ネットも似たようなことを言ひ。けれど先輩は譲らなかつた。

「だーめ。あなたたちには違ひ」とやつてもらひつもりだし
「そりなんですか?」

ちょっと声が弾んでしまつたのは、重大な仕事を任されたからだ。責任があるというのはミスができないけど、逆に言えば何でも自分でやり放題だ。

先輩に訊いてみる。

「あの、そしたらあたしたち、何を?」

「連絡係」

極上の笑顔で先輩が微笑む。

「お願ひね」

「はい!」

さつきより更に声が弾んだ。

少し形は違うけれど、これは立派な任務だ。

「えつと、そしたら、ホントにあたしたち何を……あ、いえ、連絡係は分かりました。でも誰ですか?」

「んー、逃げ回ってる人たち全員かな。なるべく多く探して、この通話石を渡してあげて欲しいの」

「は、はい」

予想以上に大変そうだ。けれどここで出来るか出来ないかを天秤

にかけてしまつたら、きっと一生出来ない。

そうやってると、ムアカ先生が戻ってきた。

「動映機、あつたわよ。予備の通話石はこま出すわね
「わーい、センセ、ありがとー」

言ひやいなや、先輩は先生の手から必要なモノを奪い取つた。そして止める間もなく、ぱつと外へ駆け出す。

「ちよ、ちよっと待ちなさい！」

言つても先輩が訊くわけはなくて、あつとこまにその姿は草むらへ消えていった。

「全くもつ……こいつときだけ早いんだから」

腰に手を当ててちよつと外を睨みながら、先生はため息をついた。
それから、リティーナたちのほうへと向き直る。

「はい、これ予備の通話石よ。無くさないでね
「わかりました」

受け取つて、何か聞こえてこないかと耳を澄ます。けれど今は、誰の声も聞こえなかつた。

「これ、どこと繋がつてるんですか？」

「たしか……学院長と、あと何人かの先生だけじゃなかつたかしら。
今はあなたたちと、あのミルも持つてるけど」

「少ないんですね」

それがリティーナのいちばんの感想だつた。

けれど、いまの状況だと悪くは無いはずだ。少なくとも、たくさんの教官が聞いているよりはずつといい。

何となくひとつ頷いて、通話石をポケットにしまい込む。

それから、どうしてか、リティーナは困った。

「先生、もつと予備、ありますか？」

「あるけど、何にするの？」

不思議そうな先生に、意を決して言ひ。

「いえ、その、ミル先輩が他にもまだ、講堂に行つてない人がいるんじやないか、って」

「確かにそうね。でも、どうせいたら渡せるかしら……？」

「あたし行きます」

リティーナの言葉に、先生の顔色が変わる。

「ダメよ！ 外は危ないって分かってるでしょ？！」

「だいじょぶです」

少女は言い切つた。そして続ける。

「それに捕まつても、講堂へ連れてかれるだけです。危なくないです」

先生が答えに詰まつた。

「先生、予備の通話石ぜんぶください。あたし、行きます。行かなきや助けられないです」

「……分かつたわ」

ムアカ先生がついに折れる。そしてポケットから小さな袋を取り出した。

「これで全部。でも、絶対に無理しちゃダメよ」

「はい。一ネット、ここで連絡係お願いね」

「うん、分かつてる」

リティーナは袋をしまっこみ、入ってきた換気窓に手をかけた。

S e y m o r e

「お前達、なんでここに居るー。」

後ろから声かけられた瞬間、とつそに動いてた。ポケットに手え

突つ込んで、煙玉を後ろの地面に呑みつける。

一瞬で背後に煙が広がって、あたしとナティはそれこそ走竜みたいに走り出した。

なんか後ろで激しく咳き込んでるナビ、そいつは無視だ。

「ビー逃げるの？」

走りながらナティが訊いてきた。

「ビーって言われても、教官が居なきゃビーでもいいんだけどね」「こま教官に見つかるのはヤバい気がした。なんでって言われても困るけど、なんとなくそんな気がする。

カンが間違ってるとは思わない。なんたってこのカン、何度もあたしらのこと救つてんだ。それが今田に限つて間違いつてこたあ、さすがにないただろ。

少し走って、よれそうな藪を見つけて、慌てて一人で逃げ込む。

「あーもひ、なにアーレ」

「あたしに訊かないどくれ」

別にそういう意味でナティが言つてんじゃないのは分かるナビ、思わずそのままつづつちまつ。

「分かつてゐてばー」

「「めん」「めん、あたしも分かってる」

小声で囁き合つたあと、あたしらは顔を見合わせてひょいと笑つた。気心が知れてるってのはいいもんだ。

それから一息置いて、ナティがまた小声で言つた・

「でさ、あの講堂の騒ぎってなんだつたと想つ?」

「だからあたしに説かないどくれ」

正直分かつてたら、こんなところで無様に逃げ回つたりしてない。ナティが肩すくめて言つた。

「だよね。けどほんと、何がどうなつちやつてるんだか……」

これには思いつきりあたしも同意だ。だいいちこんな時間にチビたち集めるなんて、正氣の沙汰じやない。たぶんメチャクチャな騒ぎになつちまつぱず。

「それにしたつて、なんでわざわざチビジモ集めるんだか。部屋から出るなつたほうが楽だろ?」

何となく出た言葉に、ナティが答えてきた。

「もしかして、学院が攻撃されそつとか」

「まあ、無いとは言わないけどね……だつたらもう、先輩達が戻つてくんじやないかい?」

ウソみたいな話だけど、シヨラがどつかから攻撃されそうになつたつてのは、今までに何回かあつたらしい。そして理由はだいたい、この軍事力なんだとか。

けどあたしにやその辺がわつぱりだ。シヨラがいくら実戦重視のM e S だつても、所詮は訓練生。正規兵とガチでやり合つたらまず負ける。何とかなるのは、上級隊の先輩くらいだろ?

その程度のものをどうにか潰そだなんて、ずいぶん買いかぶら

れたもんだ。

何より仮に敵襲だとしたら、先輩たちにいち早く連絡が行くわけで。ついでに戦力になるルーフェも同時に召集だ。

けど、あの子が呼び出されたのは、おやつ食べてたときの話だ。それが今は暗くなってるわけで、かなり時間が過ぎてる。

しかもルーフェ、部屋に太刀を置きっぱなしときた。ホントに戦闘が迫ってるんなら、これはさすがにあり得ない。

あたしはそれをナティに指摘した。

「もし敵襲だとして。だつたら教官たち、演習島から先輩たち戻して、その他にルーフェも呼ぶだろね。なのに先輩たちは戻ってきてない、ルーフェにいたっては丸腰つてんだから、何か別の話じゃないか？」

「そつか……半日過ぎてからチビちゃんたち集めて、なのに先輩たち戻つてないんじや、防御にならないもんね。というか呼び出された話がバトルなら、ルーフェだつて太刀取りに来るはずだし」

「そゆこと」

ただそうなると最初に戻るけど、教官たちなんであんなマネをしてるかつてことだ。ルーフェを呼び出して戻つてこれない状態にして、しかもチビたちはご飯時に一斉に集めてとか、理由が分かりやしない。

おんなじように首かしげてたナティが、ひとつで一、二度頷いて言った。

「ともかくせ、このまんまじや 坪明かないよね。なんかしなくちゅや」

「だね。ただまあ、最初は情報収集かね……」

何がどうなつてんだか分からないから、動きようも無い。

ナティが暗くなつた空を仰ぎながら、指折り数えた。

「今分かつてるのつてやつぱり、ルーフェが武器ナシで居なくなつちやつたつてこいつのと、チビちゃんたちが集められてるのと、それだけだよね」

「だとと思うよ。せめてイマドでも居つしゃ、もちつとなんか分かりそうなんだけじね」

なんせイマドときたら、人間の基準から見事にズレてるわけで。けどそのせいかアイツだんだん、素敵とか逃走が得意になつてきてる。このまま行つたら上級隊に入る頃にや、とんでもなく上手くなつてそうで怖いくらいだ。

逆に言つと、あいつがその気になつたらかなりの情報が手に入る。

「ねえシーモア、アーマルたちイマドで会えたかな?」

「どうだろね。でもあいつらだったら、会えてんじやないかな。どうしても必要なら、イマドのほうから出でときやうだしき」

ナティ相手に、氣休めなんか言わない。そんなの言つ必要もない。むしろ言つたら、逆にケンカになる仲だ。

ナティが笑つた。

「だよね。イマドってそういうヤツだし。で、どする?」

その時、どつかで爆発音がした。

「どう?」

「講堂のまづかね……?」

ただ暗いのもあって、ハッキリわからない。

「見に行つてみる?」

「行きたいところだけど、もうひとつ様子見たいね。よく分かんないけど、なんか見つかっちゃヤバい気が」

言いかけたところで何か怒声が聞こえて、藪の中で黙つて身をすくめた。

「いたぞ、あつちだ!」

「イマドメ……もう真相に気づいたのか?」

何本もの足がバタバタ目の前通りてくの見ながら、あたしはナティに囁いた。

「イマド、追つかれても言わないか?」

「言つと悪い。けどこれで、教官たちが敵なのキマリかも?」

「だね」

イマドと来たら、メチャクチャに要領いいやつだ。だから教官に追つかれまわされるなんてこたああり得ない。

それに、教官が言つてた台詞。「真相」つてことは、知られちゃ困る何かがあるわけで。イマドはそこに気づいたと思われて、追いかけまわされてんだね。

だとしたら教官たちは何か秘密を抱えてて、しかもヤバいことをしようとしてるはずだ。

何か、は分からぬけれど。

ここが分かれば一瞬で疑問が片付くんだけれど、現状尋ねる相手もないから、すぐにはムリってやつだ。

また他の教官たちが走つてく。

「いつそ、山狩りでもしたほうがいいんじゃないかな？」

「そこまで人数が裂けないだろ。まあ最後は、やるしかないかもしらんが……」

「いや、全部敵だと想つてよれやうだ。」

「アーティストのためのアートセミナー」

どうか安全地帯見つけないと、こっちの身も危ない。

卷之三

「いつそ、管理棟とか」
ナティが呆れた声になつた。

「まあ確かにそうなんだけどね」

そこで一歩言葉を切つて、あたしは話した。

「けどさ、ナティ、考えてみ？ そこに生徒が居るなんて誰も思わ

ないだろ。だから絶対探さないんじゃないかな」

意味を理解したナティエスが、よ

「もしもよ？ もしも管理棟で、誰も探しに来ない部屋があつたら、いちばん安全つてことだよね？ だって、まさか入り込むなんて思わないし」

「そゆこと。だから学院長室とか、案外安全な気がするんだがね」「学院長室か……」

ナティがまた考え込んだ。

「もしも見つからぬで、学院長室まで行けたとして。そしたら仮に学院長が居ても、絶対大丈夫よね。だって学院長、生徒のこと追いかけたりしないし」

「まあ講堂に連れてかかるくらいは、あるだろうナビね。けど理由くらいは教えてくれるんじゃないかな？」

何となく互いの視線が合つて、両方で頷いた。

「行つてみようよ、せめて理由だけでも知りたいもん」

「あたしも今、同じこと考えてたよ」

冷静に考えりや、ずいぶん無謀な話だ。けど行つて見つかったからって死ぬわけじゃないし、そう思うと大して怖いとも思えない。

それに何より、この騒ぎがどうして起つたかくらいは知りたかった。イマドが追つかけられてたことから見て、教官たちが生徒を目の敵にしてる感じだけど、なんでそつなつたか見当もつきやしない。

けど学院長なら、訊けばきっと教えてくれる。あの人はそういう人だ。

「行こうよ、シーモア」

「慌てなさんな、様子見て捕まらなによつただ

「そだね」

茂みから茂み、じゃなきや茂みから建物の陰へ、見つからないよう少しびつ動く。

その間、教官の姿は見なかつた。たぶんイメージが騒ぎ起こしてゐから、そつちへみんな行つちまつたんだろつ。追つかけ回されてるあいつにや悪いけど、このままあたしらが学院長室たどり着くまで、そのまま鬼ごっこしてほしいとこだ。

ほどなく、あたしらは管理棟にたどり着いた。暗がりに身を潜めて、建物のほうを見る。

「もしかして教官たち、ホントに出払つちゃつてる？」

ナティの言つとおり、管理棟の周囲にも教官の姿は無かつた。

建物も、明かり点いてる部屋のほうが少ない。むつとつくりに辺りは暗くなつてゐるわけで、わざと暗闇で行動する練習でもしてゐるんですね、明かりつけないでつてのはないだろつし。

「まあ全員つてこた無いだろつけど、でもかなりがどつか行つてんだろね」

どつちこしても、あたしには好都合だ。

「行く」「ひつ

「うん」

何がどうなつてんのか、それを知りたい一心で、見つかり、いろいろ場所を進む。

ただ教官たち、よっぽど人手不足だつたらしい。入り口の傍まで來ても、まだ人影がなかつた。

「ほんとに入らないね。そのほうがラッキーだけど」「なんだかねー。あたしらみたいのに接近されるとか、いじの教官ども大丈夫なのかい?」

なんか違う方向で心配になるほど手薄だ。

「さて、どうから入るかね」

「いつも、玄関から行っちゃう?」

案外怖いもの知らずのナティ、だんだん持ち前の度胸が表に出てきたらしい。あたしのまづがしり込みするよつなことを平然と言いく出す。

「まあちょっと中の様子くらい見よう。何も考えずに突っ込んで掘まるなんて、さすがに馬鹿げてるだろ」

「そだね」

入ってすぐのところにどのくらい居るのか、それだけでも確かめたくて、壁に張り付いて必死に中を覗う。と、動きがあった。何か中で話し声がして、バタバタと教官たちが出てくる。

「本当に見つかったのか?」

「分からん。だが確かに」

そんな言葉を交わしながら、かなりの数が走つてった。

「……イマドでも捕まつたかね?」

「そうかも。でもあいつ、そんなに簡単に捕まるかなあ?」

「んー、けど相手が教官たちだからねえ、何とも言えないよ」

ただ建物の中は、今まで以上に人の気配がない感じだ。今なら行けるかもしれない。

「ナティ、開いてる窓探そづ」

「え？ あ、そうだね」

明かりの点いてない部屋を選んで、あたしらは窓を次々確かめてつた。

「ねえ、シーモア、ここ開いてるみたい」

「ほんとかい？」

ナティが見つけた窓をそつと動かすと、確かに動いた。

「入つてみよ」

「気をつけてね」

「分かつてる」

心配そうなナティを後ろに残して、あたしはゆっくりと窓を開けた。けど何の警戒装置も働いてないらしくて、これといった反応はない。

「まつたく、無用心だね」

言いながら様に手をかけた。一気に身体を引き上げて、乗り越える。

「大丈夫？」

「平氣だよ、なんも起こつてないし。あんたもおいで」
あたしの言葉に、ナティが続く。

「ホントだ、ぜんぜん平氣だね」

「だる。教官ども、のんき過ぎるよ」

まさかあたしら訓練生が、こんな形で来るとは思わなかつたんだ

わうなー……それにしたって、教室が「こんな」とでいいんだろうか？

ドアの内側から聞き耳立てて廊下の様子を伺つたけど、人の気配はなさそうだ。

そつーとドアをほんの少しだけ開けて、それからあたしとナティ、2人して廊下へ出た。

囁きあう。

「学院長室、上だよね」

「階段で行こう。昇降台は教官たち使うから、たぶんヤバい足音を殺して、あたしら建物の端へ向かった。

管理棟は真ん中辺に昇降台、両翼に階段つて造りになつてゐるが、造りだ。で、教官たちはどういうわけか、降りるときもいつでも昇降台を使う。だから階段を使つほうが安全つてやつだ。

「2階まで一氣に行こう。で、そこで様子見るんだ」

「分かった」

ナティに言つた後、階段の様子を見てから、あたしは一気に駆け上がつた。

すぐ後ろにナティが続く。長年なじんだ気配で分かる。

ひとつ階を上がつたとこで、一旦階段から離れた。逃げ場の無い階段で教官たちに出来わすのは願い下げだ。

けど、これといった気配はなかつた。それどころか建物の中全体が、やっぱりがらんとした感じだ。予想以上に出合つてしまつてゐるらしい。

「がら空きにもホドがあると思つただけじねえ」

「んー、あれじゃない。演習もあるから、そつちに行っちゃったとか
なるほど……」

それから首をひねる。

教官たちが何したかったか知らないけど、生徒を集めるにしろイマドを追い掛け回すにしろ、数は居たほうがいいはず。なのになんだって却つて不利な、泊りがけの演習の日なんざ選んだのやら。とはいえたそのおかげでここまで忍び込めてるんだから、ありがたく思つべきだらう。

「行こ」
「ひ

また様子を伺つてから、階段を駆け上がる。学院長の部屋は一番上の3階だから、ここを上がれば階段は終わりだ。

2人で昇りきつて、壁の影から廊下を覗いた。

（シーモア！）

（分かつてる）

廊下の向こうのほうに教官の姿が見えて、2人して慌てて引っ込む。

「あれ、見張り？」

「たぶん……」

学院長室の前には、2人の教官の姿。ドアの前で動かないから、まあ見張りだらう。

「どうする？」

「うーん。学院長室はムリかもしらんね」

根拠はないけど、あんな感じの大人に捕まるのは絶対にヤバい。それだけは長年スラムにいたから分かる。

それにしても生徒に悪意　　どうもナティこうつ感じしかしない持つてる教官がなんで子供好きの学院長の部屋の前に居るのか、その辺がどうにも解せないと、声がした。

「シーモア、ナティエス、こっちです」
驚いて振り向く。

「が、学院長?!」

視線の先に、見慣れた顔。階段脇の倉庫のドアが開いて、そこから手招きしてくる。

あたしらも急いで、倉庫の中へ滑り込んだ。

「学院長、なんでこんなとこ？」
「ちょっと待つてくださいね」
言つて学院長はそーっとドアを閉めた。けど奥に魔光灯があるおかげで、真つ暗じゃない。

「足元に気をつけて。その右手の奥へ」
「はい」

言われたとおりに奥へ行く。つても狭い倉庫だから、大した距離じゃない。

学院長も来て、一番奥の壁に手をついた。

「うそお……」

ナティが声あげたのも無理ない。なんせ壁が横に動いたんだから。
「すつごい仕掛けですね」

あたしの言葉に学院長が答える。

「『』の学院は古い上に、元が貴族の住まいでしたからね。特に管理棟は、面白い仕掛けがたくさんあるんですよ」

「へえ……」

初耳だ。

「さ、こちらへどうぞ。どうして『』へ来たか知りませんが、さすがに倉庫では落ち着かないでしょ？」「う」

そう言って、まず学院長が引き戸の内側へ入る。

「学院長、これって隠し通路ですか？」

「ええ」

学院長は慣れてるらしい。灯りこそあるけど、目印もなんにもない通路をすたすた歩いてく。そしてしばらく歩いた後、昇り階段になつた。

「『』の先つて、どこに出るんですか？」

ナティに訊かれて、学院長がにこやかに答えた。

「屋上ですよ。今お茶でも出しますからね。疲れたでしょ？」「う

その言葉聞きながら、やつぱ『』の人は違うと思つ。チビどもをいきなり集める教官とは、ぜんぜん違う人種だ。

階段を昇りきつたところは行き止まりだつたけど、学院長が頭の上、天井板を『』そやつたらパカつと外れた。

「いじなつてたんだ……」
屋上つてどこへ出るのかと思つたけど、顔を出した先は鐘楼裏の
バルコニーだ。

管理棟は元々貴族の館だつたつてだけあって、屋根に鐘楼兼ねた
小さい尖塔がある。で、表から見ると分かんないけど、裏の教室棟
なんかから見るとバルコニーがくつついてた。出たのはそこだ。

「さあさあどうぞ。この奥ですよ」

木のぐぐり戸が開けられて、石造りの尖塔の中に入る。

「す」「ーい、ちゃんとした部屋なんだ」

「ええ。まあ狭いですがね」

学院長の言うとおり、中はかなり狭かつた。幅は尖塔と同じだけ
あるけど、奥行きは大人が手を広げたらやつとくらい。窓はナシ。
けど魔光灯が点いてるから暗くは無い。

ただ天井はすごく高くて、しかも梯子を使ってロフトへ上がる
ようになつてたりするから、寝る場所には困らなそうだ。
たぶんここも隠し通路と同じで、要するに壁の中つてヤツだらう。

入ってきたのと反対側には田持ちのしそうな根菜類に、石化した
食料があつた。

「へえ、学院長も食べ物石化させるんだ」
田にしたナティが言つと、学院長が笑いながら答える。

「いえ、ルーフェイアに教わりましてね。作つてもらいました」

思わずナティと顔を見合せた。

「それって、あたしらが任務でアヴァン行つた時、ルーフェイアがやつてたマネですか？」

「ええ、その通りです。これは腐る心配が無くていい方法ですねえ」のんびり言いながら、どこからか学院長がポットを取り出す。そして丸い網力^ゴの中に炎の魔力石とお茶つ葉を入れて、ポットの上へ放り込んだ。

「お湯が沸くまで、少し待つてくださいね」

「はい。にしても学院長、なんでこんなところに居るんです？」

あたしは疑問をぶつけた。

どう見たつてここは隠れ家で、ふだん使う場所じゃない。なのにそんな場所に学院長が居るとか、どう見たつて異常事態だ。

学院長が頭を搔いた。

「いやあ、実は副学院長がちよつと反逆騒ぎを起しちましね

「学院長、それ『ちよつと』じゃないです」

間髪入れずナティが突つ込む。

でも、これでやつと何が起つたか分かった。いきなりチビビもをご飯時に講堂へ集めてみたり、イマドを追つかけ回してみたり、みんな副学院長の仕業だろう。

「えーっとつまり、副学院長が学院乗つ取ろうとして。で、先輩たちが居ない演習中を狙つたのかな？」

「それで正解だろうね。いくら教官たちだつて、上級隊が束になつてかかってきたら困るだろ？」

実際にやり合つたら、一部の妙なレベルの先輩とかが出てこない限り、まあ教官たち負けはしないんじゃないかなつても思つ。けどそれにしたつて、かなり被害出るからやだろ？

ナティが考え込んだ。

「けどそれって、けっこつ厄介じゃない？ あれじゃチビちゃんたち人質同然だもの、先輩たちが首尾よく帰つてきても、手も足も出ない気がする」

「確かにね……」

あたしらの会話に、学院長が横から口を挟む。

「チビちゃんたちが人質とは？」

「あ、えつとですね、実は低学年が講堂に集められてて ナティの説明に、学院長の顔色が変わった。」

「それでは、あの子たちが！ 行かなくては」

「学院長待つた待つた」

慌てて飛び出そうとした学院長をとつあえず止める。

「気持ち分かりますけど、闇雲に出るつてマズくないです？ てかあたしら、授業でそう教わりましたよ」

「そうそう、まず情報収集！ つて教えるし」

学院長が笑つた。

「やれやれ、あなたたちにはかないません。けれどこのまま他の子たちを放つておけないのも、分かってくれますね？」

「ええ、それは」

学院長は、そんなこと出来る人じゃない。ただだからこそ、そこへ付け込まれてる気がすごくする。

あたしは確認してみた。

「学院長、副学院長が反乱起こして、つてのは間違いないんですよね？」

「ええ。まあ情報が入ってすぐ隠れたので、副学院長がどうかは直接確かめていませんが」

学院長はそう言つたけど、これはたぶん間違いないだろ？

と、ナティが不思議そうに訊いた。

「学院長、すぐ隠れちゃつたのに反乱つどどつして分かるの？」

「鋭いですね、ナティエス」

学院長が孫を見るおじいちゃんみたいな顔になつて、ナティのことを褒める。

「実はですね、この話自体は今始まつたことではないんですよ。かれこれ3年ほど、彼から引退を迫られてまして」

「それ困りますつて」

思わずホンネが出た。

「学院長居なくなつたら、教官たちやり放題じゃないですか」

「シーモア、あなたもよく見てますねえ」

「普通分かりますつて」

教官たちに一種類いることくらい、学院生なら誰でも ルーフエは別 知つてる話だ。

ナティが確かめるみたいに言つ。

「えーと。要するに前から副学院長と学院長は何となくケンカして、今日は向こうが本気になつちゃつた、つてことか」

「実も蓋も無い言い方ですが、まあそんなところですねえ」

学院長が苦笑した。

けどあたしにゃ、まだ解せないことがあった。

「で、学院長。副学院長がここを乗つ取るうとしてるとして。なん
でわざわざ、チビたちを人質にしてんです？ そんなもの、書類に
無理やりサインさせたら終わりじゃないんですか？」

「やれやれ、スラム育ちは伊達ではないですねえ。大人の世界をよ
く知ってる」

また苦笑して、学院長は話し出す。

「シエラの学院長の交代は、特殊なんですよ。書類だけではダメな
んですね」

「へえ……」

これは初耳だ。

けど考えてみりや、ここは世界に名の知れたM e Sなワケで。横
取りしたいヤツはたくさん居るはず。だからそれ防止のために、い
ろいろ策があるんだうつ。

「特殊って、どんななんです？」

好奇心いっぱい顔でナティが訊く。

ミルの吹つ飛び方に隠れてあんま分かんないけど、ナティも実は
かなりのじやじや馬だ。普段も何食わぬ顔で、ちゃらつとあちこち
首突つ込んでたりする。

学院長のほうもどういつつもりか、説明しだした。

「実はですね、事前に決めた友人2人の確認が必要なんです」

「何ですかそれ」

意味わかんないし。

学院長が笑つて続ける。

「院長職を引き継いだ時点で、自分の友人2人に頼むんですよ。それを書いて封をしておく。引退の時には事前に手紙をもらひうか来てもらひうかして、封をした手紙と同時に開けるんです」

面白い方法だ。

「それ、院長以外には『友人』が分かんない、つてことですよね?」「ええ。だから勝手に交代させられないんです」

封された書類に書かれてる友人と一致すれば良し、違つたら無効で交代ならずつてことだらう。これだと確かに、部外者は手の出しが無い。

けどこの方法、抜け道がある。

「だいたい分かりましたけど、それ、いきなり学院長が死んじやつたらどうなるんです?」

学院長が困つたような顔をした。

「やれやれ、本当に鋭いですね。といつも、縁起でもないことを言わないでくださいよ」

「え、学院長つてそーゆーの氣にするんですか?...」

ナティが更にヒヂーことを言つた。

「この年ですからね、そりや氣にしますよ。それにしても今どきの子は、本当にマセているというか世の中を知りすぎてるところか...」

「えー、学院長がピコアすぎるんですよ」

追い討ちに、学院長がため息をついた。

「歳を感じますねえ、じつになると
「しょーがないです、今の世の中って世知辛いから」
「これじゃどつちが大人だかわかりやしない。」

「で、死んじやつたときはビーするんです?」

「あたしは話を元へ戻した。」

学院長がやれやれつて感じで苦笑して答える。

「急死したときは、そういうときのために用意された別の封筒を開けて、中に書かれた人に連絡するんです。友人には次期学院長を指名して伝えてありますから、それを教えてくれます」

かなり用意周到だ。

ナティが更に面白がつて訊く。

「それって、生きてるときに呼ぶ人と一緒なんですか?」

「ナティエス、もう少し言葉を選んだらどうなんですか?...違う人ですよ。同じだと、勝手に封を開けられた場合、誰だかを知られてしまうでしちゃう?」

話を聞きながら、ずいぶん考えられたシステムだと思った。

「それって、部外者が口挟む余地ないですよね」

「そうですね。まあそれでもしないと、権力を欲しがる大人が多いのですよ」

自嘲気味に学院長が言つ。

けどまだあたしにや疑問があつた。

「学院長、そこまでしてたらこいつは副学院長つても、なんも出来ま

せんよね？ 自分がどんなになりたくたって、ひたすら詰答待ちじや？」

「ええ、そうですよ」

答えを聞いて、更に疑問が大きくなる。

「それだと、なんだつて副学院長、あんなふつにチビまで講堂に集めてるんです？ そんなことしたつて、自分がなれるわけでもないのに」

学院長が寂しそうに笑つた。

「そこには逆ですね。彼は私を捕らえて、次期院長を自分にしろと迫るつもりだったのだと思います。ただ私が早々に察して姿を隠してしまつたので、子供たちを人質にして引きずり出そうとしているのでしょうか？」

確かにそれなら辻褄が合つ。

「つてことは、学院長が行つたらオワリじゃないですか」

「そうなります。けれど低学年の子達を、危険な目に遭わせるわけにはいきません。これから行きますよ」

「それ、相手の思つ壺じゃないですか」

どう考えたつて、副学院長の狙いはそれだ。チビたちを解放する代わりに、自分を次期学院長に指名しきつて言つに決まつてゐる。

学院長がため息ついた。

「私もそれは分かつてありますよ。けれどあの子達を放つてはおけません。それこそ私を引っ張り出すために、何をされるか……」

まさにジレンマの真っ只中つてヤツだ。

と、ぽんと手を打つてナティが言った。

「それって要するに、人質がいなくなっちゃえぱいいよね」

「……アンタ、ミルが伝染ったかい？」

あまりに突拍子も無い話に、ついそんな言葉が口を突いた。

「人質いなくなつたらつて、あの子たち居なくなつたらまずいだろ
うが」

「あー」「めん」「めん、そーゆー話じやないの」

ナティが手を振つて慌てて言い訳する。

「要するにさ、人質がいるから困るわけじやない？」

「そりやそうだけどぞ」

そんな分かりきつたことを、なんで今更言い出すんだか。けど当
人は大真面目だ。本氣でミルの吹つ飛び加減が伝染つたかもしんな
い。
で、ナティがさらに大真面目で続ける。

「人質がいて困るんだもん、なくしちゃえば、つて言つてるの」
「だからなくしたら困るだらうつての。あの子たちに何かあつたら
どーすんだい」

どうもさつきからこの重要なとこがすれ違つてるのに、なんでナ
ティがこだわるんだか。

けど次の一句で、あたしは思わず動きが止まつた。

「違つてば、逆。人質を解放しちゃえぱいいんじやない」

言われてみりやそうだ。足かせになつてゐる人質がいなけりや、そ

そもそも悩む必要なんかない。
ただ問題は……。

「あんたの言つてると正しげじゃね、ナティ、それ並んでやるのや
「んー、そこにはほり、考えてみないと」
やつぱにこつ、ミルが伝染つてゐ。
あたしの表情に気づいたんだろう、ナティが口尖らせた。

「もつ、シーモアつたら。人のことそんな顔で見なくたつていいじ
やない」

「見たくもなるよ。見通しも無いのにアイディアだけ言つて得意にな
つてるんぢゃ、ミルと変わらなじやないか」

「あ、それもつとヒドい」

そういう辯りが更にミルに似てるの、本人は気づいてないんだろう
か？

けじ学院長のまつは、そういう思わなかつたらしく。

「確かにナティエスの言つことは一理ありますね。何より、あの子
たちの開放は最優先項目でしょつ」

「ですけど、あたしらだけじやどうにもなつませんよ、先輩たち
でも呼んでくりや別ですけど」

「わうですね……演習島への連絡手段は分かりませんが、本島内な
らある程度できるかもしません」
学院長の思いもかけない台詞。

「ホントですか？」

「確約は出来ませんがね」

さう前置いて、学院長が説明する。

「副学院長の話、当然ですが前々から噂はあつたんですよ。だから学院で使つてるのは別に、通話石を用意しまして」
あたしは学院長をちょっと見直した。そんだけのもの 通話石はそう簡単に用意できるようなものじゃない をわざわざしつらえてたなんて、やっぱシエラの学院長だ。

「で、まあ、一応それを信頼できる方々に渡しておいたんですよ」「誰にですか？」

好奇心に狩られて訊く。

「渡してある人ですか？ でしたらムアカ先生に」

何人かの名前が挙がった。みんな生徒から好かれてる人ばつかだ。ただ、問題があつた。

「学院長、今言つた人たちつてムアカ先生除いて、みんな演習島ですよ？」

「ええ、そうなんですよ」

ちょっと困つたふうに学院長が言つ。

「私もそれなりに警戒してはいたんですが、まさか演習で教官が手薄になつたときにやるとは思いませんで」

「思つてください」

前言撤回、これじゃ学院長甘すぎだ。
さすがに言ひ。

「相手の人数が少ないときに行動起こすつて、常套手段じゃないですか。なのになんで、無いと思ったんです？」

「うーん、言わせてみるとなんででしょ。うねえ」

ダメだこりゃ。やつは学院長、どうか浮世離れしている。

「そーゆーもんですよ。てか学院長だつてシトカラここらのんだから、そのくらいのこと気づいて下さこ」

「そうですね、次はこうならなによつてしますよ」

「次があつたら困るんですけど……」

学院長、このままだっかに隠者として籠つたまつがよをやつな気がしてくる。

なんだか粘土に釘打つてるみたいで、言つても張り合ひがない。

「そうですね。で、万一のときは連携を取るつもりでした。まあ現状出来ていませんが」

院長頭搔いてるけど、ホントこには完全なミスだ。せめてもう少し、常に連絡が取れるようにならうと策講じときや、もつつかつと口トが簡単に運んでみだらう。

ナティが横から口を挟んだ。

「要するに、その電話石を使えば、もしかしたら先生たちと連絡が取れるかも? つていうことですよね」

ナティは相変わらず、要点をまとめるのが上手い。

学院長が頷いたあと、視線を落とした。

「ただ先ほども言つたとおり、宝の持ち腐れですが」
あたしは考えた。電話石そのもののことば、間違いなくラッキーだ。ただ実質的には使えないんじや、アテになんてできやしない。
だから今はそんなことより、確実に出来ることを考えたほうがいいだろう。

「いちばんのベストは、人質の開放か……それでどうやるかな」「先輩たちいないしね。せめてイマドかルーフェが居ればいいのに」学院長が寝耳に水つて顔をした。

「あの2人が居ないのですか？」

「あ、イマドは居ます。けど教官たちと追つかけっこしてるみたいで」

かなり盛大にやらかしてたみたいだから、今頃大捜索隊が出来てるかもしない。

掘まりやしないだろうけど。

何でかあいつ、人の心を逆手に取るのがメチャクチャ上手い。しかも「それなら」って逆を突くと、今度は斜め上方向の行動とつくるんだから手に負えやしない。

今もきっと、教官たちを散々引っ張りまわしてきりきり舞いさせていて当人は寝てるとか、そんなことやってんだろう。

「けど、ルーフェはどこか分かんないもんね」心配そうに言うナティに、あたしも頷く。

「食堂で呼び出されて、それっきりだしね」

「そんなことになつてましたか……」

学院長が考え込みながら訊いてきた。

「ルーフェイアがいなくなつたのが、いちばん最初ですか?」

「ですね。あの子が戻つてこないんで探してたら、この騒ぎになつ

たんで。といふか探してたおかげで、あたしら講堂に入らないで済んだんです」

あの時もしきつもびおり寮にいたら、今頃整列して人質の仲間入りしてる。

「それは何時頃ですか?」

あたしとナティは首をかしげた。

「正確には……みんなでおやつ食べてたんで、まあ午後ですけど」

「だとすると、私が知らせを貰つ前ですね」

学院長の言葉からすると、ルーフェが拉致（？）されたのがいちばん最初だつたらしい。

「それで、今も分からぬのですか?」

訊かれてあたしは答えた。

「見当もつかないです。イマドなら分かるんぢゃないかと思つて知らせましたけど、あいつ追っかけっこしてるくらいだから、まだ見つけてないかと」

ナティと学院長が、2人して不思議そうな顔になった。

「シーモア、どうしてそれで、ルーフェが見つかってないつてことになるの?」

「もしイマドがルーフェ見つけて組んでたら、今頃もつと大騒ぎだよ。へタすりや講堂開放されてる」

「なる……」

ルーフェ一人だけでも相当の戦闘力だけど、イマドと組ませたら何倍もヤバイ。息がぴったり合つてる上に、得意な分野が互いに補完する格好だから、おっそろしいことになる。

けどあたしが見る限り、今んとこイマドが教官を引っ張りまわしてるだけで、反撃してる雰囲気がない。だからたぶん、イマドはルーフェを見つけてない。

「……もしかすると、地下牢かもしだせませんね」
学院長が考え込みながら言った。

「IJKの学院に、そんなものあつたんですか？」
「ええ。何しろここは古いのですからね、特にこの管理棟にはいろんなものがありますよ」

確かにそうかもしない。なんせあんな隠し通路が縦横に通つてるくらいだ、地下牢のひとつやふたつ、あつてもおかしくない。

「じゃあIJKの地下牢行けば、ルーフHいるかもしれないってこと？」

「分かりません。けれど見てみる必要はあるでしょ？　とにかく本当にルーフHイアがそこに閉じ込められているなら、急いで出してあげないと……」

なんですか、学院長がやけに焦つてる感じだ。

「学院長、あの子ならだいじょぶですよ。万が一教官が手出しても、返り討ちだと思います」

「ルーフHじゃそだよねえ。とこつかあの子じや、牢壊して出でときそう」

「それが怖いんです

学院長が言ひ。

「万が一牢を壊してもしたら、IJKの建物がどうなるか。崩れないまでも、古い時代のものだけつこつ貴重なんですよ。なのに傷が……」「あー、そっちですか」

思わずナティと苦笑する。

たしかにルーフュ、イザとなつたら建物のひとつやふたつ平氣で壊す。しかもそなつたらそれが重要な國の建物だと、そんなのは一切お構いナシだ。

にしても学院長、あつともルーフュの心配してないのが。

「ともかくそつこいつ」とじや、学院長、急いで行きません? あの子じやもういつ動き出すか

「そだよな。ルーフュつて案外思いつきりいことがある」

ナティの言つとおりだ。

ただその「思いつきりがいい」ところは、氣の毒つて氣もする。あの子は前線なんてとんでもないところで育つて、出遅れが死に繋がるのをイヤつてほど知つてるから、速攻で動くだけだ。だからもし普通に育つてたら、絶対にやらないと思つ。

学院長が手早くお茶のセツトを片付け始めた。

「ルーフュイアが仮に地下牢に閉じ込められたとして、何時間経ちましたかね……さすがにもうあの子でも、これ以上は待つてくれないんじやないかと」

「もうかれこれ数時間だから、もう危ない気が……」

あの子じやもつと早く動いたつておかしくないのに、ここまで待つただけでもある意味凄い。

「急ぎましょ、何かあつてからでは」

学院長がそう言つたとこで、なんか爆発音が響いた。

思わずみんなで顔を見合わせる。

「持たなかつたみたい?」

「だね」

「と、ともかく行きましょう」
真っ青になつた学院長が先に立つて、あたしら隠し通路を駆け出した。

Ruffer

高い窓から差し込む光が弱くなつて、牢の中が今まで以上に暗くなつてきた。

なんでこんなとこに居るのか、いまだに自分でもよく分からない。一応「麻薬の所持」つてことになつてゐるけど所詮痛み止めだし、許可はきちんと貰つてる。

それにただそれだけを言つなら、上級隊の先輩達だつて引っかかるはずだ。

やつぱり麻薬云々は言ひがかりで、要はあたしを閉じ込めておきたいんだろうなと思つた。

ただ、ここをいつつかり出られないのが困りものだ。

出ること自体はそんなに難しくない。錠はあたしでも開けられる単純なタイプだし、施錠の魔法がかけられてても解けるから問題ない。イザとなつたら鉄格子」と破壊したつていいだろ。

でも教官は、あたしが逃げたらイマドを代わりに収監する、と言つてた。

だから迂闊に動けない。イマドの安全が確保されなつうのは、ここから出るわけにはいかない。

それにしても。

考えれば考えるほど腹が立つてくる。

あたしを収監したのはまだいい。何の意図か知らないにナビゲー

でもなるし、実家から圧力がかけば一度とやれないはずだ。

けどイマドは違う。あたしみたいに後ろ盾なんてないし、ここ以外に行く場所も無い。だから学院の言つことを聞くしかない。
そんなイマドまで、なんで巻き込むのか……。

あとで絶対言つ出した人を探し出して、苦情を申し立てよう。

ただ、今はどひこもならなそつだ。

どひいう造りになつてゐるのか、この牢の中だと魔法がいつもより弱まる。だから上手く加減して……というのが難しい。なのに強引に使つたら、地下にある建物の基礎部分を崩壊させてしまいそうだ。

もうひとつのは理由は教官だ。

よほどあたしをここに閉じ込めておきたいのか、鉄格子の向こうには常に教官がひとり控えてあたしを見張つてる。おかげで何も出来ない。

もつとも教官は時々離れたところへ行くし、交代もあるみたいだから、その隙を突けば何とかなりそうだ。

あと、丸腰なのもちよつと氣になつてた。

別に武器がなくたつて魔法の威力は変わらないから、その意味じや問題ない。けど万が一教官たちと相対するハメになつたら、主要な戦力はやっぱり太刀だ。魔法は小回りが利かないから、何をどひ巻き込むか分からぬ。

もうこの状況じゃ巻き込んでいい氣もするけど、さすがに最初から「巻き込んで当然」は良くないだろう。
何とか太刀を取りに行ければいいのだけど、ちょっと望み薄だ。

やつぱつ今度からは学院内でも持つてこよひと書い。

どちらにしても外が暗くなつたし、適当なところで行動を起こしてほうがいいかも知れない、そう思つていた矢先。一いつん、と何かが音を立てた。

驚いて辺りを見回す。けど暗くてよく分からぬ。気のせいだろうか、そう思つたとき、今度は何かがあたしに当たつた。そしてコシコシッと音を立てて床を転がる。

石ころ。

当たり前だけど、こんなものが勝手に空を飛ぶわけ無い。何かの弾みで剥がれた天井のかけらが落ちてきたか、誰かが投げ入れたかだ。

教官の様子を伺う。

落ちてきた石ころに気づいた様子はなかつた。それどころか、なんだかずいぶんそわそわしてる。交代の時間が近いからだろう。

大丈夫そうだと判断して、あたしは教官に気づかれないよう無詠唱で魔法を発動させた。

使つた魔法は雷系、狙いは鉄格子の外だ。それを石が落ちたのと同じだけ、つまり2回放つてみる。

ちょっと間を置いて、また石が落ちてきた。今度は2回ビームじやなくて、しかも間が長かつたり短かつたりだ。

聞いているうちに、頭の中に文字が浮かび上がる。信号の長短を文字に置き換える通信信号だ。

前線では光だつたり音だつたり、いろんな形でこれが使われてた。それと同じだから、考えなくても意味が分かる。

『無事か』

教官の隙をうかがう。せつかくのチャンスなのに、迂闊な行動で潰したくない。けど教官はこっちなんて全然見張つてなくて、しきりに時計を見たあと階段を上がつていった。

教官があれでいいんだろうか？

なんだか複雑な気分だけど、居なくなつてくれたのは助かる。あたしはすぐに魔法で返した。

『ルーフェイア、無事』

教官が居なくなつてしまつたから、かなり大っぴらにやれる。またすぐに外から応答があつた。

『太刀、いるか』

外にいるのが誰か分からぬけれど、あたしのことによく知つてゐみたいだ。

ただ何となく、イマドじやなさそうな気がした。だいいち彼なら、あたしが居るつてわかつた時点で太刀を放り込んでる。

シーモアたちかな、そんなことを思いながらまた返した。

『落として』

窓はかなりの高さがあるけど、魔法で減速させれば受け止めるのは簡単だ。ヘタに他の方法でノロノロ降ろされるより、よっぽど早くて確実だった。

念のためだらう、最初に石が落ちてきて、次に太刀が落ちてくる。

「セレスティアル・レイメント」

小声で魔法を唱えて発動させると、太刀の落ち方がゆっくりになつた。それを上手く待ち構えて受け止める。

魔法の効果が切れると、ずしりと重い感触が手に伝わった。けどすぐ、牢の隅の暗がりへと押しやる。このまま持つていて、教官に取り上げられるのはイヤだつた。

けど肝心の教官はなかなか戻つてこない。どうも階段を上がりかけた辺りで、通話石で誰かと話してゐみたいだ。

耳をそばだてる。

「……あ、そうですか、じゃあまだ……ええ、こちらは大人しいです。代わりに収監が効いたかと」

要するに教官、あたしが牢の中で大人しくしてると言つてゐるんだろつ。

好きでやつてるわけじゃ、ないのだけど。

教官も言つてる通り、イマドを身代わりにするつて言われてなきや、こんなとことく出てつてゐる。

話は続いてるみたいだつた。

「え？ では捕らえていなければなりませんか？」

教官の意外そうな声。予想外のことことが起こつてゐらしい。

「……それだと、8年生のトップ陣は軒並みですか。ずいぶん逃げましたね」

8年生と言つたらあたしたちのことだ。そのトップ陣つて言つたら、あたしと同じAクラスの誰かだろう。これだとイマドやシーモアは、上手く逃げおおせたかもしない。

「ええ、はい。こちらは大人しいので、捜索に行けるかと。分かりました」

「どうやら」の教官、じいを留守にして誰かを探しに行くみたいだ。

話の続きを聞き耳を立てた。

「大丈夫です、身代わりの話が効いてますから。ええ、ですから早く、彼を捕らえた方が」

しめた、と思つた。

この言い方だと、たぶんイマドは逃げ出しても、しかも全く捕まえられなくて、応援が呼ばれたみたいだ。

これならあたしがじいを逃げ出しても、代わりにイマドを収監なんて出来ないだろう。むしろじいを逃げ出して暴れたほうが、イマドが捕まる率が減るはずだ。

教官が応援に行くまでは大人しくして、そのあとじいを破壊することに決める。

「まつたく、てこずらせて」

ぶつぶつ言いながら教官が戻ってきた。そして牢の中を覗き込んで言つ。

「少し席をはずすが、大人しくしてるんだぞ」

「……はー」

なんでそんなことをあたしに言つんだらうと思いながら、素直に返事だけはした。早く行つてもううにはそのほうがいい。

教官は満足やうに元へと、牢から離れる。

脱出するなら、やつぱりあの窓がいいだろ？

手近な壁も、頑張れば破れると思ひ。けどのくらこ厚さがあるか、やってみないと分からない。

その点窓になつてゐるところは、壁の厚さはほとんど無い。だから破るのがいちばん簡単なはずだ。

あたしはポーチの中から小さなナイフと細い糸を出して、刃の先端が爪先から少しだけ見えるように靴底にくくりつけた。さらに、いろんな道具が一束になつたツールキットからピックを選んで、これは手に持つ。

それから少し考えて、あたしは詠唱を始めた。狙いは鉄格子のすぐ下辺りだ。

「時の底にて連なる炎よ、我が命によりて形を取り、いつの世に姿を現せ　来いつ、サラマンダー！」

ゆり、と空間が揺れて、炎をまとつた蜥蜴が現れる。そしてあたしの意思に従つて、巨きな火球を窓の辺りに放つた。派手な音を立てて壁が吹き飛ぶ。魔法じゃなく召喚した精霊だから、結界で弱められても威力十分だ。

火蜥蜴が消えるのを待つて、次の呪文を唱える。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ　フロスティ・エンブランスつ！」

溶け出していた鉄格子と壁が凍りついた。こうしておけばたゞり着いたとき、手をかけたりするにも楽だり。

さりに別の呪文。

「セレスティアル・レイメント!」

さつき太刀を使った浮遊の呪文を今度は自分にかけて、壁にピックを突き立てる。

後は簡単だつた。爪先につけたナイフと手に持つたピックとを利^て用して、軽くなつた身体で上へ昇つていく。

「よいしょ……」

昇りついた先に見えたのは、暗い色の海だつた。どうやら、船着場から脇に反れた辺りらしい。

下を見ると、かなりの高さの崖だつた。

だから、窓なんてつけたんだ。

元々牢屋の中から見てもかなりの高さに作つてあつたし、魔法はかなり威力が落ちる。窓自体にも鉄格子が嵌まつてて、仮に出られただとしても崖の上。これだけ条件が揃えば逃げられない、作った人はきっとそう思つてたんだろう。

でもちよつと甘い。魔法の種類を知らなすぎると、それにこの崖だって、簡単に降りる方法はある。

あたしは一旦壊れた壁に腰掛けて、足につけたナイフを外した。ここから先は逃げ回るだろうから、こんなものをつけておいたら走れない。

その時、下のほうで足音が聞こえた。

「何があった！」

さすがに壁を壊した音で氣いたらしい。もつとも氣づかれるために音を立てて破壊したのだから、来てくれないと困るのだけど……。

「居ないぞ！」

「早く扉を開けろ！」

「か、鍵が」

やり取りにちょっと呆れながら、あたしは空中へ身を躍らせた。
一気に近づいてくる岩場。けどまだ浮遊魔法の効果が残つて身体が軽いから、たいした衝撃もなく着地する。

辺りを見回すと、右手前方に船着場の小屋が見えた。だつたら最初に判断したとおり、ここを右へ行けば船着場から管理棟へ向かう坂に出るはずだ。

さすがに暗いから走るのはやめて、それでも急いで岩場を歩く。

教官たち、来るかな？

あたしが窓を破つて外へ逃げたと分かれば、きっと坂を封鎖するはずだ。

でもそれが狙いだつた。

今島内にいる教官は、そんなに多くない。だからイマドの捜索に当たつての数も限られてるはずだ。

その状態であたしが暴れれば、当然一手に別れるしかない。そなればイマドの負担が減る。

転ばないよつに氣をつけながら岩場を抜けて、桟橋から続く道へ出た。

けどそのまま進まず、道の脇に隠れる。絶対に教官たちはここ非常線を張るはずだ。

息を潜めて待っていると、思ったとおり話し声が聞こえてきた。

「外へ出たなら、通るのはここだけだ。捕まえるぞ」

「はい」

捕まえるなんて、まるであたしが害獣みたいな言い方だ。

今すぐ飛び出したいのをガマンして、茂みの中から様子をうかがう。

声から判断して、教官たちは数人つてとこだらう。どんなに多くても10人は超えないはずだ。これなら何とかなる。

教官たちが坂の中腹を塞ぐのを待つて、あたしは飛び出した。

「ルーフェイア＝グレイス、何故逃げ出した！」

大きな声で教官の一人が問いかけてきたけど、そのまま走る。

「止まれ！　イマドをお前の代わりに収監したぞ！」

この言葉も無視した。

ついでつき、イマドが捕まらないと増援要請していたくらいだ。それからいくらも経つてないのに、彼が捕まってるわけがない。

だいいち彼は他人の考えを読める。だから教官たちの逆を突いて逃げ回るなんてお手の物だ。

走りながら太刀を抜く。

教官の数は予想より少なくて5人だけ。ひとつでもなる数だ。

「と、止まれ！」

スピードを落とさないあたしに焦つたんだろう、教官が上ずつた声で命令してきた。

そこへ真っ直ぐ突っ込む。

「い、このー！」

広げられた網 これじゃホントに動物扱い を潜り抜けると見せかけて横飛び、網を持っていた教官の手を峰で強く叩く。悲鳴が上がつて網の片側が地面に落ちた。

「きやま

別の教官が覆いかぶさつて捕まえようとしてくる。それを身体を入れ替えてかわして、首筋を峰打ち。

そうしてゐる間にもあたしを突破させまいと、教官が2人、前から迫ってきた。

「トオーノ・センテンツアー！」

雷撃が足元に炸裂して、教官たちの動きが一瞬止まる。そこへ踊りこんだ。

近いほうの教官の鳩尾へ、太刀の柄を突き入れる。更にもうひとりをしゃがんでかわして、たららを踏んだ教官の腕を掴んだ。

そのまま勢いを利用して投げ飛ばし、教官たちがひるんだところで呪文を放つ。

「ゼーレ・シユラフ！」

眠りの魔法が周囲に広がって、教官たちが次々と倒れた。

残るは1人。

さつき手首を強打した痛みで、あんまり魔法が効かなかつたんだろう。手首を押さえながら痛そうにしてる教官の喉元へ、刃を突きつけて問う。

「なんであたしを収監したか、教えてもらいますか？」

「い、言つただろう！ 麻薬の所持」

言葉が途中で止まつたのは、あたしが切つ先を押し付けたからだ。

「それは許可を取つてます。理由は別にありますよね？」
あたしの問いに返つてきたのは、別の言葉だつた。

「い、こんなことをして、タダで済むと思つてゐるのか。た、退学させるぞ」

「どうぞ。でもそうなつたら、うちからの寄付はなくなります。あと政財界へ今回の件、もちろん流します」
教官の顔が引きつった。

シェラの資金繰りは決して楽じやない。本校生の働いた分と、卒業生を軍事関係へ斡旋した仲介料、それに富裕層向け箔付け校の高額な授業料と寄付。その辺でどうにか賄つてる状況だ。だからあたしの親からの多額の寄付は、本校が自由に使える貴重な資金源だつた。

そんな状況で、寄付が無くなつたら。

加えて師弟を箔付け校に大量に入学させている、政財界の親たち

にまで「生徒に手を出した」と流されたり、間違いなく経営は大変なことになる。

「で、何が起こってるか教えて頂けるんですか？」

あたしがもう一步詰め寄ると、教官の顔が更に引きつって、笑つてゐみたいになる。

もつともあたし自身は、たぶん教えてもらえないだらうと思つてた。シエラ本校の教官ともあらうものが、簡単に口を開くようじや困る。

「だ、だから麻薬の」

全部訊く前に後ろへ回つて、この教官を昏倒させた。今は同じ説明を一度も聞いてられるほど、時間が余つてない。

昏倒した教官5人は、なんだか寝顔が気持ち良さそうだった。

疲れたかも。

ため息をついてから、教官たちを拘束にかかる。ただきちんとしつ拘束具やロープがあるわけじゃないから、ポーチから魔法で強化された細い紐を取り出して、一人一人急いで後ろ手に縛る。それから魔法で軽くして、2人ずつ船着場へ持つていった。

使おうと思ったのは船だ。

本当はあたしが入つてたような牢に入れるのがいいけど、さすがにそんな暇はない。かといってここで見張りをしてるわけにもいかない。

だから船に教官たちを放り込んで、時間稼ぎするつもりだった。後ろ手に縛った上で船の中に転がしておけば、目が覚めてもすぐに脱出できないだろ？

船着場には連絡艇と、もつと小さいポートとがあった。

小屋の様子を伺いながら、ポートのほうへ近づく。と、ドアが開いた。

とつさに身を隠す。

「……おや、いい気味だ」

出てきた船着場のおじさんは教官たちを見てそう言つただけで、拘束を解こうとしなかつた。

「誰がやつたのか知らないが、たいしたもんだ。まあこれはシエラだからな。下級生だからって侮るからこうなる
ずいぶん大きな声だ。とても独り言には思えない。

「まったく、副学院長も何を考えてるんだか。このシエラを乗つ取るつなんて、簡単じゃない」とくらい分かつてゐるだろ?」「どうもこの人、あたしに話を聞かせようとしてるらしい。これをやつたのがあたしだとは、おじさんもさすがに分かつてないだろ? けど、生徒の誰かだつてことは見当がついたんだろう。

「そもそも学院長の変更は、勝手には出来ん。ただ名乗つてもダメだ。そんなことも知らずにこんなことを起こすんだから、無知の極みだな」

だいたいの状況が飲み込めてくる。

どうもあたしが牢に入れられてから、学院内で騒動になつてゐたいだ。というか騒動を起こしたかったから、まずあたしを言いがかりで収監したんだろう。

「演習島へ2人ほど連絡に行つてくれたが、上手く伝わるかどうか
……おかしな教官に見つからないといいんだが」「
誰だかわからないけど、もうこつそり知らせに行つた人もいるら

しい。

ただ、アテには出来ないなと思った。おじさんが言つてゐる通り、まず敵対してゐる教官に見つかる可能性がある。そうなつたら捕まつて、演習島の先輩たちは知らないままだらう。

「リリへ来たお嬢ちゃんの話、いや、低学年は講堂に集められてるらしいからな。何とかせんと」

耳を疑う。この状況で小さい子たちを一堂に集めてるつてことは、待遇はともかく人質にされてるつてことだ。迂闊に手を出せない。

「まああのお嬢ちゃんには、とりあえず診療所へ行つてもらつたが……無事着いてるといいが」

そこまで言つとおじさんは、また教官たちに田をやつてつぶやいた。

「ロープが要るな。取つてくるか

おじさんが小屋の中へ入るのを待つて、隠れた場所からあたしは出了た。

おじだんと話をしようかと思つたけど、結局やめる。接触はいつも出来そうだし、これが罷つて可能性もゼロじやない。だったらこのまま単独行動をしてたほうが、あたしの居場所やなにかを知られないで済むはずだ。

「セレスティアル・レイメン」

もう一度教官たちを軽くして、最初に田をつけていたボートの中へ一人ずつ寝かせていく。

ついでに舫つてある綱を解いつかんと思つたけど、さすがにやめた。流れについて転覆でもしたら面倒すぎる。

まだ目を覚まさないのを確認したところで、小屋のドアノブが音を立てた。

急いでまた隠れる。

「おやおや、手際のいいことだ。これじゃ私の出る幕が無いな」おじさんが面白がるような調子で言つた後、更に続けた。

「それにしても演習島の教官連中、どうも一部帰つてゐるらしいな。そうなれば講堂の子たちの救出は、難しくなるか……」

嫌な情報だ。けじ知らなかつたらもつと大変なことになるから、教えてくれるのはありがたい。

偽情報の可能性もあるけど。

相手が焦るような情報を流して慌てさせて、こういうのは常套手段だ。だから鵜呑みには出来ない。

そつは言つてももし本当に教官たちが帰つてくるなら、救出が難しくなるのは間違いない。だから罷の可能性を考慮に入れながら、講堂開放に動くしかなかつた。

さつき教官たちを縛り上げたついでに懐から奪つておいた、通話石を出す。あたしが発言するのはムリだけど、ひとつそり聞くだけなら問題ないはずだ。

『イマド=ザニエス、捕獲できません』

『シーモア及びナティエス=デボワール、所在不明』

いろんな情報が飛び交つてゐる。それにしてもさすがAクラス、けつこうつな数がちやつかり逃げてるらしい。

ただ、その逆も居た。

『ミル=ドレッド=セルシエ=マクファーティ、捕獲しました』

嬉しそうな教官の声が氣の毒に思える。ミルには悪いけど彼女を中心に入れるなんて、猛毒を飲み込むようなものだ。

もつともミルが外に居たら居たで、やっぱり問題が多いのだけど

.....
o

『ルーフェイア＝グレイス、脱獄しています』
これには言い返したくなつたけど、頑張つてガマンした。けど脱獄も何も、言いがかりで収監したのだから、謝つてから外へ出すのが筋じやないだろうか？

絶対あとで文句言おうと思ひながら、会話を聞き続ける。
『イマドの居場所は、よく分かつてないみたいだった。せつきから「やられた」という報告ばかりで、行くともぬけの殻らしく』。

今度教えてもらおう。

『イマドの隠密と霍乱、それに逃走は、あたしでもかなわないところだ。だから素直に教えてもらつべきだろう。ただイマドの場合他人の考えてることがかなり読めるから、それを利用してるだけって気もするけど……。』

『学院長、まだ見つかりません』
入ってきた情報にはつとする。

今回の一連の騒ぎで、どうも学院長はキーマンらしい。だからその居場所を裏切り組みの教官たち、必死になつて探してるんだろう。会話はまだ続けていた。

『秘密の場所とやらじや なかつたのか？』
『先ほど向かいましたが、既に誰も居ませんでした』
教官たち、秘密の場所がどこか知つてただろ？……？ ただしにしても、学院長がつかまつてないのは確かだ。

じゅうたら命流できるだらう、それを考えながら、あたしは通話石の会話を聞くのを一回打ち切つた。

船着場のおじさんが海の向こうを見ながら言へ。

「夜中を田安に、戻つてくるらしき。やうなつたら本当に身動きが

取れんな」

貴重な情報だ。ある程度これを考慮に入れながら、動いたほうがいいだらう。

「やれやれ。何か妨害できればいいんだが、この手足ではなあ。まあ、ゆつくり考えてみるか」

言いながらおじさんは片足を引きずつて小屋へ戻つた。
そつと隠れていた場所から出る。

どうしよう。

時間が限られてるだけに、こゝでとつた選択肢が後々致命傷になりかねない。だからよく考えてみる必要がある。

やつたほうが良さそうなことは、学院長との合流、イマドか他のAクラスとの合流、それに講堂に集められてる子たちの開放だらう。

この中で最重要は、間違いなく低学年の解放だ。

ただ、あたし一人でやれるとは思えなかつた。中にはたくさん教官が居るわけで、その人たちが思い余つて手榴弾でも使おつものなら、大変な被害が出る。

もう少し考えて、あたしはまず診療所へ行つてみることとした。

船着場のおじさん情報じや、診療所はあたしたち生徒と敵対関係じゃないらしい。だから行つてみる価値はあるだろう。

もちろん、罠つて可能性はある。けどそうなつても相手は教官だけで人数が限られてるから、その気で準備してれば逃げられるだろう。

船着場からの坂道を上がつていぐ。用心しながら進んだけど、こっちへ来る人は居なかつた。

あたしが逃げ出したのはバレてるし、さつき教官たちが来てたくらいだから、ここに居るのは分かつてははずだ。

なのに誰も来ないつてことは、さつきの5人で十分だと思つてたんだろうか？

なんだか複雑だつた。数が少ないのは助かるけど、自分が舐められてるみたいでちょっと納得が行かない。

ただ他に誰も来ないのは、まだ捕獲隊が壊滅したのを知らないだけっていうのも十分ありえた。だから捕まえられなかつたと分かれば、今度は人数を倍にして追つてくるだろう。

ともかく今のうちに、この坂を抜けるに限る。

結局最後まで出会わぬまま　　出会つたら困るけど　　あたしは坂を昇りきつた。

すぐに横へそれで、一囁脇の茂みに隠れる。これ以上面倒なことに巻き込まれたくない。

見上げた管理棟は、あちこちの窓から明るい光が伸びてる。

ただ、点いている部屋の数が少ない。どうもみんな、あたしやイ

マドを捕まえに教室を出でるみたいだ。

そういうば、教官つて何人残つてゐんぢう？

ふと氣になつた。

シエラは生徒の数が多いだけあつて、教官の数も多い。確かこの本校も、全部で100人くらい居たはずだ。けどそのうちの何人が演習島へ行つてゐるかは、参加してないあたしは知らなかつた。

まさか9割が行つたつてことはないだらうけど、9割ここへ残つてるとも思えない。そうすると妥当なところで、4～6割の40～60人だらうか？

ただけつこう多く残つてたとしても、教官たちはそれぞれ専門が違う。そういう意味ではつけ込む隙は十分だ。

実技専門の教官はもちろんいぢばん数は多いけど、それでも確かに三分の一くらいだ。そして戦術専門の教官たちと一緒に半分くらいは演習島へ行つてゐるはずだから、多くて本島には20人くらいしかいないだらう。

うち5人はさつき縛り上げたから、残りは10人ちょっとだらうか？ でも更に何人かはイマドを追い掛け回してそだだから、手が空いてるのは5～6人な氣がする。

どつちにしても大丈夫そなうなら一旦診療所へ入れてもらつて体制を整えなおして、それから出たかった。

管理棟を避けながら回りこむようにして、診療所の裏手へ出る。

ここも明かりが点いてるから、少なくとも誰か居るんだろう。

どこから入るうかとコソコソ見て歩いてるうち、裏のほうの通気窓が開いてるのを見つけた。ここから入れそうだ。

考え込む。

桟に泥がついてるのを見ても、ここから出入りした人が居るんだろう。

けど、本当に入つていいのか自信が無かつた。もし情報が間違つてたり状況が変わつてたとしたら、入つた途端にまた捕まりかねない。

かといつて確かめようも無いのが困りものだ。手紙や何かで連絡しても、ウソをつかれたらもう分からぬ。

どうしようかと考えあぐねてたら、入り口のほうから声が聞こえた。

「ちょっと！ 隣の食堂へ行くだけだって言つてるじゃない！」
ムアカ先生の声だ。

「具合の悪い生徒がここに居るというから特別措置を取つてゐるのに、それが不満と言うなら特別措置を無くすが？」

「そういう話じゃないでしょ！ タ食がまだなのよ、もつと具合が悪くなるわ！」

なんだか深刻な話になつてゐる。

「だいいちあなたたち、何を考えてるのよ！ まさか、講堂の子たちにも何も食べさせてないんじゃないでしょうね？！」

「さあな。向こうの隊の動きは私の知るところではない

やつぱりムアカ先生は生徒の味方で、反旗を翻した教官たちとは敵対関係みたいだ。これなら診療所に入つても大丈夫だろう。

でもその前にこの教官だ。

「」つそり忍び寄る。「」の教官、先生と言つたの夢中で、全く周囲を警戒してない。

教官越しに正面に向き合つた先生が驚いた顔をしたのとほぼ同時に、あたしは教官の背に手をついて魔法を唱えた。

「ゼーレ・シュラフ！」

至近距離からの眠りの魔法に、教官の身体が力を失う。

「危ない！」

言つて先生が教官の身体を受け止めた。

「頭でも打つたら大変だわ」

先生はそう言つてるけど、その前に起きるかどうか心配したほうがいい気がする。まあ、起きるとは思つけど……。

「ルーフェイア、あなたは講堂へ行かずに済んだのね。ともかく中

へ

「あ、でもその前にこの教官……えっと、ロープ、ありますか……

？」

何しろあんな状態で収監されてしまったから、ロクな装備が無い。

「ロープ？ ちょっと待つてね」

先生が診療所の中へ戻る。

教官のまづはぐつすり寝ていた。起きる気配はなさそうだ。

「これがあつたけど、用が足りる？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

今度からは例え学内でも絶対にきちんと持つていよう、そう思いながら先生がしてくれたロープを受け取る。

「」の教官も後手にして縛り上げて、魔法で軽くした。

「どうするの？」

「その辺に置いてきます」

本当は他の教官と一緒に船の中に置き去りにすればいいんだろうけど、距離を考えるとちょっと無理だ。

少し考えて、向かいの図書館の裏へ持っていく。

図書館の建物の裏手は、壁ギリギリまで茂みだ。その影へ適当に押し込んだ。

全部片付いたら、迎えに来ないとダメかも。

「こんな場所だと、捜索隊が組まれても見つからないかもしねない。けど他の教官に放置したことを知らせると、大目玉くらいそうだし……。

ちょっと困ったなと思いながら、あたしは眠つてる教官を置き去りにして戻った。目が覚めたら自力で道路まで這い出してくる可能性もあるし、今考えなくともたぶん大丈夫だろう。

「大丈夫？」

診療所まで戻ると、ムアカ先生が心配そうに入り口で待つてた。

「先生、中へ。見つかります」

「え？ あ、そうね。ごめんなさい」

あたしの言葉に慌てて先生がドアを開けて、2人で建物の中へ入る。

「わ、もしかしてルーフニア先輩？！」

部屋のベッドには、見知らぬ下級生が寝ていた。

そしてあたしを見て、ベッドの上で慌てて背筋を伸ばす。

「あの、えっと、あたし、一ネットって言います！ その、リティーナの友達で……って先輩リティーナ知りませんよね……」
なんだかよく分からぬけどすいぶん緊張してるみたいで、言つてることがメチャクチャだ。

けど、イヤだとは思わなかつた。むしろ見ていて可愛い。

「ええと、一ネット？ もしかして4年生？」
イメージが、リティーナという4年生の子のことを話していたのを思い出して、そう訊いてみる。
女の子が手を叩いた。

「先輩す」こー！ そうです、4年生です！」
あてずっぽうのビニが凄いのか分からぬけど、喜んでもらえたみたいだ。

ムアカ先生が可笑しそうに笑いながら言つ。

「良かつたわねー、一ネット。憧れの先輩と話が出来て」

「はーー！」

何が憧れなのか不思議に思いながら、でもあたしは何も言わなかつた。せっかく嬉しそうにしてるのに、水を差したら可哀想だ。

「もう一ネット幸せですか。そつだ、明日みんなに白痴しなくなります

！」

「え……」

なんであたしと話しただけで、友達に白痴するんだがつづけど首をかしげてる間にも、どんどん話が進んでいく。

「いつもみんなで、先輩のこと見てます！」

「いつも……？」

あたしなんか見て、何か面白いんだろうか？

そういうえば世の中には、好きな相手を徹底的に付け回す人がいる、つていう話を聞いたことがある。

でもこの子を見る限り、やつこのとは違う感じだった。

「あ、その、別にへんな意味とかじゃなくて！ でも先輩美人だし、話を聞けば聞くほど、謎が深まっていく。だからムアカ先生が話をさえきってくれたときは、心底ホッとした。

「はいはい、もう少のくらこしなさこね。やつこの場合じやないでしょ」

「え？ あー、ごめんなさいー。ああ一ネットドビーハ、これじゃ先輩に嫌われちゃう」

前言撤回、やつぱり事態はこんがらかつたままだ。

とこうか、別に誰も嫌つたりしてないのだけど……。

どうしたらいいのか困り果てたら、また先生が間に入ってくれた。

「一ネット、先輩が困つてるでしょ。あなたの話はその辺までにしきなさいね」

「はあー」

ちょっと面白いところがある子だけど、悪気はなかつたんだろう。一ネットが少しだけ口を尖らせてみせてから黙つた。

「で、ルーフュニア、あなたはどういうふうに？」
やつと話が進みだす。

「私が生徒たちから聞いたところじゃ、みんな講堂に集められてるらしいんだけど。あなたは行かなかつたのね」

「行かなかつたというか……行けませんでした。収監されてたので」

「収監？！」

先生が素つ頓狂な声を出した。

「収監って、牢に入れられる」とどう?「……なんであなたが。
といつか、この学校にそんなものあつたの?　あ、もしかして當倉
?」

「教官が言つには、古い時代の牢屋らしいです」

確かに言われてみると、どうしてあんなものがあつたんだろう?
それとも貴族の館つて、牢屋を作るのがポピュラーだつたんだろう。
うか。

先生も似たよつな」とを言つ。

「なんだつて建物に牢屋なんて……貴族の考へることつて分からな
いわ。けどそれにしたつて、どうしてあなたがそんなところに?」

「分かりません」

むしろ、あたしが訊きたい。

ただ先生は、この答えに納得出来なかつたんだろう。言葉を変え
てまた訊かれた。

「でも、何も理由が無かつたら収監できないでしょ?」「一応、麻薬所持つて……でも痛み止め用で、許可もせりつてますし……」

「ああそうね。確かにあなた持つてるって、学院長から聞いてるわ。普通の痛み止めがなかなか効かないから、許可してあるって」

やつぱりこの話、ちゃんと教官たちには伝わってるみたいだ。だとしたら予想通り、言いがかりつてことになる。

絶対に文句言おひ。

こんなことをされるんじや、許可の意味が無い。

先生も同じ考えみたいで、ぶつぶつ言いながら手を動かしている。

「まつたぐ。副学院長ときたら自分たちで『あの子の件は全員覚えておくよ』とか言ってたくせに、何がしたいのかしら」お茶を淹れてるみたいで、診療所にいい匂いが広がった。

「だいいちここの曲がりなりにも学校。いちばん先にするのは、子供たちを育てるることなのに、はこどり。二ネット、あなたもね」出されたカップの中で、透き通った瑪瑙色が揺れていた。香りがいいから、きっとどこか有名な産地のお茶だろ?。

「ありがとうございます、いただきます」

「いえいえ。ずっと閉じ込められてたんじや、お腹すいたでしょ?『ごめんなさいね、こんなものしか用意できなくて。食堂が隣なもんだから、診療所の中にはあんまり食べ物用意してないのよ』

先生の言葉に、だからさつきの押し問答だったのかと思った。具合の悪い生徒を預かってるのに食べさせるものがないんじや、先生としては居ても立つても居られなかつただろう。

聞いてみる。

「そしたら……これから、取りに行きますか？」

「そうね、お茶飲んだら行きましょうか。何か夕食と、出来たら明日の朝食だけでも確保しないと」

先生の言つとおりだ。どうしても調達できないなら仕方ないけど、可能なら、特に見通しのつかないときは食べておくに限る。

ただ、あたしは先生も行くのは反対だった。

「先生、食堂へはあたしが行きます。危険ですから」

先生はいわゆるふつうの医者で、医務官でさえない。だから武器を扱うとかそういう人を相手にするとかは、全く出来ない人だ。なにこんな混乱した状況の中へ出て行くのは、自殺行為だろう。

「でも、生徒に行かせるなんてできないわよ」

先生の反論にあたしは首を振る。

「あたしのほうが、訓練を受けて慣れてます。何かあつたときも、あたしだけなら対処できます」

イマドやシルファ先輩、タシュア先輩レベルならいいのだけど、同行者は大抵あたしの行動を制限することになる。ましてや素人の先生じや、申し訳ないけど足手まといだつた。

少し間があつてから先生が言つ。

「ルーフェイア、確かにあなたの言つとおりね。納得行かないけど」

「……すみません」

その必要はないのだけど、なんだか申し訳ない気がして謝る。

「あら、いいのよ。私がこうこうに役に立たないのは本當だし。
そうしたら、急いで隣の食堂まで行ってもらいたい？」

「はい」

お茶を急いで飲み終えて、あたしは立ち上がつた。
先生が部屋の奥を見ながら言つ。

「ドアから出て行つてもいいけど、奥の通気窓のほうがいいかもし
れないわ。どっちでも、あなたの判断で使つてちょうだい」

「分かりました」

ざつと装備を確認して、通気窓のほうへ向かつ。ドアは出入りは
しやすいけど、見つかり易いのが難点だ。その点裏手にある通気窓
は出入りはちょっと面倒だけど、まず見つかる心配はない。

小さな窓に身を寄せて外の様子を伺つたけど、何の気配もなかつ
た。大丈夫そうだ。

うつぶせになつて急いで足から外へ出る。そしてそのまま、食堂
の裏手に走りこんだ。

いい匂い。

中じゃ夕食が出来るらしい。

まさか表の入り口へは行けないから、裏の勝手口に手をかける。ドアノブをそつと動してみると、忙しい時間帯のせいか鍵はかかってなかつた。

ほんの少しだけ扉を開けて、急いで中へ滑り込む。

真っ暗だった外と違つて、厨房は魔光灯が幾つも付けられてた。そして出来上がつた山盛りの料理を皿の前にして、何人もの調理人たちが難しい顔で話してる。

棚の影に隠れて、あたしは聞き耳を立てた。

「まったく、今日はどうなつてんだい、誰も食べに来ないなんて」「教官の話じや緊急の集会だつてけど……時間がかかりすぎだよ、料理が冷めちまつ」

「どうも、誰も食べに来てないらしい。だとするとみんな講堂へ集められてから、何も食べてないつてことになる。どつちにしてもこの余話だと、真相は知らされてないみたいだ。あたしは棚の陰から出て、料理人たちに近づいた。

「あの……」

「うわっ、どこからー?」

なんだかすゞぐづくつされる。

「あの、すみません、えつと……」

けどあたしが何か言つたり早く、やたらと高さのある白い帽子なんでこんなに高いんだわつ をかぶつたおじさんが口を開いた。

「やつとお密せんか！ ほら、食べていきなさい」

「え？」

何か予想と違う方向へ話が転がる。

「あの、あたし、そういうわけじゃ……」

「何言つてんだ、食べ盛りじやないか」

話を聞いてないし。

「何がいいかな、アンタたしか、やつぱりしたものが好きだつたね」「え、ご存知……なんですか？」

あたしなんて、たくさん居る生徒の中の一人だ。だからそんな細かいところまで見てるなんて、まつたく思わなかつた。

けど厨房のおじさんは当たり前、という顔でお皿に料理を盛り始める。

「毎日生徒の顔見てるんだ、そのくらい調理人として覚えて当然だよ。特にアンタは可愛くて皿立つしね」

「やつ、なんですか……」

あたしが皿立つていうのは分かるけど、可愛いと皿立つっていうのがよく分からない。

悩んでいたら、目の前にお皿が出された。

「ほら、食べなさい。お腹すいただろ？」「

「あの、たしかにそなんんですけど、それだけじやなくて……」

慌てて言つと、厨房のおじさんが不思議そうな顔になる。

「「」の料理だけじゃダメなのかい？」

「えっと、そういうのでもなくて」

どうしてあたし、いつも上手く説明できないんだろう？
でもここには助けてくれる人が居なそうだから、必死に自分で説明してみる。

「その、隣の診療所に、先生と後輩が居て。食べるものが無いんです」

「なるほど、隣に夕食か！ それは気づかなかつた、すぐ持つていこう」

「え、あ、待つてください」

「このおじさん、悪い人じやないけど、料理以外は何も考えてない感じだ。」

「なんだい、夕食がないって今アンタが言つたじやないか」

「いえ、そりなんですけど、外、今危なくて……」

あたしの下手な説明に、おじさんはじめ厨房の人たちが首をかしげた。

「なんで外が危ないんだい？」

「その、学院内で今、分派騒動になつてるみたいで……」

あたしが聞いた話を、大雑把に伝えていく。

「なんだい、じゃあ生徒が来ないのは、教官たちが閉じ込めちまたから、つてことかい？」

「確認はしてませんけど、たぶんそうだと思います」

講堂に生徒のほとんどが監禁状態なのは確かだ。そしてその状態で食堂へ夕食を食べになんて、許可されるわけがない。

「許せんな、私らが精魂こめて作った食事を食べに来させなことは
「ホントだわ。だいいち子供なんて食べてなんぼなんだから、食べ
なきや持たないのに」

「よし、これから持つて押しかけよ!」「だ、だから待つてください!」
また慌てて止める。

「教官たち、武装します。だから万が一って事も……あとその、
隣に食事を。そつちは安全なので、先にお願いします」
みんなに「おじさんたちの気持ちは分かるけど、危
険なところへ真っ先に行くなんて論外だ。」

「隣の診療所に届けるのは分かったが、講堂はどうするんだい?」「
食事を持ち帰り用の箱につめながら、おじさんが言つ。」

「何人か講堂に行かずに済んでるので、そのみんなで協力してやつ
てみます」

本当は協力できる保証がないけど、そうでも言わないとおじさん
たち、講堂へ突撃してしまったつだつた。

「そうかい、分かった。じゃあまずこれを隣に」「
おじさんの言葉の途中で、裏手のドアが開いた。みんなの視線が
一斉に注がれる。

「　　イマゾ?!」

ダーティーブロンドの見慣れた姿が、扉の隙間から滑り込んでき
た。

「どうしたの？」

「……腹減つた」

情けない声でイマドはやつと、その場へへたり込む。

「すんません、メシ……」

「よし来た！ いっぱいあるぞ、食え食え」

おじさんが嬉しそうに料理をお皿に盛りて、彼に手渡した。

「ありがとうございます！」

喉に詰まるんじゃないかつて勢いでイマドが食べ始める。

「どこに……居たの？」

「島ン中あつちこつち。つかお前にそどに居た？」

「なんか、地下牢に入れられちゃつて」

それから太刀を誰かが届けてくれたこと、牢を壊したこと、教官たちを何人か倒したこと、隣の診療所は安全なことを話した。

「太刀届けたのは、アーマルとヴィオレイだな。ナティエスがお前の部屋から持ち出したの、あいつらが受け取ってたから」

「そうなんだ……」

あとでちゃんとお礼しないといけない。

それにしてもさすがAクラスだ。教官たちが言つてた通り、けつこう逃げてる。

「Aクラスで逃げたの、誰と誰?」「気になつてイマドに訊いてみる。

「んー、まず俺だろ、アーマルだろ、ヴィオレイだろ、それにシーモアとナティエス。あとお前が牢壘して出てきちまつたから、プラス1。ミルとか他は分かんねー」

「あ、ミル、後から掘まつたみたい」

あたしの言葉にイマドが食べる手を一瞬休めて、なんとも言えない表情をした。

「教官に同情しようと。つかミル捕まえるとかバカだろ。疫病神飼うようなもんじゃねーか」

「あたしもそり思つ……」

彼女を中心に入れるくらいだつたら、外で好きにさせておいたほうが絶対にいい。もちろんそれでもかなり不安だけど、中に入れてしまふよりは間違いなくマシだ。

敵に回しても違う意味でイヤだけど、味方についても妙に困る、それがミルだった。

「つたく、ホント教官たちアタマ大丈夫か? お前捕まえて牢屋つてのもアホすぎだし。どうせ壊されるつてのに」

「自信あつたみたい。魔法が弱められる結界があるつて

「その程度でかよ……」

イマドが食べる手を止めてため息をつく。

「お前の魔法の威力、その辺の連中の倍以上じゃねーか。それで最

上級やられたら意味ねーだろ」

「……あのね、面倒だから……精靈、呼んじやつた

「ナゾまでやつたのか」

イマドが苦笑しながら、お目をおじさんに差し出した。

「すんません、おかわりもらえません?」

「おひ、腹につぱい食え」

足座にお目に食事が盛られる。

「ありがとう」れこます。こしても、何がどーなってんだ?
ひとつさに教官ども引つ搔き回して走つちまつたから、よく分かんね
えんだよな。なんか副学園長が好き勝手始めたつてのは、読み取つ
たけど」

「あたしもそれ以上は……つてイマド、追いかけてきた教官たち
は?！」

確かに奪つた教官たちの通話石内でも、イマドは重點的にマークさ
れてたはずだ。なのにこんなとこりで食べてたら、きっと追いかけて
られて掴まる。

「一応捲いてきた。もう行くけどな

「あたし行つてくる! イマドはもう少し食べてー!」

あたしは食堂を飛び出した。

教官たちの通話口を起動させると、念語に変換された会話が聞こ
えてくる。

『イマド=ザニヒス、まだ発見できません』

『施設を全部探してみる。案外食堂辺りにいるかもしけん』

『了解』

「のままじや、見つかるのは時間の問題だ。

走りながら考える。

教官を足止めしなきゃいけないけど、いつものあたしのやり方じゃダメだろ。カンの鋭い教官に、イマドじやないとバレてしまう。

魔法と直接攻撃主体のあたしと違つて、イマドのやつは「よく単純な罠を組み合わせての搅乱だ。

ただ、イマドは相手の考えを読んだ上で逆手に取つてくる。それが真似をするには難しいところだつた。

教官たちの考えは、幸い通話石のおかげである程度分かる。だからそこから考えて、彼のやり方に似せるしかない。

今の状況だと、イマドなら食堂とは全く違う場所に面するように見せかけて、教官たちを引っ張りますだらう。だからそれに近い事をすればいい。

あたしは大急ぎで教室へ向かった。ほととづは男子寮のイマドの部屋がいいんだろうけど、ここからじゃけつと遠い。

校舎の廊下は真っ暗なうえ、誰も居なかつた。まば全員講堂へ集めてしまつたから、見回りしかしてないらしい。

四階にあるいつも教室へ駆け込んで、あたしは魔法を放つた。

「トオーノ・センテンツア！」

雷の魔法で一瞬だけ辺りが明るくなる。まば同時に通話石のまづで報告が上がつた。

『教室が一瞬明るくなりました。イマド＝ザニヒスの挑発行為かと』

『B班向かいます』

あたしは急いで教室を出て、幾つか離れた別のところへ入りなおした。そこで窓を開けて下を確かめる。

誰も居ない。

これなら大丈夫だ。

軽量化の魔法を唱えて一気に飛び降りる。そしてすぐに校舎を離れた。

逃げながら校舎の方を見ると、いつの間にか教室の明かりがついてる。きっとイマドを探してるんだろ？
通話石からまた会話が聞こえてきた。

『B班到着、教室は空です』

『隠れてるかもしね、周囲も探せ』

『了解』

これなら少しは時間が稼げそうだ。

本当はみんなと合流したりしたいけど、教官たちを放つておいた
ら戦力差でジリ貧になる。なるべく引っ張りまわして、出来れば1
人ずつでも無力化したほうがいい。

なんでこんなことになっちゃつてるんだろう？

ふとそう思った。本当だつたらもうひとつで食事を終えて、みんなでお喋りしてる頃なのに……。
長い夜になりそつた。

Arm a l

俺たちは磁石を頼りに、海岸を南へ進んでた。地図がないからはつきり分かんないけど、上陸したところからは、南向けてへずつと砂浜が続いてる。だからヴィオレイと相談して、行けるところまで砂浜行ってみようって話になつた。で、月明かりの下を延々と歩いてる。

「本陣、どこかな？」
「知るかよ」
考えてみるとかなり無謀だ。

先輩の話じや、桟橋からならちゃんと立て札と道らしきものがあるつていつ。けど関係ない砂浜に着いちゃつたから、位置なんて見当もつかなかつた。

分かつてるのは、島の東西に高台があつて、そこが本陣になつてるつてことくらいだ。

「高台つてあれかな
「だとと思うけど……」

暗いからはつきり見えないけど、砂浜の先が高くなつてる。他にはそれっぽいところが見当たらぬから、たぶんそうだらう。

周囲が切り立つた崖でその上に校舎だのがある本島とちがつて、ここは砂浜がなだらかに高くなつてつて、自然に草なんかが生えてる地面に変わる。本島と違つて狭いからか、生えてる木はまばらでちょっと小ぶりだ。ただそれでも、俺たちの背丈の倍はある。

じつにしても、長く続く砂浜のまづが絶対に歩きやすい。だから俺、てくてく砂浜に行くしかなかった。
けどそのうち、おかしなことに気づく。

「おい、なんか向こう、明かり見えないか?」

「うん、僕もそれ言おうと思つてた」

砂浜のまだかなり先だけど、小さな明かりが右往左往してた。

「先輩たちかな?」

「教官かもな」

「あ、それヤだ。端っこよらない?」

「だな」

砂浜の真ん中は歩くのやめて、草と木の茂つてる傍に移動する。
ここならよっぽど近づかれないと、見つかったりしないだろう。
木の陰に紛れるみたいにして、少しずつ近づいてく。

「教官たちだね。何してるのかな?」

「船に乗り込んでるみたいだな え?」

自分で言つといて不思議に思った。

今日の演習は泊りがけで、夜通し続くいちばん大規模なやつだ。
だから先輩たちは帰つてこない。なのに教官たちが暗くなつてから
船に乗り込んでるって、なんかおかしい。

ひとつひとつありそうないと考えて、俺はすぐやなことを思いついた。

「もしかしてあの教官たち、反乱に加わるんじゃないか？」

「え、それヤバいよ。ただでさえ講堂とかあんな状態なのに、こっちの教官まで帰つてきたら、僕たち勝ち目ないじゃん」

「ああ……」

何しろ「教官」だ。上級隊の先輩たちを教える側だ。そんなの相手に、俺たち下級生が何か出来るわけ無い。しかも先輩たちがこっちへ引き離されてるから、俺らやられ放題だ。

「先輩たちに、何とか知らせなくちゃ」

「だな。でも教官たちに見つからないようにしないと」

様子を見ながら近づいて、見つかる前に木々の間に隠れる。話し声が聞こえてきた。

「イマド＝ザニエスが逃げ回つてるらしいな」

「ルーフェイア＝グレイスも脱獄したらしい」

「それはやつかいだな……あの2人が組んだら、さすがに手ごわいぞ」

内心ガツツポーズする。イマドが逃げ回つてルーフェイアが逃げ出したなら、かなり教官たちはてこずるはずだ。

けど、それも「今のままなら」っていう条件付きだ。もしっここの教官たちがみんなで一斉に帰つたら、ルーフェイアだってまた掴まるかもしれない。

「ヴィオレイ、行こう。少しでも早く先輩たちに知らせないと
「うん」

本当は今、俺たちが船を爆破でも出来ればいいんだけど、そういう技術はまだ教わってなかつた。それに何人も教官が居る中を突破して船をどうにかするなんて、たつた2人じゃ無理だ。

だから、急ぐ。先輩たちが事情を知つて教官たちを足止めしてくれれば、向こうはそれだけ楽になるはずだ。

細い道を見失わないように気をつけながら、俺たちは木々の間を進んだ。道が合つてるかどうかは自信が無いけど、向こうから教官が来る方向を選びながら歩いてく。

平坦だった道が、少しずつ上り坂になってきた。

「もしかして、そろそろ本陣かな？」
「だといいんだけどな……」

そう期待しながらも、何だか心配だ。着いたと思つたら道を間違つてたとか、笑うに笑えない。

けど、今回は当たりだつたらしい。坂を上りきつた辺りで行く先に明かりが見えた。

「よかつた、先輩たちだ！」
ヴィオレイが駆け出す。
「おい、待てよ」
慌てて俺は後を追いかけた。

「おーい、せんぱーい！」
走つてくヴィオレイの前に、人影が立ちはだかる。そして次の瞬間、ヴィオレイは投げ飛ばされて地面に叩きつけられてた。

ひとりでに手近な草むらに身を隠す。

「低学年か。どこから入り込んだ」

そつと見ると、教官だった。服装が違うからすぐ分かる。

「言え！」

「デルピスに連れてきてもらいいました」

「はあ？」

暗いし遠いから表情は見えないけど、教官が呆れたような声を出した。というかたぶん、心底呆れると思ひ。

「何がデルピスだ、赤ん坊の『太話じゅあるまいし。本当のことを言え』

「ホントですよ、デルピスです」

ヴィオレイ、どうも開き直つたらし。

「教官なのに、生徒の言つこと信じないんですか？ ひつでー！」「信じて欲しければ、もう少ししまともな嘘をつけ！」

「だから嘘じやないですってばー！」

大声でヴィオレイが騒ぐ。

「ホントにホントなんですよ。デルピスがこうぞりぱーんつて飛んで、僕たち引つ張つてきてくれたんですよー！」

普段の言動からじや想像つかないけど、開き直つたヴィオレイはかなり厄介だ。ミル並みに扱いづらくなる。

「あー、教官、信じてませんね？！ 生徒がホントのこと一生懸命訴えてるのに、それ信じてくれないなんて！ ひどいっ、ひどすぎ

るつ！ これじゃ何言つたってダメじゃないかーつ！

「一、こら、少し静かに……」

慌てた教官が止めたけど、ちょっと遅かつたらしい。

「何ですかな、やけに騒がしいですが」

聞こえた別の声に、思わず自分がにやけるのが分かつた。この声、

カー・コフ先生だ。あの先生はいつだつて俺らの味方だ。

ヴィオレイが声を張り上げた。

「先生、副学院長が反乱起こして、低学年入質にしてますーー。」

「黙れつ！」

怒った教官がヴィオレイを殴り飛ばした。

そしてほぼ同時にこの教官も投げ飛ばされる。

「そういう理由で殴るのは感心しませんなあ」

教官を投げ飛ばしたカー・コフ先生が、すっとぼけた口調で言つた。

「自分がやられればほら、アンタも嫌でしょ？」

「この裏切り者が……」

「裏切り者？ 何ですかそれは。そもそも裏切るものがありません
なあ ほらヴィオレイ、行きなさい。どこだか知らないが、何か
することがあつてここへ来たんだう？」

「は、はい！」

ヴィオレイが立ち上がつた。

今のカー・コフ先生の台詞からしても、反乱起こした教官以外は何
が起こつてゐるか知らない。だからまず、知らせないとだ。

教官が起き上がりながら通話石に何か言つた。仲間を集めてるん
だろう。

「さ、早くしなさい」
カーロフ先生が油断なく構えながら言つて。
こつちへ視線を走らせたヴィオレイと一瞬田が合つて、俺は頷いた。
2人同時に走り出す。

「ま、待てっ！」
ヴィオレイに追いすがろうとした教官の近くへ飛び出す。
「なんだっ？！」
予想してなかつたんだろう、教官の動きが一瞬止まつた。そこへ
カーロフ先生の蹴りが決まる。

「センセ、ナイス！」
「予定と違うんだがねえ」
またすつとぼけた口調で先生が言つた。

「私の予定じゃ、私がここで存分に大立ち回りして、その間に君たちがどつかへ行くはずだつたんだが。これじゃつまらんなあ」と
さりげに先生、怖いこと言つてゐるし。

「で、ヴィオレイにアーマル、さつき言つたことは本当なのかな？」
「ホントです、じやなきや俺たち、わざわざ演習島まで来ません」「だらうな。 やれやれ」
どういうわけか先生がため息ついた。

もしかして俺たち、減点とかされるんだろか？ それだと俺は成績悪いから、メッチャクチャにヤバイ。

けど先生の言葉は俺の予想とはぜんぜん違った。

「副学院長がもしかしたら、とは思っていたが、本当にやるとはね
え」

「先生、知つてたんですか？」

驚いて訊くと、先生は頷いた。

「知つてたというか、一応予測の中にあつた程度だがね。でもまさ
か、やるとは思わなかつたねえ」

「す」「……」

そういうのを把握してゐ辺り、さすがカーロフ先生だ。
けど先生自身はそういう思つてないらしい。

「す」かつたら、今回のことも未然に止めてるだろうねえ。だから
すごくないな。　で、出来たらいろいろ聞かせて欲しいんだが」

「はい」

俺たちは話しあつた。

ルーフェイアが居なくなつたこと、みんなで探してて講堂に入れ
られずには済んだこと、イマドが教官たちを引っ張りまわしたこと、
ルーフェイアは噂の地下牢に閉じ込められてたこと、そして俺たち
は船着場のおじさんに教えられて、隠してあつた船でこにくへ来たこ
と……。

先生が腕組みして考へ込む。

「だいぶ厄介な事態になつてゐねえ」

「はい……」

だいいちそうじやなかつたら、俺たちこんなとこまで漕ぎ渡つて来てない。

「ともかく手を打たないとだな。まずは演習を中止して生徒を帰すか。他の教官たちに気づかれると面倒だが……」「あ、先生、それなんですけど」

砂浜でのことを思い出して嘆息。

「教官たち、なんか船着場で船に集まつてました」

「……それは困つたな」

あんまり困つてなれどうな口調で先生が言つ。

「先生、急がないとヤバくないですか？　あの教官たちが反乱に加わつたら、低学年とかタダじや済まないです」

「だろうねえ。まあその代わり、上級生への連絡は楽だろうが。ともかく本陣へ行こう」

言つて先生が歩き出した。

俺らもついていく。

「あ、先生、いいところに」

女の先輩がひとり、二つちへ走つてきた。

「病人が出たんですけど、なんか他の教官が見つからなくて」「だろうねえ。みんな本島へ帰つてしまつたらしいから」

「え？」

先生の言葉に、先輩が怪訝そつた顔をした。

「今、演習中ですが」

「私もそう思つてるよ。だが他の教官には違つたらしく
そこで先生が急に姿勢を正して、命令口調になつた。

「演習島で訓練中の全生徒に口頭で伝達。演習は直ちに中断、点呼
後、全員船着場へ集合。また東隊の上級隊は伝達に加わらず、各自
速やかに本陣へ集合!」

「了解」

理由なんてまつたく訊こうとしないで、先輩が敬礼をして走り去
る。

「これが傭兵隊なんだ、と思つた。四の五の言つてないで命令に従
う、そういうところだと思い知る。

「センセ、これからビーフするんです?」

好奇心いっぱいふうに、ヴィオレイが訊いた。

先生がのんびりと答える。

「実際には集まつた上級隊の顔ぶれ次第だらうか……とりあえずあ
の連中の帰島は、可能な限り阻止したいねえ。あと万が一教官たち
が帰島していた場合に備えて、船の確保だな」

「あ、船ならあります」

俺は答えた。

「あるのか？……ああ、君たちが来た船か。ビックにあるんだい？」

「えーっと……」

どう説明しようか考へる。

「ああ、場所が分からぬのか。ほら、この地図を使いなさい。今居る場所はここ、君たちが教官を見たつていう船着場がここだ」先生がひとつひとつ、指を指して教えてくれた。

「で、どこから來たんだい？」

「えつと、この船着場まで続く砂浜を、ずっと北から……」

「ほう、ずいぶん歩いたねえ。大したもんだ」

先生が感心する。

「で、その船は隠してきたかい？」

「え？ あ、そのまま……」

そういうえば砂浜に乗り上げて、何もしないで放置だ。これじゃ教官たちに見つかったかもしれない。

でも先生は怒らなかつた。

「今度からきちんと偽装しなさい。でないと、イザと書つときには使えないからね」

「はい」

俺も、今度からは言われなくて済むと思つ。

「で、どのくらいの大きさかな？」

「ええと、手漕ぎで、何人か乗れるくらいかな……」

先生が少しだけがっかりした顔になつた。きっと、もっと大きい

船だと思つたんだろ？。けどすぐ表情を元に戻して言ひ。

「手漕ぎといつといろが気になるが、少なくとも上級隊を何人かは返せるな。そうすれば、向こうから迎えの船が出せるか」

先生、もう先の先まで考へてるみたいだ。

そこへ上級隊の先輩たちが戻ってきた。

「集合しました」

「い）苦労」

すりと並ぶ先輩たちは、素直にカツ「い」。

「先生、状況が変わったようですが」

「実はそなんだ。どうも本島で、低学年が人質にされているらし

い」

ざわつと先輩たちの間に動搖が走つた。

中心らしい先輩 隣はルーフェイアとよく居るシルファ 先輩だ
けど、こつちは誰だろ？ が訊く。

「詳しい説明を頂きたいのですが」

先生がもつたいたぶつて頷いた。

「副学院長が、学院長に対し反旗を翻してね。それで低学年が講堂に集められて、人質になつてゐるそうだ」

質問した先輩が絶句した。他の先輩たちもみんな息を呑んでる。

「い、子供たちの状況は……」「講堂に集められてるという以外、情報は無い。また学院長の安否は不明だ」

波の音だけが響いた。

「あの、それって……」

先輩のひきつた声を、先生が遮った。

「まだ何も分からんのでね、何とも言えないよ」

「そ、そうですね」

さすがに上級隊の先輩たちも、こんな事態は考えたこともなかつたみたいだ。かなり動搖してる。

先生だけが、落ち着き払つた声で命令した。

「これより、上級生は全員本島に帰還する。またそれに先立つて、上級隊は船着場にて船を確保する。戦闘になる可能性があるので、警戒を怠るな」

「はいっ！」

先輩達の声が揃う。

先生が続けた。

「本来ならきちんと作戦を立てるところだが、その時間はない。各分隊毎に行動し、臨機応変に対処するように。なお交戦となつた場合、手加減は無用だ。それから第1班は別行動とする」

「了解」

先輩たちが動き出す。

「先生、俺たちは？」

「他の上級生と一緒に、船で帰りなさい。さすがに実戦は危なすぎ
る」

「はい……」

先生の言つてることは正しいけど、なんだか物足りない。せつか
くここまで頑張つて来たのに、最後はまるで留守番だ。
けどそんな俺たちを見て、先生は笑い出した。

「いやいや、おもしろいな。うん、可愛い可愛い」

「何ですか……」

女子なら喜ぶんだらうけど、男子の俺が男の先生に可愛いとか言
われたって、ちっとも面白くない。

なのに先生、俺の答えまでもが面白かつたらしくて、余計に笑っ
てる。

「先生！」

「ああいやいや、うん、悪かった。君たちには実は仕事があるよ」「
思いもかけないことを先生が口にした。

「ホントですか?!」

「ああ。こんなところでウソを言つても始まらないしね。君たちに
は、乗つてきた船までの案内を頼みたいんだ 第1班！」
先生が残つてた上級隊を呼ぶ。

たぶん最上級生の先輩たちが、俺の前に並んだ。

1人はイマドと昔同室だった、セヴェリーグ先輩だ。他は顔は見たことあるけど、名前までは分からぬ。

「君たちはこの子たちが来た船のある場所まで行って、可能な限り早く本島へ帰島して欲しい。桟橋の船を確保できるとは限らないからね」

「了解です。本島へ帰島できた後は、どのように？」

「船着場で船を確保、演習島からの移送を行つて欲しい。上級隊が演習島で船を確保してもしなくても、足は必要だらうしね」

「分かりました。君たち、案内してくれ」

意外なぐらいあつさり、先輩たちが命令に従つた。俺はもつと細かく訊くと思つてたから、ちょっとびっくりだ。

「ん？ 方角が分からなくなつたかい？」

驚いてぽけつとしてたら、先輩に1年生みたいな扱いされた。

「いえ、分かります。船着場から砂浜を、ずっと北へ行つたところです」

「なるほど、あの辺りか」

先輩たちは土地勘があるから、これだけで大雑把な場所が分かつたみたいだ。

けどそこで、思いもかけない言葉が出る。

「先生、船の場所がだいたい分かりましたので、この子たちは置いていいでしょ？」

「え……」

さつきの今でこれなんてヒドい。俺たち、船までの案内頼まれたはずだ。

「先輩、でも」

セヴェリーヴ先輩が眉根を寄せて答えた。

「分かつてる。ただ君たちを本島までは連れて行けない。そうなると砂浜に残していくことになる。そのとき、無事に本陣まで戻れるつて言い切れるかい?」

「それは……」

たぶん大丈夫だろ?と思つ。ここは定期的に魔獣が駆除されてるし、さつきだつて歩いてきた。でも「絶対大丈夫か」って言われたら、分からぬ。

先輩が正しこそ頭じや分かる。だけど納得行かなかつた。

「先生!」

振り返つて抗議すると、先生が肩をすくめた。

「すまんね、最初から行かせないなんて言つたら、船の場所を教えないと思つたんだ」

「そんな……」

これじゃ騙されたも同然だ。

先輩たちがすまなそうな顔で俺らに敬礼してから、砂浜のほうへ歩きだした。

先生が言つ。

「悪かった。けど実戦に君たちは巻き込めないしね。その代わり、船の確保作戦を見に行こ?一緒に遠くから見るだけなら大丈夫だ

るつか「ひ」

「……はい」

まだ納得行かないけど、ここにただ待たされるよつはマシだ。

お知らせ
自サイトにて、期間限定でUFを公開中です。よかつたら下のリンクからどうぞ
またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。
こちらはなるべく内に掲載です。よろしくお願ひします

あとがき

新しい話を読んでくださって、ありがとうございます
前作とは一転、みんな揃っての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合いくらい。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

「そ、行こう」「

先生に促されて後ろをついていく。

俺たちはずいぶん警戒しながら来たのに、先生はどつかへ散歩行くみたいな感じだ。そんだけ慣れてるんだなと思った。

と、先生が立ち止まる。

どうしたのか訊こうと思つたけど、そんな雰囲気じゃない。だから俺もヴィオレイも黙つて先生の後ろに立つてた。

そうやつてワケもわからんまま時間が過ぎた後。いきなり前のほうでうめき声が上がる。

「残つてた教官が居たみたいだね」

「残つてた……」

しばらく頭の中で考えてて、言葉の意味を知る。ようするに教官相手の実戦だ。

「まあ不意打ちだからね、」ちらに被害はないよ。あの教官も氣絶してるだけだろうしね」

そこまで言つて先生がため息をついた。

「それにしても、昨今の教官たちはどうにもねえ……副学院長が人事権を使って勝手に入れ替え始めてから、本当にレベルの低下が激しい

「え、そうだつたんですか？」

初耳だ。というか俺なんて、全く気づかなかつた。

またしかにここ2年くらい人気のあつた教官が居なくなつて、嫌な感じの教官が増えはいたけど……。

「正直、わざとそういう者だけ採用しているのかと思つたほどだよ。いや、本当にわざとやっていたのかもしれないが。それにしてもだ、武器の扱いひとつ取つても、まず私が教えなければならぬような者ばかり」

先生の話は終わりそうになかった。かなりストレス溜まつてたらし。

「だいたい、通り一遍の訓練を受けてちょっと実戦を経験した程度で、シエラで教えられるわけがないだろ？」いやそれでも下級生なら可能だろうが、上級生、わけても上級隊に何か教えるなどどういムリだ。おかげで私のスケジュールときたら、朝から晩までびつちりときた。何もかもあいつらの尻拭いだ

「せ、先生……」

カーロフ先生、こんな性格だったなんて知らなかつた。

先生の話はまだ続いてる。

「何よりも腹立たしいのは、こいつがついで私が尻拭いをしているというのに、それを連中が何とも思わないことだ。いや、別に私を持ち上げろと言うわけじゃない。せめて悔しいと思つて学べばいいものを、何もしないで済むのは楽でいいと思つていい。向上心の力ケラもない。子供たちのほうがよほどマシだ。なのに教える側だとふんぞり返つてゐるのだから、救いようがない」

当分、続きそうだ。

「だいたい、教官ともあろうものが幾ら不意打ちとは言え、生徒に倒されてどうする。これで教えようというのだから、笑うしかない」

「あ、あの……」

「しかもだな、あいつらときたら　ああすまん、何の話だつたか

な？

やつと先生が正氣に戻った。

「悪かった悪かった、つい愚痴つてしまつたね
「あ、だいじょぶです。けど今の話、ほんとですか？」

俺の言葉に、先生がちょっと首をかしげる。

「今のはどれかな？」

「その、だから教官たちのことです」

教官がそんなにひどい状態で、なのに何にも知らずにそれに教わつてただなんて、ちょっとショックだ。
だからちゃんと聞きたかった。

「教官たち？」

「あの、だから教官たちが武器の扱いもまともに出来ないって……」

「ああ、そのことか」

先生がひとつ頷いて、また話しだした。

「実に情けない話だが、本当に出来てなくてね。いや、確かに扱うだけならあれでも何とかなるだろう。だが実戦というのは何が起ころかわからない。だから通り一遍で済むわけがないんだ。ありとあらゆる状況を想定し、それに応じた扱いを覚え、果ては武器を失つて敵から奪つたものを使うことまで考えてだな」

質問したことをちょっと後悔する。

「だいいちSHURAの本校というのは、その辺のMesoとは違うだろ
う？　ならば教官もそれなりの矜持を持つて当たらねばならんわけ
で、だからその人選にも細心の注意を持つて当たらぬといかんわ
けだが、その点がどうにも」

「今まで続くんだろう？」

「センセ、それは分かりましたー。他の質問いいですか？」

たまりかねたらしく、ヴィオレイが口を挟んだ。

先生も「質問」って言葉は無視できなかつたらしい。話を中断されたのに、嫌そうな顔もしないで答える。

「何だね？ 言つてみなさい」

「えーとですね、教育がダメダメなのはわかりました。でもダメダメだつて分かつて、どうして止めさせなかつたんですか？」

ヴィオレイの質問、思つてたより鋭い。

「いい質問だ」

先生も褒めた。

「その点については、いろいろ理由があつてね。まあいちばん大きいのは、人事権を握られていたことなんだが」「でも学院長のほうが偉いじゃないです。ダメつて言えればいいんじゃないですか？」

ヴィオレイがなおも突つ込む。

先生が嬉しそうに頷きながら答えた。

「いいところを突いてるよ。ただ、なかなか君の言つ通りには行かなくてね」

そこで一回言葉を切つて、先生は腕組みした。

「いい質問だ」

先生も褒めた。

「その点については、いろいろ理由があつてね。まあいちばん大きいのは、人事権を握っていたことなんだが」「でも学院長のほうが偉いじゃないですか。ダメって言えればいいんじゃないですか？」

ヴィオレイがなおも突っ込む。

先生が嬉しそうに頷きながら答えた。

「いいところを突いてるよ。ただ、なかなか君の言つ通りには行かなくてね」

そこで一皿言葉を切つて、先生は腕組みした。

「気に入らないからと言つてポンポンシステムを変えたら、信頼が無くなってしまうだろう？　だからシステムを変えずに、人を変えなくちゃいけない。けれど一度任命した人を急に変えるのは大変ですね」

「じゃあ、そんな人、副学院長にしたのがまずかった？」

身も蓋も無いヴィオレイの言葉に、先生が笑い出す。

「なかなかハツキリ言つね、君は。だがうん、その通りだ。ただどちらかと言うと今回は、騙されたケースだな。副学院長に任命した当時は良かつたんだが、そのあと欲に目がくらんだのか、豹変したんだ」

「あー、お決まりの……」

ヴィオレイの納得したような声。

俺もやつと疑問が解けた。あの学院長がなんで反乱なんか起こされたんだろうと思ってたけど、そういうことなら分かる。信頼してた人に裏切られた学院長はショックかもだけど、たしかによくある話だ。

でもそこまで考えて、俺は引っかかった。先生さつき、「予想はしてたけど」って言ってなかつただろうか? 気になつて訊いてみる。

「先生、だとすると『予想してた』って言つのはなんなんですか? 「お、君もなかなか目の付け所がいいな」褒められた。

先生がうんうん頷きながら説明しだす。

「予想してたというか、副学院長が自分の派閥を増やしていたのはたしかだからね。だとすると、そのうち主導権を取りにくるだらうとは踏んでいたんだ」

「なるほど……」

そういう予想なら分かる。けどそうなると、こんな騒ぎを許してるのが分からなかつた。

「その……でも人質とか、まづくないですか? 予想してたんなら、なんでそんなこと……」

上手く言えない。

でも先生は、俺の言いたいことを察してくれたみたいだ。

「つまりあれかな、予想してたならなんで低学年があんなことになつてゐるのか、でいいのかな？」

「あ、はい、そうです」

予想してたんなら、防げたはずだ。そうすればあの子たち、あんな目に遭わないで済んでる。

何でそんなことになつたのか、それが知りたかった。

「どうすればとが分かんないですか？でも、もつちよつと何か他の方法が……」

「たしかに君の言つとおりだ。ただ学院長は、『様子を見る』と仰られてね。間違いに気づく機会は必要だらつと」

「それはそうですけど」

学院長の言つてることには正しこと思つ。大失敗した生徒もいつも学院長が許してくれて、この学院追い出されないで済んでるし。けど心が広いのも、ユーユー事態になるとちよつと問題だ。

「君の言つたことは分かるよ。だが学院長だからねえ

「ですよね……」

逆にだから「学院長、つても言えるわけだ。

「まあそつこつわけで、副学院長の行動が予想を上回つた、といつとこりかな

「……上回らないで欲しかつたです」

正直に感想を言つと、先生が吹き出した。

「いいねえ、そのストレートな物言つば。若さだなあ

先生がひとしきり笑つたところで、少し遠くで爆発音がした。海のほうだ。

ついさっきの笑顔から一転、先生が少し難しい顔になる。

「どうやら作戦は失敗らしいな」

「失敗？」

少し考えて、俺はやっと意味を理解した。

「それって、船の確保が出来なかつた、ってことですか？」

「そうなるね。どうやら爆破されたようだ。行ってみよ」

歩き出した先生の後を、俺もヴィオレイも慌ててついていく。

桟橋の周りは騒然として、船の後のほうから煙があがつてたた。

「状況は」

先生の声に、近くに居た上級隊の先輩が答える。

「交戦と今の爆発で怪我人が数名。ただ幸い防御魔法を展開していたため、1人が頭を打つた以外は軽症です。また教官たちは見張りと思われる数名を残して、ここには居ませんでした。1隻を残して船が無くなつていたので、既に帰島したと思われます」

「やっぱり残つた見張り用連中用の船だつたか。しかし学院の備品を爆破とは……関わつた全員の給料から弁償だな。船は高いんだ」

先生の妙に現実的な台詞に、先輩たちの表情がちょっと緩んだ。

「それで船だが、直せそうかい？」

「すぐには無理だと思います。浸水して、沈没を避けるために砂浜へ引き上げているくらいですから」

「おやおや、それだと修理屋にここまで来てもらわないとだな。依頼料を弁償代に上乗せだ」

単に場を和ませようとしてるのか、それとも本気なのか分からなければ、ホントこの先生は面白い。

「先生、どうしますか？」

心配そうな顔で先輩が訊いた。

「」のままでは、本島へはとても……」

「ああ、心配には及ばないよ。じき向いにつから、迎えが来るだろうからね」

言いながら先生が通話口を出す。

「やれやれ、こんなこともあらつかと持つてきたが、本当に使つハメになるとはなあ」

「それ、何かふつうと違つんですか？」

ヴィオレイが訊いた。

通話石は使い勝手がどんどん改良されて、毎年のように新しいタイプが出てる。けど先生が持つてるのは、手のひらサイズの操作盤に通話石と記憶石をはめただけの、「」ふつうのタイプだ。

「ふむ。どこか違つよつて見えるかい？」

「見えないです」

ヴィオレイの実も蓋もない答えに、また先生が笑い出す。

「本当に君は面白い子だなあ。うん、その通り。別にどこも違わない」

ふつうだってこと得意気に先生言つてると、大丈夫だろうか？なんかこう微妙にズレって、ちょっと心配になる。けど、ヴィオレイはそんなこと気にしなかつたらしい。

「じゃあ、何が『念のため』なんですか？」

「教官たちには知られずに、学院長やムアカ先生と連絡を取るためのものさ」

俺たちはもちろん、報告してた先輩たちも表情が変わった。

「じゃ、じゃあ、それがあれば……」

「そういうこと。まあ今すぐことは行かないかもしれないが、学院長もムアカ先生もさすがに気づいてるはずだ。西に陣取った子たちが帰つてくるまでには、連絡くらいつくだらう」

最後に「楽観的な見方だが」と先生は付け加えたけど、俺たちは気にならなかつた。今までどうにもならなそつだつた流れが、一気に変わつた気がする。

「さてさて、連絡を取つてみるか」

先生がいたずらっぽくウインクして、通話石を操作した。

「誰か　おお、ムアカ先生ご無事でしたか。ええ、こちらも何とか。はい、下級生の件は訊いてますよ。勇敢な子が二人、海を渡つて知らせにきてくれましたから」

繋がつた。これならイケる。

俺とヴィオレイは目配せしあつて、ちょっとだけガツツポーズをした。

Tasha side

ふと目が覚めた。

(……何時ですかね?)

時計を探りながら考える。ただ窓の外を見る限り、いい加減日も暮れた頃のようだ。

タシュアは普段ならこんな時間に寝たりしない。夜更かしはするが、基本的に昼は起きている。

ただ、タベは任務でほぼ徹夜だった。そして午前中までかけて事後処理も終わらせ、やっと学院へ戻ってきたのだ。そんな状況で、周囲に合わせて夜まで起きている趣味はなかった。

起き上がる。

(どうしますか……)

起き抜けなのもあって、もう少しだけ待つてから何か食べたい気がした。

なんとはなしに魔視鏡を立ち上げる。

(何か来ていますかね?)

昨今は魔視鏡のネットワーク網の発達が著しく、新しい魔令譜のお知らせなどが、登録をしておけば来るようになっている。

その中には稀にだが興味深いものが混じっているため、タシュアはチェックを欠かさなかつた。

いつもどおりの手順で進めていく。が、今日は同じように行かなかつた。どれだけ待つても、学外のネットワークに繋がらない。

何かのHラーかと立つたまま、3度命令を出しなおしてみたが、結果は同じだった。

(……ふむ)

机の前に座つて、本格的に操作を始める。

(こちらの経路は生きていますね)

寮内は問題ないようだ。

そのままひとつひとつ確かめていくと、ネットワークが生きているのは学内だけで、そこから外へが繋がらなかつた。

(これはどうにもなりませんか)

学内では問題がないところを見ると、自分の魔視鏡の問題ではないだろう。おそらくは学院と外とを繋ぐ、高位通話石の異常だ。さすがにその修理は、タシュアの手には余つた。

魔視鏡は一旦諦めて、少し考える。

高位通話石は今や通信の要だ。何かの連絡をするときによくこれを使わないということは殆どない。

逆に言つとそれほど重要なため、複製を作りつつかゝつセツトで置くのが一般的だった。そうすればイザといつとき、他が肩代わりできる。

もちろん学院もこの仕様だ。なのに今は、そのバックアップさえも動いてない。異常事態と考えていいだろう。

(何が起こりましたかねえ)

念のために大剣を手にし、寮の外へ出てみる。

廊下はやたらと静かだった。

(泊りがけの演習ですしね。当然ですか)

考えながら歩を進める。

通信網の状態から見て、内側から外への連絡を意図的に切つただらうことは分かる。問題は誰が何の意図でやったかだ。

(まあ、職員の誰かでしょうね)

高位通話石を1つだけ遮断するのなら、出来なくもない。だがバックアップの稼動まで意図的に止められるのは、アクセス権限を持つ一部の者だけ。

それが生徒でないのは、考えるまでもなかつた。

だが一方で、最も権限の大きい学院長がしたとは思えない。彼はやや甘いところはあるが性格は温厚で、少々のことでも寛大に許すことが殆どだ。だからこんな嫌がらせまがいのことはしないだろう。そうなると、対象はほぼ絞られてくる。

(学院長と対立する連中、ですか)

生徒のどこまでが気づいているかは分からぬが、職員間には派閥が出来て一分している。正確には「勝手に分派活動をしている」と言つたほうがいいかもしれない。

片方は学院長を中心とするものだ。属しているのは古株の教官が多く、学院長が直接採用した人が殆どらしい。性格もみなやや甘いところはあるものの、いかにも教師らしい子供好きばかりで、学生にも慕われている。ただかなりの数が分校へ転任したり辞めたり

で、最近は「」へ一部になつていた。

そしてもうひとつが、副学院長を中心とするものだ。

「」からは新しく赴任した教官が多いのだが、タシュアの目から見て教師として問題がある者がやたらと多かつた。技術的にも「」ぐ当たり前の水準で教える立場としては力不足だし、性格も高圧的で教師としては問題がある者ばかりだ。

だが古株の教官たちが居なくなつた後を埋めるように次々と採用されたため、現在ではかなりの数にのぼる。ふだん受ける感触からすると、職員の半数どころではないだろう。

その副学院長派が、何かとうるさい上級生たちが居ないタイミングで何かやらかした。それがいちばんありそうだ。

もつとも副学院長はじめ深く考えない「」そそつかしい者ばかりなので、単純に誤つてバックアップまでダメにした、という可能性もゼロではないが……。

そんなことを思いながら踊り場まで来て、タシュアは足を止めた。自室にいるときからやたらと静かだと思つていたが、上の階からも人の気配が感じられない。

（「」の階なら分かりますが……）

「」には個室ばかりで、上級隊ばかりだ。そして今日は泊りがけの演習があるため、任務でなければそちらへ行つているはずだ。だから無人なのはおかしくない。

タシュアがここに残つていたのも偶然だ。予定ではもう少し任務に時間がかかるはずだったが、成り行きで徹夜となつたために早く片付いて、早々に帰つて仮眠していた。

だが他の階も気配がないのは異常だ。

ふつうに考えれば上級生が居ない寮は無法地帯で、低学年がやり放題ではしゃいでいるはずだ。なのに、全くそんな気配はない。

念のために階段を上がってみたが、やはり低学年が騒いでいるはずの階は無人だった。

(自由にさせておこては困る、と)

低学年が居ないとなると、ただ事ではない。これが真っ昼間なら十分在り得るが、外はもう暗くなっている。

この時間帯は当番のある者以外は自室で過ごしたり、食堂へ行って夕食を取つたり、図書室へ行つたり、各階の共用スペースでお喋りをしたり、果ては廊下を走り回つたりと、それぞれ思い思いに過ごして良かつた。それが居ないのだから、教官が命じてどこかへ連れ出したのは間違いない。

(マニユアルでは、この対応がされるのは災害時でしたか)
だが、そういう気配はなかつた。そもそもそんな事態なら、とにかく田が覚めている。

(やはり、教官がらみですかね)
高位通話石の遮断の件から考えて、それがいちばん可能性が高そうだ。

とりあえず様子を確かめようと寮を出る。

(おや、あそこですか)

暗い寮とは対照的に、寮と校舎との間にある講堂は明かりが灯つ

ていた。周囲を教官が囮んでいるところから見ても、間違いないだらう。

死角へと周り、中の様子を覗つ。

(低学年がほぼ全員ですか)

目測で数えた感じ、そうとしか思えない。

(まあ、頭の悪い人間が考えそなことです)が

最近採用された教官の水準から思うに、安直な考へで騒ぎを起したのだろう。特に今夜は上級生が居ないため、やり易いと踏んだに違いない。

(目的は……学院の掌握ですかねえ)

確証があるわけではないが、可能性が高かつた。

高位通話石の異常、特にバックアップの停止は、ほぼ間違いなく管理者が引き起こしたものだ。他の人間でも不可能とは言わないうが、難易度が高すぎる。

また低学年を集めたのも、間違いなく教官たちだ。彼らが勝手に集まるわけがない。

何か緊急事態が起こってこれから島外へ逃がすというならまだあり得るが、それならわざわざバックアップを潰したりしない。イザと言つときには外への通信が可能かどうかは、死活問題だ。

何をどう見ても、「知られたくないことをしようとしている」としか思えなかつた。

やつているのは、副学院長派と見ていい。

学院長やそれに準じる一派は子供好きだ。また公正明大を基本にしていて、何か企むようなことはしない。子供たちの安全を第一に考えつつ、きちんと説明して納得もさせる。そういう者ばかりだ。

それが、こんなマネをするとは思えないし、そのメリットも見当たらない。

副学院長とその一派が悪巧みを実行に移し、その一環で予想外の騒ぎを起こしがちな低学年を監視下に置いた、といつていいだろ？

(ヒマですこと)

権威などなんとも思わないタシュアにしてみると、何でここまで労力を払ってコトを起こすのか理解できない。

そもそも当該するだけの能力がないからこそ、今の立場に甘んじているはずだ。それを自身を変えるのではなく無理やり環境を変えようなど、自身を客観視出来てないが故だらう。

加えて、それに同調する教官が多いのも気に入らない。

(能力が無い人間ほど、欲は人一倍ということですかね)

ただ、何かをしようという気にはならなかつた。立場上、教官たちが下級生を傷つけるとは思えない。そんなことをすれば、自分たちが学院を掌握した際にすぐ困る。

この学院は、単独で存在しているわけではない。幾つもの分校を各地に抱えており、微妙な力関係で成り立つていた。

例えば規模で言えば本土の分校のほうが大きいし、やはり本土の金持ち付け箇付け校は政財界の師弟が多いため意向を無視できない。首都の分校もやはり有力者が多いし、他国にあるものは当然違う主張をしてくる。

一方でこの本校は採算は取れているものの、規模では小さい方だ。MeSとしての実力では今なおトップを誇るが、他校もそれぞれ独立性を打ち出して対抗していた。

じついう背景があるため、本校の発言力は外の者が思うほど強く

ない。しかも他校は隙あらば本校の発言力を削ぎつつしているから、おかしな真似は出来なかつた。

なのに、万が一生徒を傷つけでもしたら。

この辺の事情は、教官なら誰もが知つてゐるはずだ。

逆に言うなら、生徒を傷つけるようなことは出来ない。そんなことをして他校から糾弾されたら、副学院長が学院を掌握する意味が無くなる。

(まあ、もう失いつつある氣もしますがね)

この騒ぎを外へ知られずにどう学院長の交代をするつもりなのか、見てみたいくらいだ。

(さて、どうしますか)

状況さえ分かつてしまえば、そして用は無い。通信網が使えないのは少々不満だが、事が済めば回復するだろう。適当に歩いていく。途中何ヶ所か教官が見張りをしていたが、難なく通り抜けた。

人影のない校舎を抜けると、明かりの漏れる食堂が目に入る。

(……夕食にしますか)

思えば任務から戻ってきたときに、部屋にあつたものを少し食べただけだ。後は寝てしまつて何も口にしていない。
正面の入り口には教官が立っていた。
構わず近づく。

「何をしに来た」

呼び止める教官に平然とタシュアは答えた。

「夕食を食べに来ただけです。ここは食堂で、食事を摂るための施設だったはずですが？」

言つて入ろうとしたタシュアへ、後ろから教官が手を伸ばす。

(まつたく)

そう思つている間にも身体は勝手に動いていた。身体を入れ替えながら教官の腕を掴み、相手の勢いを利用しながら捻る。鈍い音。そして悲鳴。骨が折れたか関節が砕けたのだろう。

「」Jがどういう学校か、教官ともあらうものがお忘れのようですね。後からの不意打ちに対処する方法も、散々教えているというのに

嘯いてからタシュアは食堂へ入つた。呻いている教官は放置だ。そのうち誰かが見つけるだろう。

中は当然ながら人の姿が無かつた。奥にこここの従業員がいるだけだ。

「おや、食べに来たのかい？」

「ここへ他のことをしに来る人間が、いるとは思えませんがね」

毒舌を吐きながらも軽食を頼み、トレイを持つて適当な席へ着く。

(静かでいいですねえ)

元々タシュアは人ごみも騒音も嫌いだ。だから普段も混んでいい時間に来たりする。だから貸し切り状態といつのは、むしろ心地よい。

と、従業員の一人がこちらへ来た。

(食事のジャマはしてほしくないのですがね)

そう思いながらも口にしなかったのは、相手が何か知つていそう
だつたからだ。

食べながら黙つて待つ。ややあつて、相手のほうから言葉をかけ
てきた。

「あなたは、演習に行かなかつたのかい？」

「任務でしたので。別段、珍しいことではないと思ひますが
シエラの本校では常に誰かが任務に出ているといつてもいい。そ
のくらいしないと経営が賄えないのだ。

(ぱつたくり同然ですが)

任務をこなしたからといって、その報酬が直接生徒の手に渡るわ
けではない。多少の手当では出るものその他には無く、報酬のほとん
どは学院の金庫行きだ。

ただ家賃が無料で三食賄いつき小遣い付き、上級隊になれば給料
が出て、任務も手早くこなせば余つた時間で行き帰りにちょっとし
た観光が出来る。どの任務も片手間にしかならないタシュアには要
くない条件で、だから学院に居ついている。

従業員はまだ横に立っていた。

「まだ何か？ 用が無いのならお引取り願いたいのですが

「あ、いや。その、外はどうなつてるんだ？」

「どう、と言われましても。晴れて夜空が綺麗ですよ

タシュアの答えに、相手が酔でも飲んだよつた顔になる。

「いや、そういう意味じゃなくて、」

「そちらが何も言わないのに意図を理解しないなど、無理難題を言わ
れても困りますね」

答えが予想外だったのだから、もう一度啞然としてから、従業員
は話し始めた。

「ええとだから、下級生が食べに来ないんだ。上級生が来ないのは
演習だから分かるんだが、下級生が来ないのはおかしいだろ?」
「そうですね」

カップに入ったスープを口に運びながら同意する。

(……イマイチですね)

しばらく置いてあったのか、スープはやや冷めていた。火から下
ろしたての熱々のほうが美味しい種類なのに、これはあまりよくな
い。

従業員のほうは、タシュアの同意の言葉を「話の続きを促してい
る」と解釈したらしく、また話し始める。

「なんか、下級生が講堂に集められてるらしいんだが……何か知ら
ないか?」

「ご自分の目で確かめてきてはどうですか?」

「え、でも、見張りが」

「先ほど入ってきたときは、怪我でもしたのか倒れていましたがね
自分がやったことは棚に上げて置つ。」

「ホントか? ! それなら、もしかしたらあの子達に夕食を あ、

そうだ、奥に逃げてきた生徒が1人居るんだ。いろいろ知つてそ
だから呼ぶよ」

氣を利かせたつもりなのか、バタバタと従業員が奥へ走つていつ
た。

(食事中のところで、走らないで欲しいのですがね)

しかも頼んでも居ないのに、さらに人が増えるらしい。

だが奥から覗いた顔を見て、タシュアは別の言葉を口にした。

「こんなところで、何をしているのです」

「先輩こそ、なんでここにいるんですか」

言いながら厨房の奥からイマドが出てくる。

「私は単に、任務帰りで仮眠していただけです。あなたこそ、何故
講堂に居ないのですか」

「こっちが外にいる間に、あいつらが勝手に集めたんですよ」

「島内にいるのに命令が分からないのは、問題だと思いますがね」

言いながら考える。

自分も気づかなかつたのでそうではないかと推測していたのだが、
やはり一斉放送等は使われなかつたようだ。おそらくは教官が寮へ
出向いて、低学年だけを集めたのだろう。

(講堂に上級生を入れないため、といったところですか)

タシュアがそうだつたが、大掛かりな演習があつても上級生、特
に上級隊は任務がらみで寮に残つてゐることがある。

だが人質にするなら無力なほうがいい。そのために全員集めよう
として上級生に知られるより、多少取りこぼしたとしても、人知れ
ず下級生だけを集められる方法を取つたのだろう。

「で、あなたはそのまま逃げ回っていると」

「逃げ回つてゐるつづーか、たまたまダチと一緒にたんで、見つかつたときとつさに教官たち引き付けただけですつてば」

「イマドはあまり深く考えずに言つたようだが、見過せない情報だつた。」

「ダチと」と言つからには、外に他にも居たはずだ。だとすると案外逃げた生徒が居そうだ。

「その後逃げているなら同じだと思いますがね。とにかくで、他に誰が講堂から逃げ出したのです？」

タシュアの問いに、後輩がすらすらと答えた。

「逃げ出したつてより、捕まらなかつたつてほつが正解ですけどアーマルとヴィオレイ、あとシーモアとナティエスが逃げてますね。他に診療所にも何人か居るとか。ミルのヤツは逃げてたけど、なんか捕まつたらしいです」

「あれを捕まえてどうする気やら……」

思わずそんな言葉が口を突いた。

何しろあのミルドレッド、ありとあらゆるもの引爆しき回す天才だ。敵に居てもたまらないが、味方に居たらもつと困る。

そんなものをわざわざ捕まえるというのだから、物好きとしか言いようがない。

教官たちのレベル低下は予想以上だと思いながら、タシュアは確認した。

「逃げ出したのはそれだけですか？」

「俺も全部は知らないんで。あーあと、ルーフェイアのヤツが逃げてます」

「おや、命令無視とは珍しい」

ルーフェイアは良くも悪くも優等生で、教官に逆らひよつなことはまずしない。なのに逃げ出してこるとこには興味深かった。だがそれを横からイマドが否定する。

「あー、別にアイツ、講堂から逃げたとかじゃないですよ。一番最初に居なくなつちまつて俺ら探してたんですけど、地下牢に入れられてたらしいです」

「何をしているのや、ひ」

ある意味ルーフェイアらしいが、そんなところに入れられるとなると素直も行き過ぎだ。

だいいち普段の彼女の素行から見ても、何か非があるとは思えない。逆に言ひなら言いがかりでしか収監できないわけで、ならば徹底的に説明を求めれば済む話だ。

けれど大人しく収監されたといつのだから、それもせずに言ひなりだつたのだね。

ただ今は「逃げてこる」とこつこつから考へるこ、牢破りはしだようだ。

(よくまああの子が、そんな型破りをする気になりましたねえ)

深く考えず他人に従うだけと思っていたが、多少は考へる頭が出来きいたらしい。

「で、ルーフェイアはそのまま霍乱ですか」
タシュアの言葉にイマドがため息をついた。

「さつさまでここに居ましたよ。けどあいつ、俺の身代わりしに飛び出しちまつたんで」

「彼女に囮を任せて自分は食事と
からかわれて、更にイマドが大きなため息をつく。

「アイツのほうが俺より強いですって」「面白くなさそなのは、言つていることが事実だからだろ。」
もつとも、イマドが平均より劣るわけではない。むしろ平均よりもかなり上だ。ただルーフェイアは文字通り桁違いで、同級生の追随を許さない。

知つたことではないが。

当人同士の関係など、お互いで決めれば済む話だ。他人が口を突っ込む必要はないし、当人たちも合わないと思つならさと別れればいい。

ただこのカツプルは肝心のルーフェイアが何も分かつていなから、話がそこまで進むかも怪しいのだが……。

いざれにせよイマドの一連の話から、副学院長とその一派がルーフェイアを危険視していたことは分かる。
(まあ妥当な判断ですか)

上級生が大規模な演習で居ない今、ルーフェイアたちが本島では最年長だ。その中でもトップの実力を持つ彼女は、マークされて当然だろう。

同時に、恐らく同じAクラスの面々も危険視されているはずだ。現にイマドは追い掛け回されている。

だが話を聞く限り、危険視されているメンバーはかなりが掴まらずに済んでいるようだ。それもルーフェイアが居なくなつて探していたためというのだから、皮肉な話だった。

(いざれにせよある程度、同級生たちで連携しているようですね)
ルーフェイアを収監したという牢が、ありきたりの物のわけが無い。加えて武器も取り上たはずだ。またイマドや他の同級生の身の安全と引き換えに、くらいいことを言つた可能性もある。

それでも脱獄しているのだから、ある程度の情報をルーフェイアは得ているはずだ。恐らくは掴まらずに済んだ友人たちの誰かが、その辺りを手引きしたのだろう。

(甘いですねえ)

なんでもそうだが、やるなら徹底的にやらないとダメだ。今回の場合ならまずイマドをはじめルーフェイアの友人たちを何人も収監し、それで脅してルーフェイアを捕まえ、一緒におじこめるくらいしないと、何かの弹みで逃げ出される。

そういうふた手間を惜しんでルーフェイア一人を牢へ入れて済んだと思うよりでは、最悪に備えているとは言い難い。

(実際、見事に逃げ出されましたしね)

教官たちは「自慢の場所へ閉じ込めたつもりだつたのだろうが、ルーフェイアに常識は通用しない。自身への影響が無いのをいいことに、精靈を呼んだ上で同時に魔法くらいは簡単にやつてのける。もし何もさせたくないければ、足かせとして誰かと一緒に収監しないとダメだ。

(これで教える側だというのだから、教わるほうがたまりませんね)
少なくとも生徒の考えを上回るくらいいのことは、してほしこころだった。

「あなたは必ずするのです？」

いろいろと考えつつ、戯れに後輩に聞いてみる。

「あなたはどうするのです？」

「俺ですか？ 食ったんでまた出ますよ。アイツ一人に任せとくわけにやいかないんで」

「ありきたりですね」

もつとも、それが悪いわけではない。時間を稼いで援軍を待つのは定石だ。だが、確実に勝ちに持っていくには足りない。

こちらの言葉が意外だったのだらう、怪訝そうな顔でイマドが訊いてきた。

「そういう先輩はどうするんです？」

「何もするつもりはありませんよ、今のところは。もつとも暇ですからねえ……さて、この状況ですとどちらひとつと面白いですかね」

後輩は表情を変えなかつた。ただ多少雰囲気が変わつた気はするから、何か考えてはいるようだ。

その後輩に視線を向けたまま言葉を続ける。

「油断しきつた田の前の後輩を捕らえても面白しうですね。ルーフェイアも釣れるでしょうし、高く売れそうですね」

「あいつらじゃ踏み倒しそうですけど」

後輩が軽口を叩いたのとほぼ同時に、あらぬ方向から嬌声が響いた。

「『Jリはーん！ おつかない』！」

「ミルドレッジ、ここは騒ぐところではありませんよ」

言わざと知れた学院一のトラブルメーカーが、取り巻きを連れて

食堂へ入つてくる。

「えーでも、お腹すいたしー」

「だからと言つて、騒いでも空腹は治らないと思いますがね
言いながらざつと見た感じ、勝手に出てきたわけではなさそうだ。
武器を手にした教官たちが、子供たちの後ろに居る。

(食事だけはさせることにしましたか)

見た感じ五月蠅さに耐えかねて渋々のようだが、放置よりはマシ
だろう。あるいは、ミルドレッドが大騒ぎしたのかもしれない。

(まあ考えがあつて……とは思えませんが)

もし仮にあつたとしても、彼女の場合起こす騒動で帳消しだ。
入ってきた人数は、およそ2クラス分ほど。順番に食べさせるつ
もりらしい。

「誰かー、『はんー』

「おうつ！ 座れ座れ、今すぐ食わせてやる」

厨房から従業員たちが飛び出してきて、食堂内が慌しくなる。
と、教官の1人がタシュアへ視線を向け、足音も高く寄ってきて
声を上げた。

「何故ここにいるー」

「夕食を摂りに。ここは食堂ですから」

答えが意外だったのか、一瞬教官が立ち尽くす。そしてすぐ、ま
た声を荒げた。

「上級隊は演習だらう。」

「任務でしたので」

それだけ答えて、タシュアは軽食の残りを口に運ぶ。

目の前の教官は何か言いながら武器を向けようとしたが、別の教官が来て何か囁き、結局何も起こらなかつた。

(こういう損得勘定は出来るのですねえ)

ならば今回の騒動の損得も計算すればと思つが、彼らひとつにはメリットのほうが大きく見えたのだろう。

この間にイマドは姿を消していた。イザとなるとプライドなどあつさり捨てて、なりふり構わないタイプなだけある。

(さて、後輩たちばかり出ますかね)

少しばかり慌てると面白いが、その辺が確認できないままだ。まあどうか紛れに急いで姿を消しているので、多少は本気に入ったかもしれないが……。

そうしているうちに、別の一団がまた入ってきた。順番にと言つてもかなりハイペースで入れ替えるつもりらしい。

(うるさくなりましたね)

普段の食堂に比べれば、がらがらと言つていいく程度だ。だが人が入ってくればそれだけ騒がしくなる。

お茶を飲み終え、トレイを手にタシュアは立ち上がつた。

「どこへ行く!」

「どこのへ行こうと自由だと思いますがね。私の場合演習は任務で免

除されてこますし、講堂へ行く必要もなはずですし

教官たちにしてみれば田の畠へとひに置いておきたいのだろうが、従う義理はなかつた。

それで退学と言われても、タシュアとしては一向に構わない。学院にある程度従いつつ居つてゐるのは、単にそれが楽だからだ。別にこゝを追に出されても、生きていくべく何とでもなる。

「（）馳走様でした」

言いながら食べ終えたトレイを所定の位置に置き、食堂を出る。ダメージを与えて置き去りにした教官は見当たらなかつた。既にどこかへ運ばれたらしい。

（さて、どこへ行きますか）

丹明かりの下考える。そもそもが任務を早く片付けたがための空き時間だ。予定などあるわけがなかつた。

現時点でいちばん面白そなのは、この状況を引っ搔き回すことだ。双方が互いの思惑で動いているところへ、両方に對して横槍を入れる。大混乱は必至で、いろいろな意味で楽しい見世物になるだろう。

だが。

（面倒ですしねえ……）

確かに面白いは面白いのだが、労力に見合わぬ気がする。

(まあ、様子を見ますか)
自分が居るとは教官たちは思つていなかつたようだし、イマドを
からかつておいたので生徒たちも慌ててているだらう。

意図したわけではないが、両方の陣営に横槍を入れた格好だ。な
ら少しのんびりして、また何か動きがあつてからでも十分だ。そも
そも、何かをする義務も無い。

ふと見ると、田の前の図書館の扉が少し開いていた。この騒ぎで
閉め忘れたらしい。

(借りていきますか)

たしか、面白い新刊が入つていたはずだ。
ふらふらと館内へ入り、面倒なので灯りをつけぬままとりあえず
棚を見たところ、首尾よく目当ての本を発見した。
手にとつて勝手に貸し出し手続きをし、片手に図書館を出る。

(一田戻りますかね)

このままこの辺をウロウロしていくても、しばらくは何も起こらな
いだろう。だつたら部屋へ戻つて学内の様子を魔視鏡でさぐりなが
ら、のんびりしていたほうが楽だ。

図書館の外へ出ると、低学年たちがわざわざと動いていた。食堂
を出てくるグループと入るグループとが、入り口の辺りで右往左往
している。おそらくタイミングが一緒になつて、狭い入り口を塞い
でしまつたのだろう。

(少し考えればいいものを)

そんなことを思いながらも横目で素通りし、講堂もそのままスルーして、タシュアは一旦自室へ戻った。

(さて……)

2台あるうちのひとつ、学内用の魔視鏡を立ち上げる。部屋を出る前に確かめたとおり、学内の通話網は生きている。だったらそこを傍受すれば、大体のことは分かるはずだ。

(教官たちはこれでしたね)

本来通話石は、傍受が非常に難しい。オリジナルの石と共振する子石の間でしか、通話が成立しないためだ。

だが横断的に通話を可能にする高位通話石が発案されたことで、そこへ割り込む形で傍受ができるものへと変貌していた。

タシュアが何度も魔視鏡を操作すると、发声器から音が流れ出す。

(活発ですこと)

低学年の食事の入れ替えの様子、あるいは講堂の様子が、次々と報告されていた。

傍受される可能性を承知で偽の情報を流している可能性もあるし、使われている魔視鏡網 자체もこれひとつとは限らないが、それでもおおよそのことが分かりそうだ。

(あとは待ちますか)

教官たちの騒々しい報告を頭の片隅で聞き取りつつ、タシュアは図書館から借りてきた本を広げた。

Natiess

「ああ、貴重な魔法陣が壊れた牢見ての学院長の最初の台詞が、それ。入ってた誰かさんのことは、ちつとも心配してない。しかも学院長つたら、あっちこっち触りながら嘆いてる。

「この牢と魔法陣、300年以上前に敷設されたものを改良しながら来た、歴史あるものなんですよ」

「歴史ある牢つてヤかも」

思わずあたし、つぶやきちゃった。

だつて、そんなものに歴史あってもねえ。どうせだつたらもつと、綺麗なものとか凄いものに歴史欲しいもの。

学院長のほうはそれどこのじやないみたいで、しゃがみこんだり伸び上がってみたり。

「……学院長、とりあえずここ離れますよ。教室どもが戻ってきたらヤバいですから」

見かねたシーモアに言われちゃつたりして、これじゃどっちが年上だか分かんない。

「修復に幾らかかるやうり……これでも一応、文化財としては貴重なんです」

「分かりましたから、とりあえず隠し通路」
言つてシーモア、学院長を引っ張つてつてゐる。

にしても、この学院の建物がそんなに価値があつたなんて、ちよ

つとオドロキかも。古いだけだと思つてた。

ちなみに古い建物だつてだけあつて、隠し通路のひとつが地下牢隣の物置に続いてたの。で、あたしたちそこから潜り込んだんだけど、誰も居なかつた。牢の中は空っぽだし、見張つてる人も居なくて。

要するに、ルーフH（だと思つ、たぶん）が脱獄しちやつて、見張つてた人も探しに行つちやつた、つてことみたい。

ただ幸い牢は、思つた程は壊れてなかつた。上のほうに鉄格子のはまつた窓があつたつて学院長は言つんだけど、被害はそこが大穴になつてゐるくらい。たぶんあそこから出てつたんだろうな。とりあえずそれ以上見るこなさそだから、みんなで隠し通路へ戻る。

「建物崩れなくて、よかつたですねー学院長」

「確かにそれは僥倖ですが、地下牢が……」

学院長、やつぱりちょっとショックみたい。

「あれを修理するとなると、大変なんですよ。いつたい幾らかかるやら。学院もそんなに余裕があるわけじゃないんですが……」

「そこか、と思つちやつたり。まあ確かに何をするにも、世の中お金が要るわけだけど。

「だつたら学院長、ルーフHイアに請求すりやいいんじやないかい？」

「ああ、確かにそうですね」

シーモアの提案に、学院長がなるほど、つて顔をする。

「カレアナでしたら、事情を話せば少しほ出してくわそうですしね」「学院長……」

なんだかため息。まあ学院つてはお金ないから分かるけど、それにしてつて。

そしたら学院長、あたしのこと見て笑つて言つたの。

「分かつていますよナティエス、ルーフェイアは被害者だと言つたのでしう?」

「です」

だつてルーフェつたら、思いつきり巻き込まれ。はつきり言つて、何にも悪いことしてない。なのに牢屋壊して請求つて……。ただあの子お金持ちだから、平気な顔して出しちゃいセうだけだ。

「それにしてもルーフェ、どこ行つちやつたのかな?」
あたしが言つと、シーモアが肩をすくめた。

「分かりやしないよ、あの子の行き先なんて。だいいちあの子じや、島内どこだつて行けるだろ」「確かに……」

さすがに島外へは出てなしだけど、あの子じや野宿だつてへつちやうだらうし。

「ま、牢から出たなら心配ないよ。上手くやるよ、ルーフェなら」「そうだね」

口でそう言いながら、でも意外だつたな、と思つた。

何しろルーフェ、大人しい子。教官に逆らうとかあり得ない。だ

から牢にも入つたんだろうし。なのに逆らつて派手に壊して出でて
とか……何があつたんだろ？

後で会つたら、絶対訊いてみよ。

それからあたし、学院長のほうに向いて。

「「」のあとどうするんですか？」

「ちばん肝心なこと訊ねてみた。

「」の隠し通路に居る限り、あたしたち安全だと想つ。でも逆に言
うと、なーんにもしないままつてワケで。それはちょっと、面白く
ないしプライド許さないし。ルーフはほどほにいろいろ出来ないの
わかつてるけど、ただ隠れてるだけつて言つのもつまらないし……。

「そうですねえ」

学院長がちょっと下向いて、魔光灯で伸びた影が揺れた。

「ちばんの懸案事項は、低学年の子たちですからね。あの子たち
を解放しないと。ただ、そのためには最低限、上級生に帰つて来て
もらわないなりませんね。戦力が足りません」

あたしも学院長の言うとおりだな、って思った。

講堂の後輩達は、絶対なんとかしてあげなくちゃダメ。ただそれ
でも、教官たち相手に上手いくかどうかは微妙。数が多いのは有
利だけど、教官たちが本気出したらいどらの程度かがわかないし。

そう考えちゃうとちよつとため息。あたしたち本当に大丈夫なの
かな？

「ただシーモアは、そこまで悩んでないみたい。

「そしたら、演習島にでも知らせに行きます？」

「けろつとして、そんな無謀なこと言つてる。

「ムチャ言わないでください学院長。というか、連絡取れないんでですか？」

「連絡ですか……先ほどの通話石で、誰か出ますかね」
学院長が思い出したみたいに、通話石にじつた。
あたしたちも耳そばだつながら、黙つて隣で待つ。

「おや、ムアカ先生。これをお持ちでしたか」
シーモアと2人でガツツポーズ。だってこれでだいぶ違うもの。
学院長は、ムアカ先生と話している。

「ええ、何とか無事ですよ。おや、そちらにも生徒が居ますか」
話からすると、講堂行かずに済んだ子が他にもいるみたい。

「おや、ミルダレッドが講堂に？ 連れて行かないほうが多い気が
しますが……」

今度はシーモアと2人で肩すくめた。あの子を連れ込むなんて、
教官たち何考てるのかな。

というか、どう考えたつて自殺行為。ゼーつたい引っかきまわさ
れて予定が狂つて、ヒドい目に遭うの間違いなし。

「いらっしゃる方も2名ほどいますよ。助けてもらつてます
それから学院長、だいぶいろいろ話してから通話を切つた。

「何か分かりました？」

「ええ。ただ、予測とあまり違いはありませんね。一部に確証が取
れたというだけです」

そう前置いて、学院長が話し出す。

「騒ぎの首謀者は、残念ながら副学院長で間違こなさそうですね。あなたたちと同じ△クラスは、だいぶ逃げ出してるようですね」
聞きたかったことが次々と学院長の口から出てきて、ちよつと嬉しいかも。

「そうそう、ルーフェイアも脱獄したあと、ムアカ先生のところに顔を出したようですね」

「わ、やっぱり無事だつたんだ！」

思わず手を叩いた。

もちろん、あの子に何かあつたなんてぜんぜん思つてない。でも「無事」という知らせを聞くのつて、思つてるだけとは重さがまるつきり違うもの。

「ルーフェイアとイマドが自由に動ける状態では、教官たちは振り回されるでしょうね……気の毒に」

学院長つたら、なんだか同情してる。

まあ言いたいことは分かるんだけど。でも困らされてる相手に同情とか、ちょっと納得いかない。

「でも学院長、あの2人が引きつけてくれたら、相当乐じやないですか」

シーモアに訊かれて、学院長が頷いた。

「ええ。ただ演習島から他の教官たちが帰つてくる可能性もあるので、あまり時間はなさそうですね」

「え、それ大変！」

思わず声が大きくなつて、慌てて口を押さえた。

「そんな短時間でみんな逃がすってのは、ちょっと難しいだらうね」「うん……」

思わずこうで事態が詰まっちゃった。
でも考え込むあたしたちに、学院長が「もしかしたら」って前置
いて教えてくれたの。

「どうもミルデレッジが、動映機を持って捕まつたようなんですよ」「うわ大胆」
ホントにあの子、怖いもの知らず。けどそういうもの持つて入っ
たってことは、きっとコラソリ撮影してるんだろうな。

つい……。

「もしかしてそれって、その映像を公開したら、全部片付きません
?」

シーモアがあたしが考えたのと同じこと言ひ。

学院長が頷いた。

「他校に公開した、あることはすると詰め込み、事態は収束するでしょうね」

「やった!」

思わず手叩いて声上げちゃって、あたしまた慌てて自分の口を押
さえる。

「まったく、さつきから落ち着きなよナティ

「じめんじめん、でもすごいんだもん」

全員逃がすのに比べたら、映像持ち出すほうがずっと簡単。これ
なら何とかなるかもしない。

だけど当然、まだ問題はあるわけで。

「仮に上手く撮れたとして、どうやって持て出すかだね」

「うん……」

これ、意外に難関の氣がある。中へ入るつづまり掘まる」とだし、掘まつちやつたら外へ出られないし。

「何かいい方法、あるかなあ……」

「うーん、あたしもちよつと思いつかないね。けど動いてりや、そのうちなんか見えてくるんじゃないかな?」

「そうかも」

ちょっとといい加減かな、って氣もするけど、惱んで立ち止まっててもしようがないだろう。

ただ、ふつうに考えたら陽動かな、って思ひ。別のところで騒ぎを起にして、本当にやりたいところを手薄にする。

けどこれって、どの教科書にも載つてゐるくらい定番の作戦。だから教官たちも、きっとすぐ気が付いちやいそ。

それを上手く騙して映像が入つた記録石をもらつ方法が、なかなか考え付かない。

「困っちゃつたなあ……」

「確かに困るね。けどじで腐つてたつてしまーないよ

「うん……」

じついのほは、だいたいが時間勝負。時間が経てば経つほど、たいてい不利になる。だからなるべく早く、何か決めて動かなくちゃ。

「どうから、申つけなきやね……」

口でやつ言いながら、あたしはなんか引っかかつてた。

何か、って言われるとぱっととは出でこない。でも引っかかつてゐる。

やつと副学院長の「」と。

「副学院長、なんだよね」

あたしは口にしてみた。だつて「うう」とせ、眞葉に出してみると考えがまとまるから。

「副学院長がどうかしたのかい？」

「うん、あたしもよく分からんだけビ……ナビ、なんでこんなことするのかな？」

やつがよく分かんなかった。

「なんでつて、自分が偉くなりたいからじゃないのかい？」

「最後は確かにそうだけど。でも、でも……やつのうち靠くなれたと思つの」

自分で言つてみて、違和感の正体が分かる。

「そうだよね。

確かに先輩たちの居ない間狙つてゐし、教官たちもほとんどが副学院長の味方してゐるけど、今やる必要があつたのかな？ って思つ。 だつて今「副」学院長なんだから、そのまま普通に続けてれば、次は学院長に大抵なれるもの。

それを言つたら、シーキアも考え込んだ。

「確かにね……なんでリスク冒すのが、そこは分かんないね。メリットが少ない」

「でしょ」

学院長も頷いた。

「モジが私にも、分からないとこなのですよね……。わざわざ騒ぎを起しそば、失脚する可能性がある。そうなれば元も子もないのですから」

「ですよね」

今だつてちやんとお給料出しているはずだし、本校の副学院長なら次は学院長の可能性大。数あるモジの中でもいちばん有名な、シエラのトップは田の前。

なのになんで、こんな騒ぎ起しそのかな？ ピリにも理由が分かんない。

「うーん、定番の金じゃ？」

そう言つたのはシーモア。

「人間なんて大金積まれりや、寝返るやつ多いだろ」

「もうだけど……かなりのお金になりそり」

シエラって給料もそんなに悪くないけど、何よつすりぐく「格」が高いって、前に先輩に聞いたことある。だからモジを卒業しただけでも優遇されるけど、先生してたつてなるとビロジでも通用するんだ、って。

だつたらそこは副学院長までしたのに寝返ったなんて、自分を「モジ」貯めに捨てちやうようなもの。もつたいないつたらありやしない。

まあ頭が悪すぎて、田先のお金に釣られる」とはあるかもだけど

……でも副学院長、けつこう切れ者に見えるし。
そしたら、考え込んでた学院長がぽつと言ったの。

「そりいえば彼には、娘さんが居ましたね」「え、じゃあ誘拐？！」

「それだ！」

勢い込んで言つたあたしたちに、学院長が苦笑。

「まあ無いとはいいませんが……可能性は低いishなえ。そりでなくして、確か娘さんが何か、生まれつき大変な病氣らしいんです」

「え……」

これは予想外。

「じゃあ、その治療費つてヤツじや？」

「あるかも」

ベタすぎる話だけど、案外そつこいつのつて多いもの。ただ、ホントにそうだとすると……。

「なんか副学院長、許せないかも」

あたしの言葉に「分かる」つて顔でシーモアがうなづいた。けど、学院長は不思議そうな顔。

「何故ですか？」

少しだけ間を置いて、シーモアが答えた。

「だつて学院長、あたしらがそんな病気になつたつて、誰も助けに

なんか来やしないよ」

学院長がはつとした顔になる。

シーモアは言い出したら止まらなくなつちやつたみたい。

「そりゃ、自分の子供が可愛いのは分かるけどね。そのためにあたしがこんな目に遭うのかい？ 何が教師か、あたしらのことは一毛幾らで、自分の娘と引き換えてるだけじゃないか」

「…………」
言はずかしく思わなかつた。だつてウソじゃないもの。
あたしたちを、その娘さんより可愛がつて、なんては言わない。
言わないナビ、むうちょつと考へてほしき。

みんな家もなくて親もなくて、でもまあいいかなつてやつてるんだから、そつとしておいてほしきのよ。

しばらへ聞をおこして、学院長がため息みたいな声で言つた。

「…………気持ちは分かります。確かに理不尽ですか。けれど今は、それま後回しにしてしまつ。低学年を何とかするまつが先です」
「…………」

あたしもシーモアも、この話はここで終わりに。だつて学院長困らせたかったわけじゃないし、低学年をどうにかしなきゃいけないのはホントだから。

「それにしても、副学院長が何考へてんだか確かめたいね。」「うん。もしお金とか病院なら、案外ルーフェンに言つたら何とかなつちやうかもだし」

自分で言つてから、あつと黙つ。

お詫び

お休みを頂いてしまい、申し訳ありませんでした。

ほぼ体調がもどつましたので、ペースを戻します。またよろしくお願いします。

お知らせ

自サイトにて、期間限定でSFを公開中です。よかつたら下のリンクからどうぞ

またこれとは別に、異世界トロップの連載も始めました。
こちらはないうち内に掲載です。よろしくお願ひします

あとがき

新しい話を読んでくださって、ありがとうございます

前作とは一転、みんな揃つての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合いくといい。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

「「」の手があつたね……」

「あるねえ……」

「ありましたねえ……まあ実際に出来るかは、何とも言えませんが」

学院長つたら、さすがに面倒くんなさそう。

でも気持ちは分かるかも。あたしだって自分じゃ心配するだけなのに、自分より年下の子にあつたつお金で片付けられたら、すつじく微妙な気分になると思つもの。

「……どちらにしても、どうしてこんな」としたかは、副学院長に聞いてみたいよね

あたしが言つたら、学院長が頷いた。

「ええ。その辺りが分かれば、何か打開策があるかもしれません」

学院長の言葉を聞いて、やつぱりいい人だなつて思う。自分と学院をこんな目に遭わせてる副学院長のこと、まだ何とかしてあげようと思つてるんだもの。

相談すれば、よかつたのに。

そうしたら何もこんなマネしなくつたつて、いい方法あつたと思うんだけどな。

「何とかならんかね。副学院長だけ呼び出すとかさ」

「それで何とかなるなら、いくなつてないんじゃないかなあ

シーモアの言いたいこと分かるけど、ちよつと呼び出すのは無理

そう。だいいちそれが出来たら、苦労して無いと思つし。

それにもしても、何かいい方法ないかな……。

「娘さんのこと、確かめられないかね」

「うーん、本土まで行ければ出来ると思つけど」

けじこの状態で、船出せるのかな？ なんか無理そう。かといつて通話石は今使えるかどうか分からんないし、仮に使えても他の教官に聞かれちゃうだろ？」

正直八方ふさがり。けど必死に頭ひねつて何か動かないと、このままじや絶対にジリ貧だし。

そのときなんか通話石いじつてた学院長が、小さく声を上げたの。

「どしたんです？」

「それが……どうもタシユア＝リュウローンが、副学院長側に付いたと」

「え？」

耳を疑うつ、ついてこいつことだと想う。

タシユア＝リュウローンいつて、要するにルーフェが仲良し（？）のタシユア先輩。で、ルーフェが言つてはものつすごく強くてスキルも高いいつて。

そんな人が向こうに付いたら……絶対まずい。

「学院長、それヤバくないですか？」
シーモアの問いに学院長が頷いた。

「彼は案外面倒くさがりですが、何に興味を示すか分からないとこ
うがありますからねえ。面白そつだと思つたのかもしません」

「面白そつて……」

教官に脅されたとか、お金積まれたとか、せめてそつこつ理由こ
してほしいんだけど。

お読み

「もう大丈夫」と思つて無理をしたのが運のツキ。ヒドイ目に遭いました（涙）
ぱらぱらやつてこうと思ひます。よろしくお願ひします

お知らせ

自サイトにて、期間限定でUFを公開中です。よかつたら下のリンクからどうぞ
またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。
こちらはなるべく内に掲載です。よろしくお願いします

あとがき

新しい話を読んでくださつて、ありがとうございます
前作とは一転、みんな揃つての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合こ下さ
い。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5976s/>

家路 ルーフェイア・シリーズ16

2011年10月2日19時20分発行